
あれはね。

紫胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれはね。

【コード】

N0685X

【作者名】

紫 胡蝶

【あらすじ】

舞台は町にあふれる普通の歯科医院。

ようやく仕事にやりがいを感じ始めた恋愛に奥手な歯科衛生士と女ばかりの環境にまだ慣れない新人歯科医がおくる
仕事を通して綴られる 日常業務とプライベート

恋愛に発展するのか!!

友達どまりなのか?!

診療前

ごくありふれた歯科医院『さつき歯科』で歯科衛生士として働く私、
瀧野名塩たきのなじおは

分刻みの仕事を完全なる営業モードの笑顔で武装して次々とこなしていく毎日。

ドクターの指示のもと『心よいサービス』を心がけながら

治療の準備から補助 もちろん歯科衛生士として歯磨き指導から歯石や歯に付いた茶渋やヤニなどの汚れの除去などの口腔衛生指導などの予防を主にした治療を行う業務をしている。

ドクターの行動の先を読み、最小限の行動で素早く治療を進めていくのは

まるで頭の中でパズルを組み立てて片付けているような感覚で、細心の注意をはらって補助する事に最近ようやくやりがいを感じてきた24歳である。

・・・こんな言い方から生真面目だと思われてますが結構いい加減な性格で、いかにバレように手を抜く事が出来るかと日々考えているのですが
手を抜くのもめんどくさあゝくなって、
いつのまにやら、言われた事を言われた通りにしかできないマニュアル人間と化してしまいました・・・。

個性ねえな・・・私って・・・。

そんな、私が勤めているさつき歯科は

院長が女医で『竹下皐月』の下の名前を取って『さつき歯科』と命名されたというのが

命名のセンスがシンプルにモロバレで入ったばかりの頃に 先輩衛生士に

「なぜ竹下歯科ではなくさつき歯科なんでしょうね？」
と、素直に疑問を投げかけたところ

「女性は結婚すると苗字が変わるけど、名前は死んでも変わらないかららしいよ・・・」
と、想像以上に意味深長な返答をされ、どう反応していいのかわ戸惑った記憶がある

そんな理由からなのか
ここで働くスタッフは下の名前でお互いを呼び合っている。

もちろん、院長も『院長』とは呼ばれず
『サツキ先生』と呼ばれている。

そして、

私もスタッフには『ナジオ』と呼ばれている

ノリは幼稚園の先生か小児科の先生のようにだといつも思う。

そんなさつき歯科には

ドクター3名・歯科衛生士3名・歯科助手3名・受付1名・パート
& アルバイト5名所属しており、治療を行うユニットチェアを5
台とカウンセリング用の個室を1部屋保有していて、一般の歯科医
院としては大きめの規模である。

うちの病院では早番・日勤・遅番の三つの役割を

『ドクター組』『衛生士組』『歯科助手組』がそれぞれローテーシ
ョン当番するのだが。

ドクター1人・衛生士1人・助手1人がペアーを組んで必ず週に1
〜2回の遅番を担当する事になっているのである。

診療前（後書き）

初めての作品を投稿しましたので、ドキドキしています。

拙い表現と文章ですが

誤字脱字を含め内容等に不具合がありましたら、
教えて頂けると大変ありがたいです。

宜しくお願いいたします。

診療前準備・1

『本日の最終責任者』は遅番担当のである私
さつき歯科では、歯科衛生士がローテーションを組んで『本日の最終責任者』を担当する事になっている。

本日の業務を終了し

高校生のアルバイトの女の子達に掃除と片付けの指示し

自分も受付の片づけにかかっていた。

カルテの治療内容をパソコンに入力して

入力済んだカルテに入力済みのスタンプを押している

今日の分の自分が担当した患者さんのカルテを抱えてドクターの赤あか
松新まつあらたが「お疲れ様です」と声をかけてきた

さつき歯科の中で

アラタ先生はドクターの中で一番若いドクターでさつき歯科に勤め
始めて1年もたっていない新人で、

私は歯科衛生士の中では一番若手の、働き始めて4年目

年齢にひらきのあるさつき歯科の中では一番歳の近い者同士である。

私は手に持っていたカルテから一瞬顔を上げて

ニッコリと得意の営業スマイルを浮かべて「お疲れ様です。」と挨拶するが、もちろん礼儀的に挨拶しただけなので、すぐに作業にもどる

すると、不意に

「ナジオさんは、カルテの書き方や字の書き方がとても丁寧で読みやすいですね。」

と、アラタ先生から話しかけてきた

今日、初見の患者さんの状態を記入していた文字の事を言っているのだろうと思つて口を開く

「私よりも綺麗な読みやすい字でカルテを書いているアラタ先生にそう言つていただけで光栄です。サツキ先生（院長）やコウイチ先生（副院長）のカルテなんて殆ど文字ですらない暗号ですからね。」と、社交辞令に対してさりげなく軽い毒を織り交ぜて適当に返事しておく

内心、早く帰りたいんだから、話しかけてくるなよな

程度の思いも言葉ではなく雰囲気で醸し出しておく……。

実際、文字と云うより暗号の羅列に近いカルテの解読は、ある程度の知識とドクターの癖を知っていなければ解読は不可能である。

最近では、カルテやレントゲン写真などをすべてパソコン入力されている病院が増えているのだが、さつき歯科では未だに手書きが採用されている。

8

（あれ絶対、サツキ先生が機会音痴だからだよー！！）
つて、お局達が話しているのを聞いたことがある……
デジタル化されたらいろいろ便利になるので、頑張つて！！サツキ先生！！

と、顔にも口にも出さずに心の中で叫んでますが、実現される見込みはまだありません……。

で、話は戻つて

諸先輩方の悪筆は勉強の為に、院長や先輩ドクターの担当の患者さんのカルテを見ていて、カルテの“暗号状態”を解読するのが困難だとアラタ先生も感じていた事のように

私の返事を聞いて一瞬苦笑いをしたアラタ先生は「そういう意味で

はなかつたんですけど・・・」

と、私の毒を諸先輩方を立てたいのか小さく否定して濁した・・・。

正直になれ！アラタ先生！！

・・・って正直に「そうですね」って言われてもそれはそれで反応に困るけどね。

私の営業スマイルと小さな毒で

世間話をするような雰囲気ではないと悟ったらしいアラタ先生は

「今日の分 終わりました、これお願いします。」

書き終わったカルテを私に預けて「お先に失礼します。 お疲れ様でした」と言って診療室を出て行った。

うん、見事な引き際。

私の無言の圧力に気づいたとは、アラタ先生もなかなか見どころがある。

(なんの見どころ?!)

アラタ先生は歯科医師としては経験が少ない為にやや頼りなく

長く務めている歯科衛生士や歯科助手などにややぞんざいな扱いを受ける事が多い。

私は、自分も新人の時は頼りなく

オロオロしてばかりいた過去があるので人の事は言えないと思っ
ているし

仮にも上司にあたるアラタ先生のプライドを傷つけないように接
しているつもりである。

それが伝わっているのか、年が近いせいなのか判らないが

先日、アラタ先生は私が専属でアシストについて欲しいと思っ

るらしいと、アルバイトの女の子が耳にしたと言っていたが、
人事に関しては私にはどうする事も出来ないし 触れる必要もない
ので

話しは軽く流して終わっておいた。

そういう事は、聞かなかった事にするのが一番。

実際、新人ドクターであるアラタ先生に衛生士の私が専属にアシストに就く事はない。

私の優先順位は、衛生士業務 院長 副院長 後輩の教育 アラタ先生である。

どうしても、手が必要な時や今日のような同じ遅番の時だけしかアシスタントにつかない。

それが、仕事を円滑に回すために必要な事だから仕方がない。
本来ならば衛生士に指示して任せても構わない業務でもアラタ先生は自分でやっている。

一通りの治療は出来なければならないという事がというのが大きな理由らしいが

『衛生士に任せてしまうと、アラタ先生のする事が無くなってしま
うから自分でやっている』と云うのが現実である。

私はアラタ先生から預かった『私よりも綺麗な文字』で書かれたカ
ルテをカルテ棚に片付けた。

本当に読みやすく綺麗な文字なこと。

男の人で字が綺麗で・・・なんかいいね・・・。

診療前準備・1 (後書き)

舞台は歯科医院です。

専門用語がちらほら出てきますが、判りやすい解説がつけられるように頑張ります。

・・・逆に、難しい事は書けないので、大丈夫かも(汗)

診療前準備・2

アルバイトの女の子達から掃除が終了した事を報告され
後輩である歯科助手の松田由紀と一緒に水道・ガスの元栓を閉めた
かを「水道よし！ガス栓よし！」と指差し確認を行う。

いつも思うが、意外と体育会系な確認方法だねえ、とユキと笑い
ながら

メインスイッチとコンプレッサーの電源を落とした。

電源を切ったコンプレッサー内から残ったエアの出るシューと云
う耳に痛い音を聞きながら

駅前のお店のケーキが美味しいなどとワイワイと騒ぎながら更衣室
で着替えを済ませた。

アラタ先生は先に帰ったらしく更衣室の扉が開けられて明かりが消
されている。

(使用しない時は扉を開けておく事になっている。)

電気の消し忘れがないか、電化製品の電気の消し忘れやコンセント
の抜き忘れがないか

これもやはり指差し確認で「電気よし」と言ってから戸締りをした。

コンセントや元栓を1つでも抜き忘れ、閉め忘れなどがあると
翌日大目玉を食らう羽目になるので、しっかりと確認しなければな
らない。

お局達は、本当に神経質で困る……。

いや、私が横着過ぎるのか？

でも まあ

診療終了後の診療室や更衣室は完全に無人になる為、

『コンセントから漏電して出火!』や『窓を閉め忘れて泥棒に侵入される!』

などの事態が発生して、

『翌日出勤したら診療室が大変な事に!!』

なんて事にならないように注意しなければならない。』

それはもう、口を酸っぱくしてとはこの事かと思う程に強く先輩やサツキ先生に言い渡されている。

言っている事はとても正しいのだが

閉め忘れたり、切り忘れしたりしたのを発見した時に

先輩達が犯人を見つけると

「うっかり忘れました」なんて言葉は言えないぐらいの勢いで説教される。

新人の頃はあまりにも恐ろしさに、閉めたかどうか不安になって

家に着いたのに、確認のためにもう一度診療所に来て確認した事など

1度や2度の話ではない

患者さんの大切な個人情報や高価な器具などを失わないようにという事は

理解できているのだが・・・

ここまで言われると単なる先輩達のプライベートの憂さ晴らし的な八つ当たりか?!

と、最近は思い始めている・・・。

違うと思いたいのだが・・・。

たった一日コンセントを抜き忘れただけで漏電して火事になるような古い器具は使っていないし、掃除を怠っている訳でもない。

要するに

『お金を貰って働いているのだから、指示された事を間違いなくする事が仕事だ』

とでも言いたいのだろうと解釈しておく。

通用口の前で、自転車で来ているユキとアルバイトの女の子達と別れ
今日も疲れたな。

なんて思いながら駅に向かって歩き出したが、気を抜いた顔などし
て歩く訳ないはいかない。

昨今 歯科医院は街にあふれかえっている状態で

ご近所の評判によって患者数が左右される為

自分の働くさつき歯科での周りでは

あらぬ噂を立てないように気をつけるようにとサツキ先生に言われ
ている

きちんと言いつけを守り

駅に行く道すがら見知った顔を見かけてはきつちりと挨拶をする

『家に帰るまでが遠足です』それを日常的に実行しているような気
分にすらなってきた。

っていうか、私が外面がいいだけなのかもしれない……。

診療前準備・2 (後書き)

指さし確認って・・・。

ナジオとユキは意外と天然というか、言われた事を言葉どおりに実行する人達のように・・・。

診療前準備・3

「お疲れ様です」

駅のホームでメールチェックをしようと鞆から携帯を出した時に先に職場を出ていたアラタ先生が携帯をポケットにしまいながら声をかけてきた

職場の白衣姿とは打って変わって、ラフな服装をしたアラタ先生は診療所で会った時と少し印象が違う気がする。

職場では、『新人!』と言う文字が全体から滲み出ているかのような頼りない印象があるのだが、

私服姿のアラタ先生は『学生の雰囲気はまだ残したままの社会人』
って感じで、

若者独特の根拠のない『自信』のような物も少し感じられる印象である。

この自信が仕事でも生かされたら、スタッフ皆の対応も変わってくるのになあ〜と

心密かに思ってみたが口には出さないでおく。

アラタ先生と私の家は反対方面なのだが、

小さな駅なので上り下りのホーム同じで、電車待ちをしている時に遭遇する事はしばしばある。

同じ日に遅番があるから当たり前なんだけどね。

いつもならば、

職場の人と職場以外で接したくはないという思いがあるので、

顔を合わせても、挨拶をして通過して微妙に車両の乗り口をいつもと違うところに変えたり

面倒なので、気付かれないようにこっそりと後ろを通過したりしている。

しかし今日は、なんとなく携帯を鞆に直して「お疲れ様です」と挨拶

拶を返した。

携帯を鞆に直した事で会話をしても構わないのだと判断したのか
アラタ先生は通路の邪魔にならないように私の近くに立った

「今日も忙しかったですね」

長期の連休明けだった為、新患しんかん（初めて来院される患者さんの事）

が最近多く来院されたので最近バタバタと動き回る日が続いていた。

「本当に今日は忙しかったです。アラタ先生の患者さんも増えてきましたから

アポ（アポイントメント）予約の略）の調整をするのが大変になってきましたね」

比較的簡単な治療で済む患者さんをサツキ先生の采配でアラタ先生に回ってくるが

私はアラタ先生が新人ながらも親切丁寧な適切な対応をしていると高く評価している。

一度で来なくなってしまう患者さんはたまにいらっしやるが

治療の必要性を判りやくす丁寧に説明している姿勢が患者さんには受け入れられている様子で、最近では通院されているアラタ先生の患者さんの紹介で来院された新患の人が

アラタ先生を指名する事も多くなってきた。

良い傾向だね。

このまま、アラタ先生の患者さんが増えて行ってくれたら・・・
・うん、正直嬉しい。

「僕なんて、まだまだです」

少し照れたように下を向きながらアラタ先生はそう言った

「先生が丁寧に治療して下さるから 患者さんも安心して最後まで治療しようと通院して下さるんだと思いますよ」

私にしては珍しく、社交辞令でもなんでもなく素直に言ってみた。
「ナジオさんにそう言っていただけなんて嬉しいですね　なんだ
か自信が持てそうです」

笑顔で答えたアラタ先生に、
「そうですよ。自信持って下さい。」と、私もつられて笑った

「あ、それと前々から言おうと思っていたんですけど

私に敬語で話さないで下さい。私の方が先生より年下ですから」

「でも、僕の方がさつきに後から入ってますから」

アラタ先生は少し困ったような顔している

「後から入ってしようと、先生はドクターですから。」

敬語をやめる事でバイトの女の子達も先生への態度を改めると思いますが、
「まずから」

さつき歯科は意外と上下関係がうるさい。

ドクター＞歯科衛生士＞歯科助手＞パート&アルバイト
という力関係がある。

ドクターであるアラタ先生が先に入ろうが後に入ろうが

ドクター以外のスタッフの女の子の上司になるのである。

体育会系なノリで『先に入った者が先輩』と思うアラタ先生の考えは

私たちが下の方にはありがたい優しさであると思うのだが、

アラタ先生の優しさを勘違いしている先輩や後輩が横柄な態度でアラタ先生に接する事がある

それを見ているアルバイトの女の子達が真似して、

アラタ先生に横柄な態度で接している処を目にする事がある。

目撃したらアルバイトの女の子達には『ドクターに対して行う態度ではない』とやんわりと注意はしているのだが、それを容認しているアラタ先生にも非があると感じていた。

慣れない女ばかりの職場に未だに戸惑いを感じている事は伝わってくるが、

それとこれとは別な話し

やはり、締めるところは締めて貰わないといけないと、前々から思っていた。

「ナジオさんは律義ですね」

笑いながら小さく呟いたアラタ先生に

「律儀というか、融通が利かないんですよ。」

でも、先生の優しさは さつき歯科では女の子達の為になりません。女の子達が何を言おうと先生の方が上ですから」

顔の前で人差し指を立てて念を押すように云うとアラタ先生は何がおかしいのか小さく笑っている。

「僕は、スタッフとはギスギスした関係よりも、

アットホームな和やかな関係で居たいだけですよ。」

「……………」

そう言われると、私の発言は単なるお節介って事になるじゃない！

先生の事を心配して言っているのに……

と、少し膨れていると私が乗る方面の電車が到着した

「ではお先に失礼します」

と言って軽く頭を下げてさっさと電車に乗り込んだ。

アラタ先生は電車の扉が閉まると私に小さく手を挙げて見送ってくれた。

診療前準備・3（後書き）

以前働いていた仕事場の最寄り駅が

うっかりすると、ラッシュ時に各駅停車ですら止まらない小さな駅
だったのを思い出しました。

そんな小さな駅だったら、コソコソ隠れれないと思うけど・・・

ナジオは意地でも顔を合わせないように頑張るのでしょうか（苦笑）

そんな光景、ちょっと傍から見て見たいかも（笑）

診療前準備・4

私は家に着いたら真つ先にお風呂に入る習慣がある

昔付き合っていた彼氏に「病院臭い」と言われた事が切っ掛けで始まった習慣で

自分ではあまり気にならなかったが、思った以上に病院独特の消毒の匂いが髪や体にまとわりついていているらしい。

仕事終わりに少し香水をつけたりするのだが、やはり独特の臭いはすぐには消えてくれないようである。

バスタブにお湯を張ってお気入りのバラの香りの入浴剤を入れ、ゆっくり湯船に浸かって一日の疲れをお湯の中に絞り出すかのようにマッサージをしながら寛いだ。

実家に居る時は、あまり長湯はしなかったのだが、今は気ままな一人暮らしなので何時間入っていようと誰からも文句は言われないので

自然と長湯の習慣が出来てしまった。

浴室に防水のCDプレイヤーを持ち込んだり

仕事が休みの日には、雑誌や本を持ち込んで半身浴などをしたりしている

最近、家の中で一番落ち着く場所はお風呂になったような気がする。お風呂を出る時に浴槽を綺麗に洗って、

明日帰ってきてすぐにお風呂にはいれるように掃除して出て行くのもすっかり習慣になってしまった。

めんどくさい事を後回しにするともっと面倒な事になる事を一人暮らしをしていて学んだ。

なので、嫌な事はさっさと済ませるに限る！

十分に温まった体をタオルで拭いてさっさと部屋着に着替える、

お風呂場を出て濡れた頭を拭きながら真っ直ぐにCDコンポに歩み寄りスタートボタンを押した。

バスタオルを頭に巻いて、床に座って胡坐をかくと

CDコンポに入れっぱなしになっているCDの曲が流れだす

甘ったるい歌い方をする女性ボーカリストの声が印象的な静かなジャズで、

目を閉じれば、ちょっと小粋なバーに居る気分が味わえるような曲である。

少女の様な甘ったるさで愛の歌を囁く曲はなんだか自分の不器用さを慰めてくれているようで、なんとなく気にいって最近良く聞いている曲なのである。

私がテレビをつける事は少ない。

ニュースや天気予報などはラジオや携帯やパソコンのニュースでチェックすれば問題ないと思っている、

だから、家に居る時にテレビを使うのは

レンタルビデオを借りてきたのを再生する時か

幼馴染の東條漣（とうじょうみづな）が部屋を訪れる時ぐらいである。

私にしたらテレビは置物と同じ扱いかもしれない……。

頭を拭いていたタオルを器用に頭に巻き付けると

机に置いてあったタバコと灰皿を引き寄せて火を付ける

仕事を一日頑張った自分へのご褒美かのように

1本のタバコを楽しむようにゆっくりと紫煙をくゆらす。

『歯科衛生士のくせに』と、いつも喫煙時に自嘲気味になるが
どうしても禁煙する事が出来ず喫煙を続けている

吸えない状況であれば何時間でも吸わずに過ごせるのに

吸える環境になると何本でも吸ってしまう自分の意思の弱さに苦笑

いである。

気づいていても、どうしようも出来ない甘さが出ている。

外でタバコを吸おうとすると、喫煙エリアを探して彷徨わなければならないので、

もっぱら自分の部屋でしか吸わない。

ホント、最近の世の中は 喫煙者に対して厳しい!!

だから、喫煙している患者さんに『控えて下さい』などとは言わないようにしている。

ただでさえ、肩身の狭い思いをしているのに、病院に来てまで「辞めろ」って言われたくないでしょ?!

私自信も辞められないのに、人に辞めるように勧めるなんて出来ない!!

体に悪いのは100も承知!!

私みたいに、誰にも迷惑かけなければ喫煙しても良いじゃない!! と、誰に伝える訳でもなく 心の中でまた叫んでみる。

私、心の叫び多いよな。。。

タバコを吸いながら思う・・・

子供の頃からガサツで横着な性格な私は

今の仕事を始めて、ようやく落ち着く事を覚えたのか

仕事の時ぐらいはと意識して丁寧に物事を進めて行くようになった
昔の自分がしていた事を思い出すと

顔から火が出てくるような恥ずかしい事の連続で

二度とあんな恥ずかしい思いをしないようにと努力をしているのだが
やはり地は隠せないようである。

幼い頃は親の前で「いい子」になりたくて素の自分を出せなくて息
苦しかった

そんな息苦しさから解放されたくて就職と共に家を出た

タバコを吸っている私を見たら 親は卒倒するだろうか？

そのまま受け入れてくれるのだろうか？

考えても答えの出ない疑問がふと頭をかすめる。

親に私は何を期待しているのだろうか・・・。

至福の1本吸い終わってから

私はゆつくりと柔軟体操を始めた

体は180度開脚をしながら前屈して肩を床につけれるぐらいに柔らかい。

社会人になってから体を動かす時間が少なくなったので体が硬くなって予想外の行動で怪我をしたくなかったのでお風呂上がりに柔軟を続けている。

スポーツジムにでも通う事も考えたが

身近な場所にスポーツジムがない為に実行には移していない。

一度家に帰ってからまた家を出るのも億劫だし

仕事の帰りに電車で家とは反対方面の電車に乗ってまで通うのも嫌だし（基本、めんどくさがりなもので・・・）

なので、お手軽に始めたのが簡単な柔軟体操と早朝散歩。

早朝であれば、意外と犬の散歩をしている人が多いので

防犯面も考慮して、朝に軽い散歩をして 夜には柔軟をする

予想以上に、体の為になっっているらしくすこぶる快適に毎日を通している。

ゆくゆくは、

一人でハイキングに出かけたりしたいとも考えているが未だ果たせてはいない。

黙々と、柔軟体操をしていると、突然机の上に置いてあった携帯のメール着信音が部屋に響いた。携帯の液晶画面にはメール着信のマークが表示されている。確認するとミオからで「海に行こう」とだけ書いてあった。そのごく簡単なそのメールに私も「了解」と短く返事を返し、晩御飯を作る為に台所に向かって立ち上がった。

診療前準備・4（後書き）

匂いって結構きになりませんか？

ふとした時にかおる匂いはやはり
爽やかな物だと好印象ですよね！！

ナジオの日常の香りは

「病院の匂い」か「タバコの匂い」みたいですね。
女の子としてどうなんでしょうね・・・。

診療前準備・5

「やっぱりバイクって気持ちいいね〜!!」

シルバーの半ヘルを被った幼馴染の東條澗は

私のシルバーカラーの愛車のタンDEMシートから上機嫌にそう叫んだスリム化されたネーキッドタイプの単車なのでタンDEMシートはとても狭い。

(というか、もともとタンDEMシートとしての機能は望めない)

しかし、女性同士のタンDEMなので圧迫感はありません

同じくシルバーのフルフェイスを被った私も前を向いたまま「ですよ!!」とタンDEMシートのミオに向かって叫ぶ。

ミオは私の腰に手を回し背中にベッタリと抱きつく形でタンDEMシートに座っている。

私はバイクの教習所以外でタンDEMシートに座った事がないのでミオのような姿勢で彼氏のバイクの後ろに乗る事がちょっと憧れだったりするが

実際乗れるような機会があったとしても

変なプライドからミオのような体勢でタンDEMシートに乗る事はないであろうと想像する。

余談だが、

バイクのタンDEMシートに座っている女の子に

『膝でしっかりシートをはさんで体を固定させないと

急にスピードダウンした時に勢いで運転手側に滑って 運転手がタンクに挟まれて

大変痛い思いをする羽目になるよ!!

と、声を大にして言いたい!

女性でも挟まれるとかなり痛いけど

男性だったらそれはもう可哀そうな事になりますので気をつけてあ

げようね!』
と、声を大にして訴えたい!!

・・・って、実際には言わないけどね・・・。

私は、何度言ってもしつかり膝で固定してくれないミオのおかげでスピードの落とし方・ブレーキのかけ方はかなり上達したと言ってもいいかもしれない。

いや、もしかして、私がタンクを挟む足の力がなさ過ぎて、勢いに負けて前にずれてくるミオに押されて挟まってるだけかもしれない・・・

だって、ジーンズで乗ると、タンク滑るんだもん!!

あ!

でも、背中に当たる感触がうれしくてキューブレーキかけちゃう男性もいるかも?

タンクにパッド張ってるのも見かけるしね・・・

まあ、それは、お互いに話し合ってただね

って、そんな会話普通しないか・・・。

そんな私の密かな悩みもビックスクーターだったらそんな心配もないのだが、

やはりネーキッドタイプのバイクに憧れて免許を取ったので乗り換えるつもりはない。

最近は女性でも二輪免許を持っている事が多くなったが

やはり、女性が運転するバイクでタンDEM走行をしている人は珍しい昼間に信号待ちをしている時などに体のラインからすぐに女同士だと判るらしく

「頑張れ〜!!」と、何を頑張ったらいいいのか意味不明な応援が飛んでくる事もしばしばある

いつも不思議に思う・・・なんで、応援されてるんだろって・・・

私、応援したくなるほど必死に運転してる？

いまだに、その謎は解けない・・・。

家から1時間程走らせた海の近くの駐車場にバイクを止めた
浜に出てみると、結構有名なデートスポットなので

予想道理に数多くのカップルが闇に紛れるように寄り添って座っている。

なかには、寄り添うどころか抱き合っているカップルまで居る。

「なんで夜景の綺麗なスポットにはこんなにカップルが居るんだろ
うね。」

小さく毒づいた私に

「そりゃ、暗いからよ」

と、サラリと答えたミオは、どこに座ろうかと場所を物色し始めた。
カップルが良く見える場所に陣取るつもりらしく

キョロキョロとあたりを見回し「ベストポジション発見！」と言いつ
ながら街頭近くの

コンクリートの階段に座り込んだ

悪趣味だ・・・

付き合わされてる私に取ったら悪夢以外のなにものでもない

・

そう思うが、面白い観察ができそうなカップルを物色するように、
あたりを見渡しているミオを積極的に止める事が出来ず、隣に黙っ
て座ることにした。

診療前準備・5（後書き）

よく、友達とバイクに乗っている時に隣に並んだ車の窓が スーツと開いて

「頑張つて！」

つて、言われました・・・。

何?! 私 応援しないとイケないぐらいヤバイ運転してた?!

フラフラなの?! 立ちゴケしそうに見えるの?!

つて、疑問符の嵐でした・・・。

ヒョロこいのがヒョロこい単車でニケツしてるのが珍しかったから
だと思いたい・・・。

診療前準備・6

「で、最近どうよ？」

何の前触れもなくいきなり言った私の発言は、

遠距離恋愛をしているミオの話を聞くつもりで言ったのだが

「どうって何が？」

あんた何の脈絡もなく話を始めるんじゃないわよ」

と、手痛く返されてしまった。

ミオも外面はいい方なので、いつもは丁寧な話し方をするのだが、私と居る時は、地が出ると云うべきか話し方がいつもザツで辛口になってしまう。

ミオの口が悪い事は判っているのだが、予想以上にきつい返事が返って、来て少しムツとした私の雰囲気悟ってか

ミオは悪戯っ子のような笑顔を浮かべて

「なに カップルばかりいるから気まずくなってきた？」

あそこ、見てみい 熱々く 超至近距離で見つめあっちゃってる

もうすぐキスでもするんじゃない？ あそこもよ！！」

小声ではしゃぐミオに思わず大きな声で突っ込みそうになるのをぐっと堪える

ここはデートスポットで公衆の面前です！ナジオさん！！

と、自分に言い聞かす。

「な、何っ？！ もしかして 人がイチャこいてる所を見たくて夜のデートスポットに来たんじゃないでしょうね？！」

「ああ、あんた今 顔赤いわよ」。もお ウブなんだからうってか、人間ウオッチングと言いなさい」

いやいや、人間ウオッチングってあんた・・・やっぱり趣味

悪いよ・・・

しかも、ウブって・・・久しぶりに聞いたわその単語・・・。

仕事私の私は、ある人物のせいで聞きたくもない事を囁かれ続けたおかげで(？)

ミオが思っている程、ウブではない・・・と、思う・・・。

仕事申中だったらスルー出来るのに、何故この場でスルー出来ない?!言葉で聞いても意味分からないからイメージ出来ないから

平気でスルー出来るけど

映像として認識してしまうとスルー出来なくなっちゃうのかもしれない。

頑張れ! ここは職場だ!

平常心を保つのだ!

と、心の中でポーカーフェイスで居られるように自分自身に言い聞かせていたのだが・・・

できなかつた・・・。

隣の、ミオの野次馬オーラが私を現実から逃げさせてくれな〜い(涙)

なら、会話をして気を紛らすまで!!!

「ねえ・・・人がイチャこいてるのを見て、あんた楽しいの?」

・・・って、超ガン見してるし!!!」

チラ見ならともかく、ガン見しているとは思っていなくて

ミオのその行動に軽くうるたえてしまった私は、

もう、この場からの逃亡を図るしかない!と、立ち上がろうとしたが、

そこはもう付き合いの長い幼馴染、私の行動などお見通しで、

立ち上がる前に肩をガツチリ押さえられ無理やり座らされる

「何言ってるの、ベタな恋愛ドラマをライブで見てると思えばいいのよ!!」

向こうだって人に見られてるって判っててあそこでイチャこいてるだから

見られる方が燃える人も居るしね」

「ライブで他人の恋愛ドラマなんて見たくもないわ!!」

私の肩をがっちり掴んで離さなかったミオはにっこりと完璧な笑顔を浮かべながら

「だ・か・ら・よ!! あんたの敗因をここでじっくり反省しようって言ってるんじゃない」

と、おっしやいました……。

……やっぱり、この子……恐ろしい子。

「場所が悪い。

何もこんな処で私に彼氏が出来ない反省会なんてしなくてもいいでしょうが!」

「はい、ぎゃーぎゃー騒がないの。

あんたのせいで周りの雰囲気台無しになってるから。」

そう言われて、思わず周りを見てみると

何の騒ぎかと周りのカップルが私たちの方を見ていた

~~~~~!!

やってしまった……私のばかりあ!!

さっき誓った自製の心はどこに行ったよ……。

ミオは営業スマイルを浮かべて周りのカップル達に軽く頭を下げて

集中した視線を軽く振り払った

私もつられて必殺技の「目で笑顔」で軽く頭を下げる。

仕事中は常にマスクをしているので、

私の感情を表す表情は目だけである。

なので、患者さんに安心感を与えるために、目だけで笑顔だと分かるような表情をするのは

私の必殺技である。

学生時代に担任の先生に「目で笑え!」と言われて鏡の前で無理やり練習させられたものだ」

あゝあ、懐かしい。

私が昔を懐かしんでいる間に

カップル達は私達がおとなしくなった事を確認して  
また自分たちの世界に帰って行ったようである。

未熟者でごめん・・・カップルさん達の世界にお邪魔してホントごめん・・・(拝)

## 診療前準備・7

「で、敗因は何？」

ようやく落ち着いた私に

静かに投げかけられた言葉を聞いて

自分自身の恋愛事情について思い返してみた。

母は事ある事に

「女性は結婚するまで貞操を守る」的な発言を繰り返していた

この刷り込みのおかげで世の未婚女性は全員結婚するまで貞操を守ると信じていて疑わず

『授かり婚』で結婚する事になった女性は、凄い悪い事をしている人だとさえ思っていた

こんな話は絶対に人前でしてはいけない事だと思い積極的にその手の話題には参加せず、

ミオも私に恋話をするようなキャラではないと判断していたためわざと話をしなかつただけなのだが、

それが今の状態の原因だと判断したミオは最近になってやんわりと恋話をするようになってきた

が、長年のマインドコントロールのおかげで時すでに遅く

雑誌等で軽く掲載されているだけでも恥ずかしくなって、

凄い勢いでページを飛ばして読まない努力をしよう程、恋愛に対して臆病になってしまっていた。

でも、ページを飛ばす時点で

超興味あるんだろうね・・・多分・・・

興味があるけど、恥ずかしくって読めない・・・。

なんだろうね、この徹底的な回避具合は・・・我ながら不思議だわ。

私は少し「男性」と云うものに抵抗を感じている  
とくに、切っ掛けと云うものはないのだが、なぜか「苦手」なのである。

過去に何人かの男性と「彼氏彼女の関係」になつた事もあるのだが  
どのように接していいのか判らず、「友達」感覚で付き合い始めて  
「友達以上」を求められ、期待に応えられずにすぐに別れる事にな  
ってしまうのである。

それをミオに伝えると

「あんた、相当強い呪いをかけられてるわね、あんたのお母さんも  
魔女の資格ありよ」  
と、言われてしまった。

人の親捕まえて魔女って……。

「……魔女って……ううん、でも、魔女かも……」

ミオにそう言われてしまうと、魔女以外の表現方法が思い浮かばな  
くなってしまう……。

「呪以外の何物でもないでしょ、」

今時彼氏いて、やるタイミングがあるのに彼女が心も体を開かない  
なんて……」

「まあねえ……って、あんたもうちよつと言葉選んだら?!」

「いいじゃない、誰が聞いている訳でもないんだから」

あんただから言ってるのよ。他の人だったらもうちよつと言葉を選  
ぶわよ」

「なんの告白?! 私にも言葉を選んでくれないのよ?」

「遠慮するわ。あんたに言葉を選ぶ必要なんてない」

『私って愛されてるう』と、遠くを見ながら私はまた話しだした。  
「なんかね、」

人としての器が小さいって云うか『この人なら!』って云う確信が

持てなくてね」

「器って・・・あんたも言い方選んだら？」

ニヤニヤ笑うミオに

キョトンとした表情で

「・・・選ぶような表現なんかしてないと思うけど？」

と、答えると

ミオは小さく舌打ちをした

「チツ、まだ乗ってこないか・・・まあいいわ。じゃあ、どんな人ならいいの？」

と、投げやりに聞いてきた。

って、

今、チツって小さく舌打ちしたよね？！

話題に乗ってこなかったからって舌打ちかよ？！！！

しかも投げやりってどうゆうことよ？！！

・・・とりあえず、ミオに何を言っても無駄なので、気を取り直しまして・・・。

「んとね、

力強い人って云うか、世界が破滅しても生きていけるような器の人かな」

「あんたは彼氏にゴキブリ並みの生命力を求めているの？！

ってか、あんたファンタジーの読み過ぎなんじゃない？！

勝手に世界が破滅させないでくれる？！

世界が破滅したら間違えいなくあんた存在してないわよ。

ってか、今までヒョロってした人ばかりだったよね？！趣味じゃなかったの？」

怒涛の突っ込みなんていつもの事

1言えば10は帰ってくるが

今のは100帰ってきた気分・・・

とりあえず、最後の質問にだけ返事をする  
それもいつもの事

「うん、『優しい』と『優柔不断』を勘違いしてた  
優しいけど、『俺に着いて来い』的な人がいいけど、なかなかそんな  
人と出合いがね

最終的には『お友達』になっちゃって別れちゃうのよね」

「あんた以上に『男らしい男』なんてなかなか居ないからね」

「心優しい戦国武将みたいで、話が出る人がベストなんだけどね  
・  
・  
つて、私そんなに男前な性格なのかな？」

「平成の世の中には戦国武将はその辺に転がってないわねえ〜  
つてか、バイクで女友達浜辺に連れて来れる奴は十分男前よつてか、  
あんたの方が武将ね」

「私が武将?! なら今まで付き合ってたのは家来?」

「家来よつていうか、公家じゃない?」

「あ、なんか適格。公家だわ。頭はいいんだけど『麻呂』つて感じ  
「麻呂かよ! それに話が出るつて 麻呂達が雅過ぎて武将との会  
話が成立しなかったの?」

「いや、会話つて云うか 私が持つてないような知識があつて  
会話の意図をすぐに悟つてくれるような頭の回転が良い人がベスト  
だつただけだね」

「会話はキャッチボールつて言うけど、居なかったの? そんな人?  
「勉強は出来る人ばかりだったけど、生きてきた環境があまりに  
も違い過ぎて

物事の論点がまず違つて、会話するのがしんどかつたのよ」

「一流大学出身ばかりだったからね。勉強が出来ても会話の着眼  
点が違つと痛いかな

コメディ映画を一緒に観てて 笑うポイントが違つと、ちよつとイ  
ラツとする感じ?」

「そんな感じ。痛いよ〜 一般常識と世間に対する着眼点が違つとな



んか自分の頭の悪さが光るって云う か、同じ物を見ていても 角度がまったく違うから同じ事を言ってるんだけど

会話がかみ合わないから理解するのに時間がかかるのよ」

「それは辛いね」

「自分の言葉で話をすると勘違いされて、話がややこしくなるから相手が判る言葉を選んで会話すると同時通訳してるみたいに頭フル回転でさ〜、

仕事以外で脳みそフル回転してたら 頭フラツフラで倒れそうになつたわよ」

「それですぐに別れちゃう訳だ。」

「でも凄いのは、先に根を上げるのは向こうだからね！体力勝負では常に私が上なのよね〜」

「何の自慢？！ってか、頭脳勝負じゃなくて、体力勝負だったんだ・  
・・。」

ミオは呆れた表情を浮かべながら私を見ると

「持久力はかなり必要だったと思うよ。」

真剣な顔をして私は言いきる

今までの恋愛はマラソンのようなものだと感じていた。

横に並んで歩きたいだけなのに、なぜか相手を追いかけて走ってしまい

気づいた時には、相手を追い抜いて独走してまっている・・・。

「頭使うわ 体開かんわで 彼氏も早々に退却って訳ね。賢明な判

断だわ」

ミオは溜息をつきながらそう呟いた。

　　どんだけ、開けっぴろげな発言なんですよ・・・。

そこは、あえて無視して流す・・・。

「拳と拳の戦いの末の友情というか、敵の前で背中を預けられるような信頼感なんか持てたらベストなんだけどね」

「ナジオさん、背中を預けないと切り抜けられない敵には、なかなかお目にかかれなと思いますし、そもそもご自分が女性であるという事を自覚はございますか？」

「例え話じゃない！それに性別って・・・どうでもいいかな。私は人としてその人と接していたいと云うか、

自分が女性だから強い男性に守られたいとかじゃなくて

その人が人として尊敬出来たらいいんだと思う。」

「あんたいい事言ってるんだけどね・・・会話の流れから賛同しづらいわ。」

ちなみに相手のスペックは？」

「あんまり気にしない。」

個性的な人でも私が尊敬出来ると思ったら全然OK！

でも、出来れば絵面の良い人だったらなおさらOKなんだけど」

「絵面って・・・あんなね」

私の理想と過去の敗因についてあらかた語り終わると

ミオは急に周りのカップルのスペックについての話に無理やりシフトチェンジしはじめた

自分から話を振っておいて自分勝手な性格である。

ナジオ「あの彼氏に あの彼女なくない？」

ミオ「あの眼鏡！！いつの時代の眼鏡だよ！！って、感じ？」

ナジオ「あれ見て、あの足であの丈はヤバいつしょ？！」

ミオ「いいんじゃない？自分が好き好んで自虐的に見曝してるだけだからさ」

ナジオ「見せられる方がきつくはない？」

ミオ「見なきゃいいのよ」心頭滅却すれば火もまた涼し』よ」

ナジオ「なんの修行よ？！ 心頭滅却しなきゃ視界に入らない努力が出来ないの？！」

ミオ「だって、一度目に入っちゃうと 気になってしょうがないでしょ」

ナジオ「言えてる。今度から私も修行だと思っわ。」  
そんな会話が続きした後  
ミオが「飽きた〜お茶飲みた〜い」と言った事で海辺の近くのコンビニに移動した。

ミオが買い物をする間 私はコンビニの入り口でタバコを吸う事をミオに伝えて

タバコとライターを買って

コンビニの入り口付近にある灰皿の前でタバコに火をつけた。

いつもはミオがタバコの煙を嫌う為、一緒にいる時は吸わないようにしているのだが

今日はいじめ過ぎたと実感しているのか大目に見てくれる様子である。

私がタバコを吸い終わるまでコンビニの雑誌のコーナーで立ち読みをして待ってくれる。

自分の事を大切にしてくれる友達がいる事に

深く感謝しながら、また新しいタバコに火をつけた。

しかし、タバコを吸って気分を変えようとしても

頭の中は さつきまで見せられていたカップル達の中睦まじい姿が焼き付いて離れなかった・・・。

診療前準備・7 (後書き)

次回から診療所内に舞台が戻ります。

## 診療開始・1

診療で使用するすべての器具を消毒・滅菌して

治療中に使用する備品などをすべて所定の位置にあるかどうかを確認していく。

一応、新人の教育係を一番上の先輩である壺井晴美つばいはるみ直々に任命されているので、

準備がしつかりと出来ているのかを確認してまわる。

ハルミさん曰く、

「指示を出した人間が、責任を持って確認をしなければならない」との事で、

後輩に任せただけからそれで終わりではダメだという。

ごもつともな意見である。

自分にも人にも厳しいハルミさんの事なので

私がチェックしているかどうかを、どこかで必ずチェックしているので気は抜けない。

確認作業を終えて消毒室に戻ると

床に、何かの液体がこぼれて床に小さな池が出来ていた・・・

誰の仕業か判らないが、知らずに踏んで滑ったら危ないし、

臭いがしないので、危険な薬品でない事は判っているのだが

汚染された液体かもしれないので、とりあえずゴム手袋を二重にはめてペーパータオルとゴミ袋を持ってきて拭き始める。

だれ?! こんなの放置した人!!!

片付けてから移動してよ!!!

と、心の中で毒づきながら拭いていると

ハルミさんと先輩助手の津田理沙つだりさがこちらに向かって歩いてきた。

まずい時にまずいコンビが来てしまったよ〜！！

慌てて早く片付けようとゴシゴシと拭いてペーパータオルをゴミ袋に放り込むが

「なにしてるの？」

と、コソコソしていたのが災いしたのか、私の努力の甲斐むなし、あっさり見つけられてしまい

拳句の果てに、お前が犯人かと疑いの目で見られる……。

原因や犯人をとことん追及したい性格のリサさんにそう言われると正直に答えるしかないので、作業を一度中断して立ち上がる。

「私ではありません。私が来たらこうなっていました。

もうすぐ診療時間なので先に片付けてしまいます。」

そう言うと、

「だれ？床を汚したの！」

と、リサさんが大きな声で犯人探しをしようとする。

診療時間前なのに事を大きくしたくなかったがこの人が騒ぎはじめたらしょうがないと

半分あきらめようとしたら

「綺麗に拭いておいてね。」

そう言つてハルミさんが歩きだした。

ハルミさんの顔を常に窺っているリサさんは

「だれか、ナジオを手伝ってあげて」と言つてハルミさんを追いかけ行つてしまった。

貴女達は手伝ってはくれないのね……

まあ、居ない方が気を使わない分はかどっていいけどね。

患者さんがもう待合室に入っている様子なので、

リサさんの大きな声が待合室まで聞こえる前に立ち去ろうという考  
えなのだろう。

取り合えず、話が大きな事にならなかったので一安心。  
そう思つて、もう一度ペーパータオルで綺麗に床を拭いて。  
強力な消毒液を撒いて二度拭きする。

本当に危険な薬品だったら不味いから、念のためにね

床を拭き終わってゴミを片付けていると。

「ごめん」

と、アラタ先生小声で謝りながら駆け寄ってきた。

「さつき、バー（歯を削る道具の先端）の消毒液をこぼしちゃって  
雑巾を探していたらサツキ先生に呼ばれて、誰にも頼めなくて。」

とりあえず、

一言誰かに言つてからサツキ先生の所に行つてほしかった・

つてか、なんで、バーのケースなんてこんな所に持ってきた

?!

この際、雑巾じゃなくても

ペーパータオルかティッシュで拭いてくれたらもつと良かったのに・・・

心の中ではブチブチ文句を垂れているが、  
口では

「大丈夫です。もう片付きましたから」

と、冷たく言つて診療を開始する為に、待合室の方に向かった。  
自分は大人だと思つていたが、アラタ先生に嫌味な態度を取つちや  
つた・・・

ごめん、まだ子供だったみたい・・・。

本人に直接謝れば済む話なのに、心の中だけで謝っておく。ふと、振り返ると、アラタ先生は少し落ち込んだ様子で壁に張り出された予定表を見ている。

おそらく、サツキ先生に何やら小言の一つでも言われて来た様子でその後私に冷たい態度をとられたのでさらに落ち込んでしまったのだろう。

この人、本気で背中に哀愁ただよってますよあ〜。

ホントご愁傷様。

だからと言って、私は先生を慰めるつもりも関わるつもりはなかった。そのまま黙って立ち去る事にする。

自分の事は自分で頑張つてよね。



## 診療開始・1（後書き）

ようやく、診療室に戻れました。

ナジオとアラタ先生の仕事ぶりがこの後ずっと続きます。

専門的な言葉が多く飛び交いますが、  
なるべく補足説明を入れて判り易くしていこうと思います。

## 診療開始・2

「ここに赤いしるしが付いているでしょ？」

鏡を見ながらここが綺麗になるように歯ブラシで優しく磨いてみて」

私は今、子供の患者さんにTBI（歯磨き指導）をしている。  
赤い染めだし液で歯垢を染めだして

どれだけ磨けているかと云うのを自分で確認して貰って歯磨きの練習をもらうのである。

「え〜。めんどくさい〜」

「面倒だよな？でも、綺麗に磨かないと虫歯になっちゃうよ？」

面倒だからって、大人なってもお母さんに磨いて貰う訳にはいかな  
いでしょ？

頑張って、上手に磨いてごらん

有名な運動選手は歯が白いの知ってる？白い歯の方がカッコいいか  
らだよ〜」

「知ってる！！でも、お母さんがあれは入れ歯だって言ってた。」

「差し歯だと思っよ・・・。」

よくある言い間違えに苦笑いをしながら話を続ける。

「スポーツ選手がさあ〜」

得点が入って笑っている時に見える白い歯ってカッコイイよね〜。

はい、白い歯を目指して赤い所が消えるように鏡を見ながら

はい！磨く！！」

「え〜」

文句を言いながらダラダラと歯磨きを始めるだが、

自分の知っているスポーツ選手の事を思い出したのか、

先ほどよりは念入りに歯磨きをするようになった。

子供に指導をする時はいかに興味を持たせるかが重要なことで、

目的も興味もなければ、歯磨きなんて面倒なだけである。

『虫歯にならないように歯磨きをしなさい』  
なんて、耳にタコが出来るほど言われているはずだが、  
良く『ちゃんと、歯磨きをしていても虫歯になったよ!』と言われる  
それは、“磨いている”のと“磨けている”の違いがある。  
たとえ一日に1回しか歯磨き出来なくても虫歯にならないと私は考  
えている。

虫歯になりやすいポイントを的確に徹底的に磨いていれば大丈夫!!

( 医学的に証明されてないけど・・・ )

ちなみに、私には1本も虫歯の治療痕が無い。

『そんなに言うなら口に中を見せて!』  
って、言われて見せる事もあるのでその時は素直に見せる。

人の口の中見て嬉しいか?!

私は仕事じゃなかったら見たいとは思わないぞ?!

素直に見せる私もどうかと思うけどな!

ちゃんと、歯磨きをしている様子をチラチラと確認しながら  
私はカルテに指導内容を記入しようと振り向くと私の背後にアラタ  
先生が立っていた。

どうやら、手があいていたのでサツキ先生に言われて私の指導を見  
学していた様子で、

カルテを自分の方に向けて覗き込んでいる。

「カルテいいですか?」

私がボールペンを握りながら静かにそういうと

「はい、すみません」

と、慌てて言って、アラタ先生はカルテを戻して一步後ろに下がっ  
た。

そして、今度は

私が指導の時に使っている絵本や模型などを手に取って眺めている。

メーカーが市販している物もあるが、私が専門学校時代に作った教材などをTBIの時に使用している。自分で言うのもなんだが、良く出来た教材だと思う。

可愛い絵で判り易く説明出来ていると思うし、手作り感満載で温かみがある。

夏休みの宿題として製作したもののだが、自分がTBIをする時にこのように説明したいと思った事を盛り込んで作ったので

世界に一つだけの私の為の資料なので仕事で使うには最適である。なので、自分の指導時だけ使用させて貰っている。

私は、先ほど指導した指導内容を簡潔にカルテに指導内容を記入して

子供が磨き終わったのを確認すると仕上げ磨きを始める。

「鏡見て、ここね、虫歯になりやすいんだ。だからしっかり磨いてね！」

歯磨きをする時に、力を入れてゴシゴシと磨いたら駄目だよ。

絵具についたパレットを洗う時、筆でゴシゴシ磨くより、毛先でやさしくこちょこちょってする方が早くきれいになるって知ってた？それと同じ事なんだよ。だからね

優しく、毛先を使って磨いてね。」

説明しながら丁寧に磨いていく

磨き終わってツルツルになった状態を覚えさせて

「いつもこうなるように頑張って磨くんだよ。はい、今日は終わり。口ゆすいで帰ってね。」

そう締めくくって指導を終了する。

子供を送り出した後、先ほどの患者さんの担当医であるサツキ先生の所にカルテを持って行って報告し

算定点数の記入をして貰って受付にカルテを持って行く。

先程まで自分が使用していたユニットチェアーの片付けを行い  
使用器具を消毒室に持って行って消毒する。  
消毒が終われば、また次の患者さんへと気持ちを切り替えて  
業務をする。

毎日、このような流れの繰り返しである。

### 診療開始・3

今の時間は

自分の患者さんは入っていないので、ゴム手袋をはずして手を洗ってなんの作業をしようかと考える。

サツキ先生にもコウイチ先生にもアシスタントがちゃんと付いているし

私がフォローする必要もなさそう

補充作業でもしよつかと補充が必要な物は無いかと見て行く。

ふと、手洗い場から

手洗い場の奥にある材料準備室でアラタ先生が石膏模型を見ながら考えている様子が窺<sup>うかが</sup>えた。

材料準備室で材料の補充作業をしようかと思っていたのだが、アラタ先生がいるのなら他の作業をしようと手洗い場から移動しようとする

アラタ先生に呼びとめられた。

「なにか、ご用ですか？」

アラタ先生から少し距離を置いて顔を出すと。

「すみません、これ残り少なくなっていました。」

と、石膏の入っているケースを指さす。

「はい、判りました。」

在庫の入った棚から袋詰めになっている石膏の粉末を取り出して、ケースの蓋をあける。

ほんとだ・・・確か、朝確認した時は沢山あったのになあ・・・

そう思いながら、

ケースの中に粉末がこぼれないよう丁寧に補充する。

「私が今朝見た時は沢山あったんですけど・・・」

と、アラタ先生に言うでもなく小声で思った事を口にする

アラタ先生は苦笑いをしながらゴミ箱を指さした。

私は、嫌な予感がしながら

ゴミ箱を覗き込むと

そこには、固まって間もない石膏が大量に捨てられていた

「・・・もしかして、水の量を誤って、大量に粉末を投入しました

？」

「ええ・・・量で言ったら、フルマウスを3個流せるぐらいの量を・

・・・」

照れたように頭をかきながらアラタ先生はそう言った。

私は慌ててゴミ箱を取り出して、夕方にまとめて捨てる為のゴミ袋の中に放り込む

その上から丁寧に他のゴミ箱のゴミを掘り込んで隠す。

そして、

アラタ先生の方を向いてシーと、ジェスチャーで黙るように促す

「ハルミさんやりサさんにバレると、うるさいですから・・・」

小声でそう言うてから、周りの様子を窺う。

大丈夫、誰も居ない。

「もったいないお化けに小言を言われますから気をつけて下さいね」  
もちろん、『もったいないお化け』とはハルミさんとリサさんの事である。

アラタ先生は苦笑いしながら私につられたのか「ハイ」と小さい声でく事をした。

人の失敗には厳しい人たちなので、二人に見つからないように証拠

隠滅してしまうに限る。

穏便に事を進める為に覚えた処世術である。

（見つかった時は、倍以上の威力で説教されるのだが・・・）

私は、さっさと残りの石膏の粉末を棚に直して

バイブレーターと呼ばれる石膏を流す時に、

気泡を抜いて均等に石膏が流れるようにする器械が汚れているので、取り外しが可能なラバー部分はずして水道で洗い流し、

器械本体についた石膏も綺麗に拭きラバー部分を元に戻した。

まるで、子供の後片付けをする母親みたい・・・。

私の後ろで黙って私の作業を見ていたアラタ先生が「ありがとう」「ございます」と声をかけてきたが、

「いいえ」と軽く頭を下げただで、ではと、小さく声をかけてさっさと部屋から出て行った。

手が空いている時は診療所内の動きがよく見える場所で、一人でガ―ゼを折ったり、補充作業をする事にする。

他のスタッフと離れるのは、一緒にいるとついつい話をしてしまうから、

スタッフ同士がダラダラと無駄口を叩いているのは、

傍から見てもあまり良い光景ではないし

誰も見ていないと思って気を抜いていると、

自分から見えない場所から見られていたりするので仕事場では気を抜いてはいけない。

女の園で敵を作らない事が一番！

仕事が終わって電車で揺られながら

窓から見える街の明かりに目をやる。



暗い夜空に浮かび上がるぼんやりとした月と

片手で足りる程しか見えない数の星

星の数よりも何百倍も多い家の明かりと街頭の明かりが  
流れるように飛んでゆき

その景色を背景に少し疲れた顔押しした私の顔が窓にくっきり映って  
いる。

毎日変わらない景色の

知らない人たちが暮らす家の明かりにぼんやりと目をやりながら  
今日一日頑張って働いた自分を心の中で誉めてあげる。

ほんの些細な事でも、良く頑張ったと褒めてあげるのだ。

本当は誰かに誉めてほしいのだが、

一人暮らしなので家族とはあまり顔を合わせないし

彼氏もない。

『なんでも出来て当たり前』の社会人になってしまうと、人に褒め  
られる事なんて稀である。

一番身近にいるのはミオなのだが

ミオの性格上が誉めてくれるはずもないので、

自分で自分をほめてあげるのである。

今日も一日無事に乗り切ったね。

明日も、失敗しないように頑張って働こうね。

電車から降りて、駅の近くの遅くまでやっているスーパーで晩御飯  
の食材を買って家に帰る。

明かりの消えた家に入るのはいつも寂しく感じるが  
自由を時間出来る気楽さを選んだ一人暮らしなので  
寂しいなんて気持ち、すぐに忘れる。

お風呂も簡単な晩御飯も終わると、ラジオを聴きながらベッドで  
読みかけの本を開く

いつもはすぐに本の世界に入り込めるのに

今日はなかなか集中できなくて

さつきから何度も同じ所を読んでいる。

いつもより時間は早いのだが、本を読むことは諦めて電気を消して寝る事にする。

ラジオは眠る直前にリモコンで電源を切るようにしている。

薄暗い室内にラジオから話題の最新曲が流れてきたが、やはり耳には残らなかった

本当に最近では自覚が出来るほどに「心ここにあらず」な状態が続いている。

海でミオに彼氏が出来ない原因を追及されてから

心のどこかに大きく開いた穴ばかり気にするようになってしまった。

・・・やっぱり彼氏が欲しい・・・。

そんな自分の気持ちに気がついた。

一番身近なミオですら

毎日べったりと一緒に居る訳ではない。

ミオにはミオの時間があり ナジオにはナジオの時間があるのである。

だから、仕事以外は一人になる事が多いのが現実である。

ミオには早くいい人を見つけて幸せになって欲しいと思っているが

その時になったら 私はどうなるのか？ という不安もある。

親友の幸せを願う傍ら

自分の傍にいつまでも居て欲しいと願うエゴイズム

自分自信が本当は何を望んでいるのかが判らなくなってくる。

そんな事をつらつらと考えているうちに

なんとなく睡魔が襲ってきた感じがしたので、  
ラジオの電源を消して目を閉じると  
静かに眠りに落ちて行った。

ひと肌が恋しい・・・。

## 初診・1

診察室の一番奥の診療台で子供に虫歯予防の為の「シーラント」と呼ばれる薬を歯のかみ合わせの溝に充填し終えて、

母親に虫歯になりやすい場所や仕上げ磨き方のポイントなどを指導する

口腔衛生指導こうくうえいせいしうどを行った。

診療を終えたのちに報告の為に子供の担当医師のもとに向かっていると

アラタ先生の声で話すたどたどしい英語が聞こえてきた

どうやら、

初めて来た患者さんは日本語があまり判らない様子で、英語で問診をしている最中のようなのである

相手も日本語よりは英語の方が理解出来るようではあるが、あまり順調には進んでいない様子が感じられた

通り過ぎざまにカルテを見ると

漢字で名前が書かれている。

### 中国か韓国に多い名字

そう思いながら、やり取りに目をやると

困った顔をするアラタ先生と小柄な女性の患者さんがなんとか意思の疎通を図ろうと

一生懸命にやり取りしている様子が窺えた。

アシスタントについていた女の子の方を見ると

自分ではどうする事も出来ないので、

ただじつと先生と患者さんの様子をうかがっているのが現状のようである。

私はその場を足早に離れて

先程の自分が治療を担当した子供の担当医であるサツキ先生に  
処置内容と指導内容の報告を行いカルテに算定点数を記入して貰い、  
大急ぎで片付けを終えてから  
予定表を見ながら自分の予定が空いているのを確認して、アラタ先  
生の診療台に向かった  
私は静かにアシスタントについている女の子の横に立って  
いつも持ち歩いているメモ帳に「どこの国の人？」と書いて見せると  
そのメモ帳に「韓国」と書いて私に見せる。

ああ、韓国出身か……。

私は、先生と患者さんの会話が途切れるのを待って声をかける  
「（失礼します。」

私、簡単な韓国語ならを少し話せますが、私の韓国語判ります  
か？）」「  
ただたどしくではあるが、  
ゆっくりとした口調で私がそう言った瞬間、  
患者さんが一瞬ビックリした表情をしてから安堵の表情に変わった。  
「（判ります！ 良かった韓国語を話せる人が居て、本当に良かった！）」

そりゃそうだよね、外国に来て言葉が全く通じない所に  
言葉が判る人が居たら嬉しいよね！

ジエスチャーでアシスタントの女の子に席を代わって欲しい旨を伝  
えて替って貰い  
私がアシスタントチェアに座ると  
患者さんは嬉しそうに早口で話したそうとするのを慌てて止めて、  
とりあえず

私が簡単な日常会話程度しか話せない事は伝えておかなければなら

ない

その点だけは、しっかりと伝えておかなければならない。

「（あまり難しい言葉は判りませんから簡単な言葉でお願いします。それと、出来ればゆっくり話して下さい。）」「

安心感を与える為に笑顔でそういうと。

患者さんもニツコリ笑って頷いてくれた。

患者さん私の希望通りゆっくりと話しました

「（昨日から左上の奥の歯が痛いんです）」

「（どんな時に痛いですか？ 食事中？寝てる時？ずっと？）」「

「（ずっと痛いです）」

「（判りました）」

そう伝えてから、顔を患者さんの方からアラタ先生の方に向けてる。

「アラタ先生の言葉をそのまま伝えますから、

先生はいつも通り患者さんに言葉がけして下さいね。

患者さんがおつしやるには、

昨日から左側上額さそくじょうがくの臼歯きゅうし又は大白歯だいきゅうしに痛みがあるそうです。」

私の予想外の行動に動揺していたアラタ先生は

急に我に返った様子で「診察します」と言った。

お〜！この人、順応性が高い！！

いいことだ〜。

「倒しますね」

「（椅子が動きます）」

ゆっくりと椅子が倒れると患者さんは大きく口をあけた

アラタ先生は女性にミラーを見せながら

「鏡で確認しますね」

「（鏡で口の中を見ますね）」

私は素早く胸に刺してあったペンを手に取り カルテの歯の絵が描かれた表に書き込む準備をする

「歯式取ります 右上から」

アラタ先生はミラーで全体的に患者さんの歯の部位と治療痕を言いながら診ていく

私はアラタ先生が言う治療痕をカルテの歯の絵に記号にして記入していく

一通り観ていきアラタ先生の手が左上の奥歯で止まった

「痛かったら教えて下さい」

「(歯を触ります。痛かったら教えて下さい)」

「痛いのはここですか？」

「(ここですか?)」

ピンセットで軽くコンコンと叩くと患者さんは顔をしかめてうなずいた。

「左側上顎6番の頬側、

歯石が原因で歯肉炎を起こしているようです。

動揺はありません。

原因はこれかと思えますが念のためにデンタル撮ります。」

歯の表のアラタ先生が言った部位にZsとGと、記入した。

「パノラマとデンタル撮影の説明お願いします。」

「(鏡を持って口の中を見て頂けますか?)」

ここが赤くなっているのが判りますか?

原因はこれだと思えますが、他に痛み原因があるかもしれませんので歯の写真も撮ってもいいですか?)」

近くに置いてあったパノラマと呼ばれる口全体を撮影したものと2

3本だけを撮影した小さなレントゲン写真を手に取って見せながら言う

「(判りました)」

「(妊娠していませんか?可能性はありませんか?)」

「(大丈夫です。撮影して下さい。)」

「(では、こちらへどうぞ)」

チェアを起こして 患者さんをレントゲン室へと誘導する

レントゲン室の前で患者さんに被爆防止の鉛の入ったエプロンをつけてもらい

まずは口全体のレントゲン写真を撮影

そして、部分的な小さな写真を1枚撮影した。

アラタ先生はレントゲンの撮影ボタンを押しながら 私に小さく微笑んだ。

業務中なので私はあえて無視――。

つつつか、撮影中に患者さんから目を離さないように！

撮影が終了して患者さんはさっき座っていたチェアに戻って貰った。

その間、いつもなら雑誌などを渡して待ってもらうのだが

日本語は読めないであろうと推測して、患者さんと小さな声で雑談をして過ごす。

しばらくしてから出来あがったレントゲン写真を

先ほどまでアシスタントについてついていた女の子が持ってくれたので

アラタ先生はライトボックスに置いて観ながら患者さんの診断が決まったのか

私の方を向いて診断結果を伝えた。

「歯肉炎ですね。P<sup>プル</sup>U<sup>ル</sup>（歯髓炎<sup>しすいえん</sup>と呼ばれる歯の神経の中に菌が入

って炎症を起こす症状のもの）ではないようです。

P<sup>プル</sup>処（スケーリングと呼ばれる歯石や茶渋やヤニを除去する治療の事）して様子を見ましよう

処置中、痛みが強いようだったら浸麻<sup>しんま</sup>（浸潤麻酔<sup>しんじゆんますい</sup>と呼ばれる局所だけ麻痺状態を起こさせて治療中に痛みを感じないようにする処置の事）します。

伝えて貰えますか？」



「はい」

治療の説明の時に使用している額模型がくもけいを引出しから取り出し患者さんに見せる。

この額模型にはいろいろな種類の歯の治療の見本で並べられてある。いま、説明したいのは、

治療の仕方ではなくどの場所がどのような状況になっているかの説明なので、

別の引出しから、TBI（歯磨き指導）の時に使用している歯茎の状態を絵にしたノートを取り出して自分の膝の上にのせておく。

『（先ほども説明しましたが、ここにこうというのが沢山付いているのが原因で痛みが出ているようです。今から機械でこれを取り除く治療をします。

すぐには良くならないと思いますが、少しは痛みが無くなると思います。

治療中痛みが強いようでしたら痛くないようにする注射をしますのと言って下さい。』

治療をしてもいいですか？」

模型と絵を使用して患者さんの今の状態を自分の眼で確認して貰う。

「（判りました、治療をお願いします。）」

「治療OKです。」

額模型とノートを片付けながら後ろで私が説明しているのを聞いていたアラタ先生に報告する。

「判りました」

「私、サツキ先生のところへ報告に行ってきます」

そう言ってカルテとレントゲンを受けと取るとサツキ先生が治療を行っているチェアへと向かった。

失礼しますとの後ろから声をかけて簡単に状況報告を行う。

日本語が話せない患者さんが来院されていて、私が対応しているの

は報告されている様子だが

手短に私がアシストについている経緯を報告してから

サツキ先生が治療で使用しているユニットチェアのライトボックスに

一言断りを入れてからレントゲン写真を置いて

アラタ先生の診断結果を伝える。

本来ならば、アラタ先生が報告するべきなのだが

ドクターがサツキ先生に報告をする現場を今から治療を受ける患者さんが目撃すると

何事があったのかと不振に思うだろうし、

アラタ先生が頼りないという印象を与えかねないので私が代りに報告を行うのである。

私の報告を聞きながら

治療の手を止めてレントゲン写真を見ながら私の説明を聴いていた

サツキ先生は

「判った」と言って、

また自分の患者さんの治療を再開した。

サツキ先生は、治療はアラタ先生に任せると云う事を無言で語っているのである。

私は「失礼しました」と、挨拶をしてから

アラタ先生と患者さんの待つチェアに足早に戻った。

「報告・連絡・相談」は社会人として必ず心得ていなければならぬ  
い事

今回のような特殊事例の場合以外でも

一応、上の人間に筋を通しておかなければ後々面倒な事に発展する事もあるので

絶対に行うようにしている。

とくに、今回の様な事例の時は情報がある程度共有しておかないと私の単独行動ととられてあとで何を言われるか判らないので

しっかりと確認をとって行動した方が得策なのである。

「サツキ先生OKです」

小さな声でそう言っただけでカルテをアラタ先生に手渡す。

アラタ先生はほっとした表情を見ながらも、

治療は今からだと言った表情を引き締め直し、治療の準備を始める。

「スケーリング（歯石除去）しますエアスケとハンドスケーラーの準備をお願いします」

私は、アラタ先生に言われたエアスケ（エアースケーラーと呼ばれる機械の略称で歯石を除去する際に使用する）

を手渡してテーブルの上にハンドスケーラーと呼ばれる歯石を除去する為の器具を並べて

この治療が必要だと思われる器具などを直ぐに手の届く場所に置いてアシスタントチェアに座りアラタ先生の治療の補助をする為に座るアラタ先生は痛みが出ていた部位の歯石を丁寧に除去し

私も横から唾液と水をバキュームで吸引しながら、アラタ先生の視野を確保し

先生が動きやすいようにアシストしていく。

患部に抗生剤の薬を塗布する事を患者さんに伝えるよう伝えてから塗布し

患者さんに言葉かけをしながら丁寧に治療を進めて行く。

治療は無事終了し

処置が終わった事を告げてチェアを起こしてうがいをしてもらう。患者さんもアラタ先生も改めてほっとした表情を見せた

私は受付まで付き添い次の予約や支払いなどのやり取りを説明し終わった帰り際に

患者さんは私の手を取り

『貴女に会えて本当に良かった ありがとう』と言って帰って行った。

先ほどまでの状況は診療所中に知れ渡っており

スタッフを始め、成り行きを見守っていた他の患者さんにまで労を  
労われた。

特にアラタ先生には

「ナジオさん凄いですね！！すごく助かりました。ありがとうございます。  
います。」

と、言いながら片づけをしている私のもとへとやって小声でお礼の  
言葉を述べてきた。

私はそれに対して曖昧に返事をして流しながら自分の業務に戻った。

実は、以前に付き合っていた彼氏が韓国出身だった事が切っ掛けで  
韓国語を勉強した事が

今になって活かされなどとは、職場では言いたくない話なのだが、  
ナジオがなぜ韓国語が話せるのか？

と、昼休憩の時にスタッフの間でいろいろな憶測が飛び交って大変  
な事態になってしまったので

「韓流ファンです」の一言で事なきを得た。

韓国映画が好きな事に変わりはないので、あながちウソではない。

話題も「ナジオも意外とミーハーだったのね」という結論で落ち着  
いてくれたらしい。

良かった・・・韓流ブームなるものが存在して・・・。

と、心から韓流ブームに感謝した。

## 初診・2

仕事が終わわり、背広姿のサラリーマンや仕事終わりのOL風の女性がチラホラと

まばらに建っている駅のホームで

携帯のメールチェックをしようと鞆から取り出すと

「ナジオさん お疲れ様です」

相変わらず学生のようなラフな服装をしたアラタ先生がにこやかに笑って

声をかけてきた。

「あ、お疲れ様です」

携帯を握りしめたまま、私もつられて笑顔で挨拶する。

「今日は本当に助かりました サツキ先生に『アラタ先生とナジオは外国人担当に決定』って言われてしまいました。今日ほど本気で英会話の勉強をしとけば良かったと思つた事なかつたですよ!!」

「でも今日の患者さんには英語判らなかつたみたいですけどね。」

私もサツキ先生に言われましたよ『今度から外国人担当』って、

でも、私の母国語は日本語なので第一言語は日本語ですが、第二言語が韓国語だからその他はキャパオーバーで無理ですよ。」

笑いながら携帯を鞆に入れながらそう言うつと

「ナジオさんつて、なんで韓国語が話せるのか聞いてもいいですか？」

アラタ先生の控えめに見せかけた直球な質問に、

またその質問か・・・と、思い

「嫌でえ〜す」と、笑いながら冗談めかして、実は素直な気持ちでそう答えると

アラタ先生が大好きな玩具をいきなり取り上げられた子供のような表情をした。

意外と子供っぽい表情をする可愛い人だな……。

アラタ先生のそんな表情を見て、  
一瞬でも可愛いと感じてしまった自分にドキツとした。

そんな自分の気持ちをかき消すように、私はわざと明るい声を出す。

「冗談ですよ。」

韓国語は、韓国映画が好きで字幕で良く観るんですけど、  
微妙にニュアンスが違っていているような違和感を覚えたので、  
字幕なしで映画が見れるようにと、独学で勉強してたんです。  
今は忙しくなって辞めてしまいましたが。」

他のスタッフに聞かれるたびに繰り返した発言を少し丁寧に説明すると

アラタ先生は素直に信じてくれたらしい、  
ナジオさんは努力家なんですな〜などと言っている。

なんか、単純……いや、素直な人、なんだ……。

「ナジオさん、今日のお礼に飲みに行きませんか？僕が奢りますから！！」

「お礼と言われて、私も仕事でした事ですから……」

いきなり言いだしたアラタ先生の提案に仕事を理由に条件反射でや  
んわりと断るが

断ったにも関わらず頭の隅の方では、一瞬どうしようか悩んでしま  
った。

極力職場の人間と関わりたくない

でも、もう一人の私が

（面白そうだから、このままアラタ先生と飲みに行こうよ！）  
と、主張している。

ちよつと可愛い表情をしたアラタ先生を見てしまった事で、先生に少くしだけ、興味がわいた事で迷いが出た。

ここで断るのも失礼だし・・・

などと、いつもでは考えられないような考えが頭をよぎる。

「ナジオさんの最寄駅でいいですから！！ここだと誰が見てるか判りませんし」

アラタ先生がそういうと

丁度タイミング良く 私が乗る方面の電車が到着を告げる音楽と共にホームに入ってきた。

断ろうか、行こうかと

返事に困っていると

アラタ先生は「行きましよう」と私の腕を取って電車に乗り込んだ。

意外と強引？！

アラタ先生の予想外の行動にドキドキしながらも電車に乗ってしまったのなら仕方がないと、

「では、一杯だけ頂きます」と返事をした。

なんだか、アラタ先生のいろいろな一面が垣間見えそうで楽しそう・・・。

アラタ先生は満々の笑みで「はい、一杯だけ」と、まるで子供のようにニッコリと笑って返事をした。

さつき歯科の最寄り駅から私の部屋のある最寄り駅まで2駅

お店も私が決めていいと云う事になったので

駅の近くの雑居ビルの1階にある『インパルス』と云う私とミオが行きつけにしているお店に入った。

お店の内装はログハウス風で南国テイストのあるインテリアと木の色合いで

温かみを感じるアットホームな雰囲気売りしているお店である。お店に入るとインパルスのオーナーのが「ナジイーお帰り」と厨房から声をかけてきた。

いつもだったから元気に「ただいま〜!!」と返事をするが今日はアラタ先生と一緒になので曖昧に笑って手を振る

いつも座るカウンター席をスルーして、

今日は他の常連客の人と絡みなくなかったので店の奥にあるテーブル席に座る。

「ナジイーいらっしやい　こちらは彼氏かしら？」

「はい、私　アナ。」

ハイビスカス柄のアロハシャツを着たウエイトレスのアナさんがおしぼりを私たちが座った席に置きながら　アラタ先生に「アナと呼んでね」と魅力的な笑顔を浮かべながら挨拶する。

私は苦笑いしながら

「先生こちらは山本杏奈さん通称アナさん、オーナーの奥様です。アナさんこちらは同じ職場のドクターで赤松先生です」

手短かに紹介する

「はじめまして、赤松です」

と、砕けた挨拶をしたアナさんとは打って変わって

アラタ先生は立ちあがって丁寧に頭を下げて挨拶をした。

・・・しかも45度の角度で・・・

なんだ？この人!!



アンナさんは笑顔を浮かべたままくるつと私たちに背中を向けて小さくブツと嘖き出して小さく肩を震わせて笑っている。

あ・・・アンナさんのツボに入った・・・

そんな様子を知ってか知らずか

「僕はオーナーです」と、厨房からオーナーの声だけが聞こえてきた

料理を作っている最中で手が離せない状態にある様子にもかかわらず声だけでも私たちの会話に参加したかったのだろう。

そんなオーナーの気持ちを汲んだのかどうかかわらないが

アラタ先生はすつと席を立ててオーナーの顔が見える位置に歩いて行き、

「赤松です」と、また45度の角度で頭を下けている。

律儀だね」とアンナさんと私は顔を合わせて笑った。

すると、厨房から

アンナさんとおそろいのハイビスカス柄のアロハシャツを着たオーナーが

料理そつちでフロアーに出てきた。

「インパルスオーナーの山本です。」

オーナーでもマスターでも山本でも好きなように呼んでください！

「！」  
と、アラタ先生の手を取ってブルンブルンとふりながら挨拶していた。

そこにノリのよい常連客まで挨拶に加わって「客の白井です」「客の鈴木です」などと、勝手に自己紹介をしながらどんどん手を上のせていく。

「オーナー、なんだか焦げくさいに匂いが・・・」

「ああ！！火を止めるのを忘れてた！！」

「俺の注文した料理が〜!!」  
と、なんだかミニコントのようなドタバタ劇をアンナさんと私はお  
腹を抱えて笑いながら見守った。

アラタ先生って面白い・・・。

## 初診・3

ようやくオーナーと常連客達に開放されたアラタ先生が席に戻ってきた時を見計らって

アンナさんがビールとおつまみを運んできてくれた。

先生が戻ってくるまでの間、私は・・・放置されました。

はい、完全に放置です。

私など初めから存在しないかのような勢いの放置振りでした。

ここまで放置されると、コッソリ帰ってやろうかと正直思いましたね。マジで。

ようやく帰って来たアラタ先生を

思わず拗ねたように冷やかな目で見てしまったのはここだけの話です・・・。

取り敢えず気お取り直して、「今日も一日お疲れ様です」って事でビールで乾杯。

コクコクとビールで喉を潤して一息つく。

改めて、店内を見渡していたアラタ先生は

「お店も人もいい雰囲気ですね。」

今度から個人的に使わせていただいても構いませんか？」

オーナーと常連客達と難なく意気投合していたので、

オーナー達も大歓迎して迎え入れてくれるだろう事は判っているのだが、

店を紹介したナジオに了承を得てからと考えたのだろう。

相変わらず、律義な人である。

「不思議と落ち着くでしょ？」

どうぞ使って下さい オーナーも先生の事を気に入ったようですし  
そういつて、私はビールをチビチビ飲み  
アラタ先生はゴクゴクト美味しそうにビールを飲みながら  
おつまみを口に放り込んでいる。

「先生、さつき歯科にはもう慣れましたか？」

私がそう聞くと、アラタ先生は複雑そうな表情をして

「正直、まだ慣れていません。

今まで、男ばかりの環境に居たので、女ばかりの環境ではどうして  
いいのか

まだ判らない状態です。」

「女ばかりの環境ってちよつと複雑ですからね・・・大丈夫、先生  
なら上手くやれますよ。」

「少し、時間がかかりそうです・・・鬼追先生はどうだったんです  
か？」

鬼追先生とはアラタ先生の先輩のドクターで鬼追きおひこういち一いちの事で私たちは  
コウイチ先生と呼んでいるが、アラタ先生は鬼追先生と呼んでい  
るらしい

コウイチ先生は根っからの女好きで、さつき歯科の女性陣の輪の中  
に溶け込むとは意外と早かった。

そして、私が働く上で一番厄介な存在でもあった。

「コウイチ先生はすぐに馴染んでらっしゃいましたよ・・・いろ  
んな意味で・・・」

溶け込み過ぎて、たまに「セクハラ?!」と思うような発言を真剣  
な顔で

言ってくるので正直困っている・・・。

お茶目で憎めない性格なのだが、私をからかって楽しんでいるのか  
いつも困った発言をしては、私の反応を見て喜んでいる。

「いろんな意味って云うのは、判る気がします・・・。

ナジオさんもその・・・何か言われるんですか？」  
心配そうな表情で聞いてくるアラタ先生の表情を見ると  
どうやら、コウイチ先生はアラタ先生には露骨なボイストークを  
しているようである。

わーあ、絶対聴きたくない！！

想像するのもヤダわ！！

「たぶん、

先生とお話しされている内容よりはオブラートに包んでいると思  
いますよ。

そうでなければ、今頃あそこに居れない状況になっていると思  
います。

だって、あの人・・・常に脳内『どピンク』なんですもん・・・」

「確かに、発言が『どピンク』ですよ・・・

なんか、自分で聞いたといてなんですが、想像するのも怖いすね」

二人で苦笑いをしながらまたビールを一口

「コウイチ先生って真面目にセクハラ発言されるんですけど、  
なぜか許してしまうんですね・・・」

あそこまで脳内『どピンク』だと、逆に個性として認めてしまっ  
た感があつて・・・」

「ナジオさんのにギリギリセーフですか？」

「普通にアウトです。」

私が即答すると

アラタ先生は笑いながら「やっぱりアウトなんですね」「などと言  
っている。

普通にセクハラ発言の時点でアウトでしょ？

「例えば？なんて言われるんですか？」

なんだ?! 私にコウイチ先生の脳内『どピンク』具合を披露しろってか?!

まあ、どうせ、先生にも言ってるだろうからこの際話してしまおう?

例えばですか?

私はそう言って、最近あった出来事を話しました。

「私たちの白衣ってワンピースのフラスナータイプと前ボタンタイプ二種類あるじゃないですか?

この間、エプロンをつけない方のボタンタイプの白衣の時にボタンがお腹の所の1か所留め忘れていたみたいで外れてたんです。それで、コウイチ先生が教えて下さったんですけれど、

『ナジオさん、ボタン一つ開いてるよお?』

手、入れたくなるからさあ。早く留めた方がいいよ。

それとも、入れてもいい?』

って、真剣な顔して言われたんです。

しかも、準備室で器具出してる時に背後から耳元にこっそりと!! なんちゆうタイミングで嫌がらせして来るんだ?! って正直思いましたよ。

ビックリして、器具を落として不潔にってしまう所でしたし。

もっと違うシチュエーションで他の言い方してくれたりいいのに・・・って思いませんか?!

男性から女性の服のボタンが外れているなんて言いにくいのはわかるんですけど

背後から耳元で言われたのと、『手をいれる・・・』の時点で違うと思います。

セクハラ以外の何物でもないですよ!!」

「背後からって・・・でも、あの人ならやりそうで・・・言いそう

・・・」

アラタ先生は若干引きながらも、コウイチ先生なら・・・と納得したようす。

納得されてるし・・・コウイチ先生アラタ先生と二人の時  
一体どんな会話してるんだろ・・・気になるけど、絶対聞きたくない！！

「僕が言ったら、やっぱりアウトですよネ？」

アラタ先生は診療所では見せない

面白い悪戯を見つけた子供のような表情をしている

「職場で言った時点で、誰が言ってもアウトでしょ？」

でも、

アラタ先生はコウイチ先生みたいな事をおっしゃらないでしょ？

ここに、引き合いに出される事じたい間違ってます。「  
ばっさりと切り捨てると

判らないですよ」とか言いつつアラタ先生は照れたように笑っている。

何が判らないんですか？！

アラタ先生がコウイチ先生のキャラにキャラ替 希望ですか

?!

ありえない・・・「45度の礼」人が・・・。

「そのあと、どうされたんですか？」

アナザワールドに飛んで行きそうになった思考を無理やり現実連れ戻す。

「どうもしませんよ。黙ってボタンを留めて、すぐに立ち去りましたから」

「ナジオさんってクールですよネ」

「いえ、逆にそこで騒ぐ方が恥ずかしかったんで」

「やっぱりクールです」

「それって、誉めてます？けなしてます？」

「誉めてます」

子供っぽい笑い方でそう言われると

アラタ先生と一緒にお酒を飲むのも悪くないなどと思ってしまうた。



## 初診・4

あのあと、しばらく雑談してから

一杯だけの約束だったので、私は先に帰る事にした。

アラタ先生はインパルスのオーナーと常連客達と意気投合した事もあつてそのまま残留。

私は、オーナー達にアラタ先生を任せた事で心おきなく我が家の建物の前に立って自分の部屋に目をやると部屋に明かりがついていた。  
。。。

ヤツがまた来てる。。。

ため息をつきながら部屋の鍵を開けて中に入ると

「お帰り〜い〜」っと、テレビを見ていたらしいミオが、いかにも待ちくたびれた〜

感じの気だるい挨拶をしてきた。

また連絡もなく勝手に鍵を開けて部屋に上がったな〜!!

しかも、

部屋に勝手に置いて帰ったジャージに着替えて我が家のように寛ぎながらテレビを見ている。

ここは、あなたの別宅ではありませんよ?!

それに、

ご飯の準備をしてくれていたらしく

部屋の中に暖かいご飯の香りが漂っていた。

絶対、今日泊っていくつもりだわ……。

そんな、ミオの予想外のだが想定内の行動に私が疲れたように「ただいま」と返事を返すと無言で歩み寄ってきたミオにバスタオルを手渡された。

私の習慣を良く御存じで……。

そんな事を思いながら、私も無言で鞆を玄関に置いてバスタオルを受け取る。  
着替えを取ろうと衣類を納めた小さな箆笥に向かうとどうやら、洗濯物を取り込んでくれうえに綺麗にたたまれている。

これは、家事をするから今日は泊めろっていう、無言の『お願い』だな……

そんな事を確信すると、私はさっさとバスルームに向かう。

今日は長湯をせずさっとシャワーを浴びただけで

お風呂からあがると

見計らったかのように食卓に暖かいご飯が並べられる。

ミオが作った野菜炒めと煮物が食欲をそそる良い匂いだと思いつつ私は冷蔵庫の中から作り置きしてあったきんぴらゴボウを器に盛り付けて並べる。

小皿やお茶碗・湯呑を棚から出して食卓に並べていたミオは

「頭乾かしてきなさいよ」と言っ私をドライヤーのある洗面台に押しやった。

「はぁ〜い」と子供のような返事をして髪の毛を乾かしに行く。

髪を乾かし食卓に戻ってくると

ミオは食卓に食器をセッティングし終わっていて、本棚の前で適当

に本を読んでいた。

「ナジオさ、こんなたくさん本があるのに　なんで一冊も恋愛小説がないの？」

SF・軍記・歴史・ミステリー・サイコスリラーとかばっかりで、  
って

生きもの図鑑って何？　これが一人暮らしの女性の本棚？！」

「生きもの図鑑は大切よ？」

都会っ子の私にとって子どもと話をする為の必須アイテムよ！！  
虫の名前を知ってるだけで子供に尊敬されるんだから！

私は大人にも子供に喜ばれる衛生士を目指してるのよ！」

「あつそ、衛生士さん頑張ってる自然の動植物を勉強されて下さい」  
そう言っつてミオは本を本棚にしまつて食卓の椅子に腰かけた

「早く座つて　早く食べよう」

ミオはそう言っつて私席に座る前にご飯を食べ始めた

「え?!　ここまで待って　このタイミングで食べ始める?!」

「いいじゃない、別に」

「別にいいけどさ」

いただきますと手を合わせてから私も食べ始める。

「今日は仕事遅かったの？」

ミオは煮物をほう張りながらそう聞いてくるので、正直にアラタ先生と飲みに行った事を伝えた。

「へえ」。あんたが忘年会以外で会社の人と飲みに行くなんて珍しいね。

アラタ先生つて歯科医にしてはマシな方じゃないの？」

「どうだろうね・・・遊んでそうには見えないけど、

私、男を見る目はないみたいだから　判んないわ」

野菜炒めを頬張りながらそう答えたる。

実際のところ、今日までアラタ先生にまったく興味がなかったの、  
アラタ先生の事を「歯科医師」という事以外何一つ知ろうとしな

った

ミオの云う「マシ」にアラタ先生が該当するかどうかは判断しかねると云うのが正しい表現かもしれない。

「あんたが飲みに行くぐらいだから、マシなんですよよ。」

で、職場ではどんな感じなの？」

「どんな感じって・・・、今まで男が半数を占めるような環境にいきなり女ばかりの環境に放り込まれた子羊って感じ？」

「女の園ってきついからね・・・弱い者には容赦がないから」

「ねえ、私の職場の話は止めよう。今日は、なんかあつて来たんでしょ？」

「そつなよ！！聞いて！ 今日職場でさ！」

会社で製造技術アシスタントとして働く澁は会社の愚痴をこぼしたくて私の部屋に來た事を思い出したかのように語り始めた

「現場に出た事がなくて 書類の数字だけを見て判断してる大バカ者が多すぎるのよ！」

伝票なんて品物の型番しか書いてないのね その違いがわからないくせに

『なぜこれを使用するんですか？』って！

使い勝手がいいからに決まってるじゃない！！

メーカーのバックアップ体制がしっかりしてる品物だし

多少値が張ろうとも 確かなものを使って今の状態をキープして長く大切に使うのに

『こつちの方が安いから変えて下さい』なんていうのよ！！

確かに安いのも でも量産品でね 今使ってる物より壊れやすいし仕上げも悪いしで

メーカーの保証がない物を押してきたのよ

そうなるよ、お客さんのメンテナンスや修理に駆り出されちゃって余計にランニングコストがかかっちゃうからやめた方がいいですって言ったの。

でも、たとえばそれに変更して故障が頻発して苦情が多数着たら貴方が責任を取ってくれるのよね？って、言ったら

『コスト削減を提案するのが僕の仕事です あなたの仕事は決められた予算の中で最善を尽くす事なんじゃないんですか？』なんて言うから

それだったらあなたの推薦する商品のメリットを書面にして提出して下さい

デメリットを書面にして叩きつけて差し上げますから。って言ったら

『今、コスト削減を提案しております』の一点張りなのよ！

たぶんあれは、大人の事情みたいなものが絡んでるんだと思うんだけど、

コスト削減とか言って、適当な物を作ってユーザーさんの信用落とす方が

問題あると思うのよね。

コスト削減するんだったら要らない機能を削減したらいいのに！

小さい部品のコストを削減したって 故障しちゃったら

メンテナンスに手が取られて余計にコストかかるって！！

そんな事も判らないのが最近揃っちゃって困ってるのよ！」

一気にまくしたてる溼に「技術職も大変だね」などと軽く受け流す  
歯科医院でしか働いた事のない私にはまったく理解できない遠い世界の話である

「人間より機械の方が大切だからって冷房ガンガンに効かせた部屋に居るから

外気との温度差で体がダルイしさ」

若造は訳わっかんない事ばかり言ってくるしさ」

おっさん達の接待に付き合わされると 『結婚しないのか？』なんて言われるし！！」

若造って、あんたも若造の分類に間違いなく当てはまるよ？

なんて思いつつ、決して口には出さない……。かわりに  
「大変だねOLって・・・ビール飲む？」などと云いながら席を立つ  
「ビール頂戴!!! 飲まなきゃやってられないわよ!」  
と、返事するミオ。

わゝあ、今日はとことん飲む気だ〜!!

私は苦笑いをしながら黙ってミオにビールとグラスを渡し 自分用に焼酎のお湯割りを作って戻る

「『結婚』って女同士で牽制しあっちゃってるのよね・・・寿退社するのは自分が先! っって、感じで でも、おっさん達にはそんな空気が判らないらしくって

口を開けばまるで天気の話でもするように

『結婚はまだか?』 『彼は居るのか?』なんて言うのよ!

相手がいたらさっさと結婚して寿退社してるでしょ? っって、感じだし  
なんであなたにプライベートな事を報告しなくちゃなんないの!!!  
っって、

声を大にして叫びたい!!!」

なにも今、叫ばなくても・・・と、内心思いつつ口では「そうだよ  
ね、プライベートな事まで会社で話したくないよね」なんて話を合わせる

相当ストレスが溜まっているらしいミオに要らない事は言わない方がいい。

しかし、黙って頷いていると それはそれで気に食わないといわれるので

話は聞きつつ、内容に沿ったあいの手を入れる。

「でも、そこまできちゃつと あれだ 魑魅魍魎の巣窟? っって感じ  
?」

と、何気なく言った一言に

「そうよ! あいつ等を人間と思っちゃうからダメなのよ!!!」

あいつ等は妖怪なのよ！！ナジオうまいこと云うじゃない！

妖怪だったらしょうがないよね、人間の思いが通じないんだもん！  
と、いきなりミオのテンションが上がり その高低差に一瞬ビビリ  
つつ

「妖怪的存在なのね・・・」と、弱腰で返答すると

「妖怪より悪霊に近いわね」

納得した様子でうなずいている

・・・仮にも一緒に働てる人間に対して悪霊って・・・

などと小さく苦笑。

ミオ「悪霊退散のお札とか作っておでこに貼り付けてやりたくなくなってきたわ！」

ナジオ「あんたの会社の人間はキョンシーか！」

ミオ「はっ！！もしかして！呪いとか、かけられてたりして！！」

ナジオ「なに？仕事がしにくくなる呪いか何か？」

ミオ「結婚出来ない呪い」

ナジオ「・・・結婚したかったんだ・・・」

ミオ「あつたりまえでしょ！！小学校の時の夢は『可愛いお嫁さん』  
だったんだから！」

ナジオ「『可愛い』はもう無理ね」

ミオ「無理じゃないわよ！！今でも十分可愛いじゃないの！」

ナジオ「あなたの『可愛い』の基準低すぎよ」

ミオ「世界の『可愛い』の基準は私が最高基準よ！！」

ナジオ「あんたが、万国共通の『可愛い』の最高基準って事？！平均はって言うのは可もなく不可もなくでしょ？あんたは不可ばっかりじゃないの！！」

だんだんノツてきたらしく

この後、「ボケ突っ込み」のある漫才のような会話が飲みつづれる

まで続いた・・・。



## 休憩時間・1

次の日、またまた二日酔いの頭を抱えて病院に出勤し、消毒に用いるアルコールワツテと呼ばれる消毒用エタノールを染み込ませた綿花の準備していた。

消毒用エタノールの臭いに昨日のお酒を思い出して少し気分が悪くなりそうになるので

微かに顔をしかめていると「おはようございます」とアラタ先生が声をかけてきた

いつもどおりの営業スマイルを急いで顔に張り付けて「おはようございます」と返答し

素早く周りに他のスタッフがない事を確認する。

小動物のように テツテツテツと、アラタ先生に近づいて小声で「昨日はごちそうさまでした。」

と、小さくお礼を言う

「こちらこそ、良いお店を教えてくださいありがとうございます。」

・・・体調大丈夫ですか？

なんか・・・顔色が悪そうですね？」

心配顔で私の顔を覗き込むアラタ先生に

「二日酔いなんです。あの後、友達が家に来て朝まで付き合わされたんです。」

皆には言わないで下さいね。

社会人の癖に、次の日に差し支える程飲むなんて！『自己管理がなっていない』って言われちゃいますから」

と、苦笑いしながら言う。

そう言って『シー』と、唇に人差し指を当てつつ去って行った。診療室内で長話は禁物である。

どこで誰が聞いていて、変な誤解をつけないとも限らない用件が終わったらさっさと離れる事がいちばんである。

ミオの会社とは規模が違うが やはり歯科医院も女の園で  
女性スタッフと男性ドクターが親しくする事を快く思わない者もな  
かには存在する

私は女の園でうまく立ち回って行く為に 波風を立てるような事を  
極力避けるようにして行動している。

アラタ先生が心細さから話しかけてくるのは知っているが  
ここで二人が話をする事であらぬ噂がたつてはお互いの今後に影響  
する事も踏まえて

あえて避けているのである。

そんな態度が周りやアラタ先生から「クール」と言われる由縁であ  
つたらしい……。

それにしても、

歯科医院の中でもミオの言うところの『悪霊』的存在は居る

しかし、人数が少ない為 私のように周りと自分を遮断する事によ  
つて

何とかしのぐ事が出来る。

皆で仲良くしたらいいのにと単純に思うが 女の世界は日々動くも  
ので

たった一言で全員が敵に回る事もあるし 味方になる事もある。

そんな人間の心の動きを知る為に本を読むようになり

軍記物の本から人を動かす知識を学ぶようになった。

恋愛小説が本棚に一冊もないのは 単に私が極度の恋愛に対する『  
恥ずかしさ』からである。

テレビや映画で恋愛ドラマなどで愛が実った感動的なシーンなどに  
なると

背中がムズムズするぐらい恥ずかしくてチャンネルを替えるか席を  
立ってしまう。

ニヤツと笑ってしまった自分に気づいて 余計恥ずかしくなったりもする。

時代劇などの戦のシーンなどになると『心躍る』ぐらいワクワクしホラーやサイコスリラーなどは『ありえない』と笑いながら平気で見る癖に

恋愛ドラマが『背中がこそばくて見れない』などとそれこそ恥ずかしくて人に言えない……。

ちなみに、ホラーやサイコスリラーに大喜びする私を見てミオはちよつと引いてた……。

お昼休憩を済ませて午後の準備をしに休憩室を兼ねた準備室のソファでアラタ先生が歯科医師の専門の雑誌を読んでいた

この準備室は狭いスペースに無理やり棚とソファと飲み物やちよつとした私物を置いておく個人専用ロッカーを設置している。

ロッカーが置いてある事で必然的に人の出入りが激しい。

しかも、その狭いスペースが休憩スペースのような役割を果たしているのです、

いつも誰かが座っている状態である。

しかも、入口近くにソファと棚があり、ロッカーはその奥に設置されているので

ソファに人が座っている状態でロッカーに行こうとすると、立つてもらいか跨いで行くしか方法が無いほどの狭さである。

アラタ先生が雑誌から目を離して顔をあげたので

自分はロッカーには用事が無い事をジェスチャーで伝える。

そして、ソファの正面に設置された棚にしゃがみ込んで

午後の患者さんの技工物または補綴物ほてくぶつと呼ばれる入れ歯や被せなど

が入った箱を出していった。

必要な箱を出し終わって棚の整理をしていると

アラタ先生は私の喉のあたりをジイーと見ながら小さな声で

「昨日来ていた友達は彼氏ですか？」などと聞いてきた

「はあ？」

いきなり投げかけられた言葉の意味が理解出来ず怪訝な顔をしながら昨日来ていたのは女の子だと伝えると

アラタ先生がニヤニヤしながら

「ナジオさん首にその・・・キスマークが・・・」

指で自分の喉元を指示しながら言われた

「??キスマークって何ですか？」

怪訝な表情のままそう聞くと

アラタ先生は近くに置いてあった指導用の小さな手鏡を私に渡した黙って鏡を受け取り自分の首のあたりを見ると白衣の襟元から見える喉元が赤くなっていた

「ああ、さつきから痒いと思ったたら噛まれたんですかね？これキスマークって云うんですか？」

などと、真面目に答えたアラタ先生は吹き出しそうになりながら

「誰に噛まれたんですか？」

などと、聞いてきた。

噛まれる？誰に？と、小さく首をかしげて言われた言葉の意味を考えていると

アラタ先生が小さく吹き出した。

「誰って・・・何で笑うんですか?!」

小さな声で訴えた私にアラタ先生は

「それ、絶対他のスタッフにキスマークだって思われてますよ」

どうも、ツボに入ったらしく肩をひくひくさせながらそう云うと

「笑われるような事なんですか！ 私なんか誤解受けてるんですか？」

少し焦ったように赤くなった首をこする

「僕が気づくぐらいですから、たぶん他の女の子達は昨日彼氏につけられたとか思われてるんじゃないですか」

などと、必死で笑い声をかみ殺してアラタ先生が云うと

「彼氏につけられる？・・・え？キスマークってこれの事？虫刺されですよ？これ！！」

私が右往左往しだしたのがまたツボに入ったらしくお腹と口を手で押さえて体を丸の字に曲げて笑っている。

「もう！先生笑わないで下さいよ！　どうしたら虫刺されて判ってもらえるかな・・・」

目に涙を浮かべながら

「いや、逆に隠さない方がいいんじゃないですか？堂々としてましようよ！！」

と、私にひらき直れとアラタ先生は言うが、私はそれどころではない心情！

「知ってしまったたら気になって仕方がないじゃないですか！！」

あ！！絆創膏貼ったら判らないですよね？」

救急箱を取り出して、

無理やりアラタ先生に鏡を持たせて

それを見ながら大判の絆創膏を取り出して赤くなっている喉のあたりを隠すように張り付けた

その間アラタ先生はヒィーヒィーと奇妙な笑い声を出しながら笑っていた

「目立ちますって！！そんな所に絆創膏なんて貼ったら

開き直った方がいいですって　逆に隠すとやましい事でもあるんじゃないかと勘ぐられますよ？」

完全に状況を楽しむモードに突入したアラタ先生を尻目に

「大丈夫です。これ以上触らないように貼っただけなんですから

やましい事なんてありません！！」

そう言い残して技工物の箱を持って準備室を出ていた。

準備室を出て技工物を所定の位置に並べていると

先輩の衛生士の飯盛圭子が

「ナジオ。キスマークを今頃隠しても、もうみんな見てるわよ」などと笑いながら通り過ぎて行った

コウイチ先生に至っては

「あれ？隠しちゃうの？ ちらつと見えるのが逆に情熱的で良かったの〜い〜」

なんて言いながらニヤニヤしながら通り過ぎて行く。

「キスマークじゃないです！！虫刺されです！！」

「虫だなんて、彼氏に対して失礼よ」と他の先輩達が通り過ぎざまにからかっていく

とんでもない勘違いをされている事に気付く

やはりアラタ先生の言うように隠さずに開き直った方が良かったのか？と悩みながら

午後の診療を開始の合図を聞いた。

仕事が終了してまた 駅のホームで携帯のメールチェックをしているとアラタ先生と遭遇した。

アラタ先生は小さく手を振って「お疲れ〜」と言いながら近付いて来た。

携帯を鞆に直して軽く会釈をしてから「キスマークじゃないですよ」と小さく言った。

あの後さんざん他のスタッフにキスマークだと指摘され動揺して練っている途中の印象材と呼ばれる歯の型を取る材料を壁に飛ばしたり落したりして後片付けに翻弄していると

「なにやってるの！！」

と、ハルミさんに叱られ

子供の患者さんに「どうしたの？」などと指で絆創膏を突かれたりして散々な思いをした。

「ごめんなさい、僕が指摘しなければよかったですね。」

「・・・いえ、ご指摘があってもなくても、みんなにからかわれた事に変更はありませんから」

「あ！ごめんなさい」

ふてくされてそう言った私にアラタ先生は慌てて謝った。

「ナジオさんがキスマークを知らないなんて思わなくて」

「・・・」

・・・先生、それは追い打ちですか？

正直なぜ赤くなった首の事をキスマークと言われているのかが判らないので黙り込むと

「・・・もしかして、ナジオさん・・・」

「うるさい！！」

何を言おうとしたのかは判らないが、きっと良いことではないだろうと

言葉を荒っぽく遮って入ってきた電車に向かって歩き出した。

これ以上首の事を言われなくなかったのでホームに入って来た電車に飛び乗り

周りの人に見られなくなかったので、ハンカチをスカーフのように首に巻いて家に帰って来た。

お風呂の鏡で赤くなった喉を見ながら、なぜこれがキスマーク？と考えた。

キスマークは口紅を使ってつけた後の事だと思ってるので、意味が判らない。

お風呂からあがってすぐにミオに電話で聞いてみると

「キスマークってのは、口で思いつきり吸われた後の内出血の跡の事も言うのよ」

と、サラツと言われた

「喉になんでキスするの？しかも内出血の跡って、どんだけ強く吸ってるの?!」

「・・・喉だけじゃなくて全身にする事もあるでしょ？」

内出血が出るぐらい情熱的なキスって事でしょ。」

「全身にキスするの？」

「あんだ、キスって頬っぺたやオデコや唇だけにすると思ってたの？」

「外国の映像とかで手にしているのは、見たことあるわよ」

「・・・なんの自慢？知らなかったくせに自慢するんじゃないわよさつき全身っていったでしょ？ 個人的趣味の問題よ。」

「みんなする事？」

「個人的趣味よ。でも喉ぐらい一般的。他にも首とか鎖骨とかいろいろあるでしょ。」

あ、あと歯型とかもありよね！」

ミオにあっさり言われてドキマギしながらお礼を言って電話を切った  
その後も自分の心臓がドキドキする音がとても大きく感じてオーデイオから流れている大好き曲も全然耳に届かなかった。

とんでもない誤解をうけてしまっているらしい事は理解出来たが  
もう今更否定したところで 話を掘り返してまた誤解を受けるはも  
っと嫌だったので

訂正せずあきらめる事にした。

ってか、「歯型」ってなに？！！！！

体が温まって余計に赤く浮き上がっている喉元を鏡で見ながら大きなため息をついた。



休憩時間・1（後書き）

二日酔いの時に 消毒液の匂いって結構きつい物があります（笑）

私は良く

ダブダブのエプロンを着ると

取っ手などに引っかかります。（笑）

## 休憩時間・2

次の日は平日だがローテーションで仕事が休みの日だったので職場のスタッフに『キスマーク』を揃そろわれなくて済んだ。

今は綺麗になくなってているが

少しでも気持ち切り替えようと今日は外に出かける事にした

私は近代建築様式のビルなどの建物を見るのが好きで

近代建築様式のビルが多く現存しているオフィス街にバイクで出かけた。

最近はバイクの駐輪場スペースを備えた駐車場が増えてきた

以前はバイクの駐輪所と云いながら原付しか駐輪出来なくてを路駐するか電車で繰るしかなかったので今は大助かりである。

築100年以上はあろうかという建物を見ていると

その時代の建築家の技術やデザイン性に純粋に感動したり

建設当時の風景がどんなものだったのか？

これを使用していた人たちはどんな人たちだったのか？

などをブラブラ歩きながら考えたり

今でも使用されている近代建築のビルのカフェでコーヒーを飲みながら本など読んだりするのが私なりに楽しい時間の過ごし方である。いつも時間に追われながら仕事をしている私にとって

ただ時間が過ぎるのをのんびりと楽しむなんてなんて贅沢な事だろうと思う。

これが一人でなければ・・・と思うのだが

この趣味を理解できなかった過去の別れた彼氏を思ってもしょうがないので

今は一人を楽しもうと無理やり自分を励ましてみる。

あたりが暗くなってから

ライトアップされた大きな近代建築の近くのベンチに座ってMP3で音楽を聴きながら建築物を眺めていると

目の前をカップルが一組通り過ぎた  
どうも喧嘩しているのか険悪な雰囲気醸し出している。

いつもなら見て見ぬりをするのだが、

カップルの男性の方がどこかで見た事のあるような気がしてこのカップルの成り行きを眺める事にした。

私からよく見える場所に陣取ったカップルは  
何やら言い合いをしてる様子だった。

私には一方的に女性の方が怒っているように見えるのだが  
音楽を聴いているので会話の内容までは判らない、

一言二言短い文章で受け答えをしている様子だけが判る。

10分程その状況が続いた後、女性は急に逃げるように走って行ってしまった。

残された方の男性は、結構な距離があるここからでも判るぐらい大きなため息をついて

いかにも疲れました。と、言わんばかりの勢いでうなだれた。

・・・修羅場終了？

と、思いつつも『どうせ他人』と、野次馬気分で男性のその後の行動を確かめようとベンチに深く腰をかけた。

しばらくして放心状態から覚めた男性は

私が座っているベンチの近くに座ろうとしたのかこちらに向かって歩いてきた

その男性の姿に、どこかで観た事があるような気がしてならない。

あの、姿勢よくゆっくりと歩く姿・・・どっかで、見た事あるんだけどな・・・

そんな事を思いながら男性から目が離せなくなっていました。だんだんと近づいてくる男性の顔をはつきりしてくると、  
「またもあり得ないような偶然に見てびっくりして思わず声を上げた。『どうせ他人』だと思っていた男性は『良く知っている』アラタ先生だった!」

げっ!!

女性的にどうなんだろう?と思う声を上げてしまった私の声に反応してこちらを向いたアラタ先生は声の主が私だった事にまたびっくりした様子で立ち止まる。

「えっと・・・こんばんは」

一部始終を目撃してしまった後なので、気まずい雰囲気のままごく一般的な挨拶をした私に、

「気まずい状況に苦笑いをしながらアラタ先生も「こんばんは」と返した。」

「なんかとんでもない現場に居合わせてしまったみたいで恐縮です。」

「イヤフォンを耳から外しながらそう言うと」

「僕もとんでもない現場を見せてしまったみたいで恐縮です。」  
「力なくそう返事がかえってきた」

「まあ、どうぞ」

自分の座っているベンチのあいっている部分をアラタ先生に勧めると素直に隣に腰をかけた。

「とりあえず、音楽を聴いている場合ではなさそうなのでMP3を操作して音楽を止めて鞆の中に直す。」

「ありえないところで、ありえない人にあってしまったものでどうしていいのか判らないのですが・・・追わなくていいんですか?」

「僕もこんなところでナジオさんに会うとは思わなかったのでビッ

クリです。

彼女は追わなくても大丈夫です。

もう振り回される事に疲れてしまつてさつき別れ話を切り出して別れたところですよ。」

疲れた笑いを顔に浮かべたアラタ先生にそうですかと、小さく返事押してライトアップされた建物を見上げた。

「ところで、ナジオさんはここで何を？」

アラタ先生のもっともな質問に建物に顔を向けたまま答える

「私、こういう近代建築が大好きで 休みの日に

ブラブラと建物を見に歩いたりするんです。

今日は、今この建物がライトアップされてる期間なので見に来たんです。」

「え？一人で？」

「一人です！！彼氏がいない事は先生ご存じだと思つてましたけど？」

少しびっくりした様子でもっともな質問をされたので少し頬を膨らませて答えた。

昨日、彼氏いないのにキスマーク出来てるよ！！つて

さんざん私の事からかつたじゃないか！！

アラタ先生は膨れっ面の私から建物に視線を変えて取り繕うに言われてみると時代の重みがあるような建物ですねと話始めた

あ！！旗色が悪くなつたから無理やり話題変えた！！

まあ、良いけど・・・。

「今まで、何も思わずに見てましたけど この建物は僕らが生まれる前からここにあったんですね。」

何気なく言つたであろうアラタ先生の発言、

それは私のツボです・・・

そう思いながら建物を眺めながら答える

「先生、いいところ突いてきますね。」

この建物ちよつど約90年前に建築されたんです。

ちなみに横の建物、あつちとあれは約100年前」

「詳しいですね。でも100年程前と云う事はこの建物は戦争の戦火を乗り越えて現存しているって事ですよ？よくぞ残っていてくれたって感じですね。」

アラタ先生の発言がまた私のツボを刺激する。

2回目のツボです・・・。

「そうなんです、

戦争も乗り越えたし なんて言っても この建物が出来る40年ぐ

らい前には

ぢよんまげあたま

丁髷頭の人が

当たり前<sup>に</sup>このあたりを歩いていた事なんですよ!!

文明開化からたった40年でこんな建物を建てちゃうんですよ!!

凄くないですか?!」

「そうですね、文明開化する前までは

当り前のように丁髷に日本髪 着物姿の人ばかりだったんですもんね。

それが150年前ですもんね。

たった150年で強制的にですけど、

今までの長い文化をあつさり捨てちゃうところが日本人ですよ。

学習能力が高いと云うか、順応性が高いと云うか、洗脳されやすいと云うか・・・

まあ、このままではいけないという危機感のような物があつたのが

正解かもしれませんが。」

アラタ先生はそこまで言ってから私の方を見て

「でも、今までのままではダメだったから、

維新が起きて新しい物を取り入れたって事ですよね？」

### 3 度目のツボをギュッと刺激

「同じ意見の人に初めて会いました。

意外と近い所に同じ考えの人が居た事に二度びっくりですけど」

テンションが上がってくる自分にセーブをかける為にわざと、素っ

気ない言い方をして

アラタ先生の方を見ないように建物を見つめる。

「この建物にまつわる人がどんな思いを込めてこの建物を建てたのかとか

歴史の教科書に出てくるような有名な世界を変えたような人達がここを訪れた時のエピソードとかを知るのが好きなんです。

昔の人はお金の事は二の次で、最高の職人さんが最高の技術を注いで作った建物だからこそ100年もの間、震災や戦火を免れて現存しているって思ってます。

「つてか、先生の150年前を『たった』つて言うセンス良いです」

「長い歴史をみたら150年つて『たった』でしょ？」

「私も『たった』つて感じるんですけど、一般的には『たった』ではないでしょう？」

「確実に150年後つて人間死んでますからね」

「そういつて笑った私をアラタ先生は眩しそくに眼を細めて見つめた先生どうしました？」

「いや、こうやってナジオさんが熱く語るどころ初めて見たんでなんか意外で」

「いやあ〜これでもかなり、セーブしてますけどねえ・・・。」

「意外ですか？私にしたら職場の方がありえない私ですよ」

「僕も、仕事では人格作ってますから同じですね。」

でもナジオさんをちよつと垣間見た感じですよ。」

アラタ先生が軽く微笑んだ。

ヤバイ！これ以上私の好きな話をしていたら暴走してしま  
そうだ。



## 休憩時間・2（後書き）

最近、単車を駐輪出来る駐輪場が増えて喜んでます。

単車を車の駐車場に駐輪すると 車のドライバーさんに嫌そうな顔されるし、かといって自転車と原付の駐輪場しかないと来たもんだ  
！！

単車は街乗り用としては向いていないのか？！  
と、常々思っていました。

### 休憩時間・3

「私が！熱く建物の事語っても先生は面白くないでしょ？」

先生の好きな話とか聞かせて下さい。」

自分が暴走をしないように

無理やり話を変えると、「そんなことないですよ。楽しいですよ。」と、答えつつも話題を変えたいと云う私の思いを察してくれたのか自分の趣味を語りだすアラタ先生。

「僕は乗り物全般が好きです。電車や飛行機が好きで・・・特に好きなのは戦闘機です」

最後の方は少し声が小さくなった

「私も乗り物大好きですし戦闘機とか軍用ヘリとか好きですよ。」

私の返事にかなり意外そうな顔をしたアラタ先生は

「好きなんですか？例えば？」と食いついてきた。

「え？例えば・・・王道でイーグルとか・・・あえてのファントムとかトムキャット？」

でも、ブラックホークとかヒューイとかコブラとかもカッコイイですよ。」

でも、ハリウッド映画とかで悪役が乗ってるのとか見ると、

ヘリが悪役の乗り物みたいで嫌になっちゃうのでハリウッド映画は好きじゃないです。」

つてか、人間独りで戦闘ヘリを打ち落としちゃう時点で好きじゃないんですけどね。」

アラタ先生は一瞬意外そうな表情をしながら聞いていたのにファントムと言ったあたりから

突然ビツクリした顔に表情を変えて「詳しいですね！」と真顔で言った。

逆に私もアラタ先生の食いつき具合にびっくりする

「広く浅い知識があるだけですよ。」

「広く浅いって、結構浅くない知識ですけど?!」

「浅いですよ 聞きかじっただけの知識です。」

マニアって言われる程の知識があるわけじゃありませんから。

名前を並べるだけなら誰にだって出来るでしょ?」

「一般女性の口からイーグル程度ならともかく

フロントムとかヒューイはまず出てこない愛称だと思いますけど?」

「もう、そこには食いつかないください。」

そう言っただけのアラタ先生の勢いに吞まれそうになった私はアラタ先生の顔に「STOP」と言わんばかりにかざして話を止めた

自分が暴走することを恐れて話題を変えたのに先生がまさかの暴走?!

「いやいや、僕も好きですから ここは食いつきますよ」

アラタ先生は私の手を顔の前から除けさせると

本当に浅い知識しかないんですから食いつかないで下さいってと、ちよつと逃げ腰で答える

「さつき走って帰った彼女に最後に言われた一言が

『軍オタ君にはついていけない』だったんです!

別れた直後に理解してくれる人がこんなに近くにいるなんて食いつくでしょ普通?!」

そんな事が原因で別れるなんてなんて心の狭い女性

でも、それが今時の普通の人なんだろうと思いますよ・・・。

自分の趣味に理解を示してくれた事で

アラタ先生がついつい先程彼女と別れた事をすっかり忘れていた

「先生 軍オタ君だったんですか? 私は違いますよ。ただ乗り物が好きなだけですから」

「僕も軍オタじゃないです! 乗り物が好きで、その中で戦闘機が好

きなだけです!!」

「じゃあ、ブルーインパルスとか目を輝かせて見るタイプですね。」

「ブルーインパルス!!!この言葉が出る時点で普通じゃないですって!!」

「ブルーインパルスは有名ですから、誰でも知ってるでしょ？」

「じゃあ、先生もしかして 彼女とのデートで海自の護衛艦とか練習機の一般公開とかに

行っちゃうタイプですか？」

「ええ、ええ・・・やっぱり駄目なんですかね？」

最初は喜んでくれたんですけど、何度も行くとどれも同じじゃない！  
て言われてしまって・・・って。」

「興味がない人がみたら、護衛艦なんて全部一緒ですからね・・・」

「・・・やっぱり、ナジオさん詳しくすぎますよ!」

「そんな事言われても・・・まあ、私の事は置いておきましょう。」

で、彼女にそれが嫌だと言われたんですか?」

「恋に恋するタイプの人だったんで・・・人の趣味に合わせるのに飽きてしまったみたいで・・・」

だんだん話に熱がこもってきたアラタ先生は自分の守備範囲の会話がどこまでできるのか

はつきりしたいらしく、会話に食いつくのと同時に私の手を取る勢いで近づいてきて来たので、また無言でアラタ先生を遮る

「すいません、ちょっと熱くなつてしまいました。」と、慌てて距離を置いた。

私のレベルをはつきりと伝えておいた方がいいかもしれない。

「自分の趣味を否定させてたら辛いですよね

私もさつき先生が近代建築に対する私の思いと同じ事を言っただけです  
つた時は

正直嬉しかったです」

そう言ってペコリと頭を下げた。

「で、さっきも言ったとおり

私は乗り物が好きで、その知識の中に戦闘機があっただけで詳しくはありません。」

戦闘機のスペックと名前を知っているぐらいで普通じゃないと云われるのは心外です。」

あくまでも普通の女性であると主張したい私は、きっぱりとそう言った

「僕もそうですよ、オタクと呼ばれる程の知識を持ち合わせていないのに

『軍オタ君』扱いされた揚句に振られる理由になっちゃったんですから」

「失礼ですけど、それは彼女・・・あ、元カノですか、元カノさんの器が小さすぎるんですよ。」

いいじゃないですか、戦闘機が好きなくらい、ちなみに私の携帯、今の待受画面はイーグルですよ」

そう言って鞆の中から携帯を出して待受画面をアラタ先生に見せた。

「イーグルが携帯の待ち受け画面って王道で良いご趣味ですね。」

ちなみに僕はT-4です。」

アラタ先生もジーンズのポケットの中から携帯を出して私に見せてくれた。

「やっぱりブルーインパルスが好きなんですね。」

その前の待受画面は新幹線のドクターイエローだったんですよ。」

そう言いながら携帯の時計を見て愛車を駐車している駐車場の営業時間の終了時間が近い事を思い出した。

今後も職場で顔を合わせると判っていて、今のこの場の盛り上がりをもう少し楽しみたいと素直に思った。

「先生、会話が盛り上がっているところで大変申し訳ないのですが、私、駐輪場の営業時間の終了が近いので、移動させないといけないんですけど・・・。」

とても、寂しそうな顔をしながら「そうなんですか」

と言って、アラタ先生も自分の腕時計で時間を確認する

「それでなんですけど、

せつかなので、どちらかで飲みながら話しませんか？」

私が控えめに提案すると

一瞬にして嬉しそうな表情に変わったアラタ先生は「はい！」

と、元気よく返事している・・・

今のアラタ先生に犬のしっぽがついてたら めっちゃ振ってそんな感じ・・・。

なんて喜怒哀楽が判りやすい人！

「じゃあ、先に自転車取って来て下さい。僕は電車で来たのでここで待ってます。」

あ、私が駐輪場って言ったので先生 自転車と勘違いしてる・

このまま訂正せずにバイクを取りに行つてビックリさせてやるのか・・・

とも考えたけど、ここにバイクを乗り入れさせる事が出来ないの  
正直に

「バイクです」と訂正

「あ、すみません じゃあ、バイク取って来て下さい」

それでも、先生は原付程度のサイズだと思つているんだろう  
な

スリムタイプのバイクとはいえ 250CCのオートバイな  
んだけどな

まあ、いいや。

「では、このへんに居てください。すぐに戻ってきますから」  
そういつて、とりあえず駐輪場に向かって愛車のバイクを出してくる  
数分してバイクのマフラー音をとどろかせて先生のもとに戻ってく  
ると

やはり、原付を想像していたのか

バイクのエンジンを止めて バイクに跨ったままヘルメットを取ると  
「・・・すみません、原付だとばかり思っていました・・・」

やっぱりか・・・

素直な反応にちょっと気分を良くしつつ冷静を装ってみる。

「ほんとナジオさんは僕の想像の斜め上を言ってくれますね!」  
そういつてアラタ先生は笑った。

お？私の華麗なバイクの登場で傷心を癒したか？

・・・そんな訳ないか・・・。

「とりあえずどこに行きましょう?」

「僕が指定してもいいんですか?」

「いいですよ。」

「じゃあ、インパルスに行きましょう!! 今日、営業してますよね  
?」

「してますよ。」

それと、絶好のタイミングで良い店の名前を出してくれませぬ。  
笑いながらそう言うアラタ先生は不思議そうに私を見た

「私が戦闘機とかに詳しい理由はインパルスのオーナーですよ。」

あの人は本当に『軍オタ』でね。

お店はアンナさんの賢明なるブロックのおかげでああなりましたけど  
店の奥にはプラモデルとか写真とかがたくさんあるんですよ。

で、アンナさんがいない時に

『陸上自衛隊の歴史はなあ、昭和25年に設立された警備予備隊から始まって』

とか事あることに吹き込んでくるんですよ

しかも、私の携帯の待ち受けを勝手にイーグルに変えたのもオーナーなんですよ!!」

「そうだったんですか」と、嬉しそうにアラタ先生が答えた

「では、先生は先にインパルスに行っていただけですか？」

私は足がありますんで、家に置いてからお店に行きますから。」

「僕がそのバイク運転しちや駄目ですか？」

「免許持つてらっしゃるんですか?!」

「車の免許と一緒に中型の免許も取ったんです」

基本的に自分のバイクを人に運転して貰うのは抵抗があるが

今のこの雰囲気壊すのは悪い気がして素直に提案を受け入れる事にする

「そうなんですか、じゃあ半ヘルはあるのでこれ使ってもらって

私、タンDEMシートに乗ってもいいですか？」

「・・・タンDEM走行って久しぶりなんですよね」

「え?!私が前ですか?!」

「その案も捨てがたいのですが、良ければ僕が運転しますよ・・・」

「もしかして、私はタクシーで並走ですか・・・?」

「そんな訳ないでしょ!!」

「大丈夫ですよ! ちゃんとタンDEM走行出来ますよ! いや、

大切にされているみたいだったのでバイク運転させて貰ってもいいのかと思います」

「ああ、そうなんですか・・・私はてつきり・・・もちろんいいですよ。」

そのかわり、私をタンDEMシートに乗せて下さいね。」

そういつてバイクから降りると

半ヘルをアラタ先生に渡してシートを譲る

タンDEMシートに座る準備を済ませるとタンDEMシートに跨る。



「私、タンDEMシートに座るのは教習所以来ですよ！」

「そうなんですか？　じゃあ、遠慮なく僕に捕まったださいね」

「あははは、出発しても大丈夫ですよ」

憧れの「彼氏の腰に手をまわしてタンDEMシートに座る」の構図は自分の小さなプライドによって即座に却下

アラタ先生に一切触れる事なくしつかりバランスを取って座っている自分に

可愛げがない事を自覚・・・

「ちゃんと、捕まったださいね。」

そう言っただ、エンジンをスタートさせてスムーズに発進させる

初めてタンDEMシートに座って公道を走る景色はいつもと違って見えて

なんだか新鮮で

前を見るとアラタ先生の背中しか見えないので

憧れのポーズだと横に流れる景色しか見れないんだなんてぼんやりと考えながら

自分が運転する事なく進む愛車を不思議な感覚で跨っていた。

タンDEMシートから自宅の場所をナビしながら

自分の部屋の駐輪場にバイクを駐車してから

二人で歩いてインパルスに向かった

その道すがら、アラタ先生にインパルスのオーナーに教えて貰った知識などを

話は尽きる事なかった。

あっという間にインパルスに到着し

店に入って注文を済ませて　さっそくオーナーにアラタ先生の趣味の話をする

喜んで厨房から出てきて

一瞬にして意気投合し

他のお客さんも巻き込んで　盛り上がり始めた

「類は友を呼ぶ。隠していても集まっちゃうのね

ナジイーは私と一緒にこっちで飲みましょう」

アンナさんはそう言いながら。

カウンターから離れたテーブル席で

盛り上がるオーナーとアラタ先生の嬉しそうな顔を眺めてお酒を酌み交わして過ごした。

休憩時間・3（後書き）

ナジオ念願のタンDEM走行です。

私もバイクのタンDEMシートに座ってツーリングに行きたいわ〜！

## 再診・1

夕方、込みだす時間 予約外の新患しんかん（初めて来院された患者さん）が重なって

スタッフも患者さんもピリピリした雰囲気の中  
頭をフル回転して最善・最短の方法を考えて行動していた。

コウイチ先生のアシスタントについていた私は  
手の空いているアルバイトを手招きして呼んで

「シズカちゃんこれ練ったことある？」

と、アルバイトの松井静香まついしずかにセメントと呼ばれる接着剤を混ぜた事があるかどうかを聞いてみた

今回使用するセメントは粉末と液体を適量使用して混ぜるだけなの  
だが

一見簡単そうに見えるが均等に手早く気泡が入らないように練らなければならぬので

見ているだけでは出来るようにはならない代物なのだ

時間があれば練習するように言っていたが・・・シズカの様子から練習していかない事がうかがえた。

少しもじもじしながら

「何回か練った事はありますが・・・自信がありません・・・」  
と、小さな声で返事が返ってくる。

「練った事あるんだったら いいから練って」

断るつもりでシズカは言ったのだろうが、私があっさりそう言ったのでシズカはパニックになった。

「で、できません」

練る事をやんわりと拒否されたが

どうしてもコウイチ先生と二人の手足りない状態なので私も引くわけにいかない

コウイチ先生も何も言わないが、じつとシズカの方を見ている。

「練って」

シズカを見据えながら強くそうと

泣きそうになりながら練成器と呼ばれる混ぜ棒を握ってくれたが、緊張の為か微かに震えている。

時間がないので内心イライラしながらシズカを見つめると

震えながらもシズカは練り始めてくれた。

練り始めたのを見て今まで黙って成り行きを見ていたコウイチ先生が歯の周りのエアールと綿花で防水をしてセメントが練りあがるのを待った。

私もコウイチ先生と違う角度から先生の視野確保と防水の作業をする。

練りあがったセメントを私が先ほど作ったテック（テンポラリークラウンと呼ばれるプラスチックでその場で作る仮りの歯）の内面に流し込んでセメントを練った紙の上に載せて

シズカはコウイチ先生が取りやすいように向きを考えてテックを渡す。

コウイチ先生は向きを変える事なく受け取り歯に嵌め込む

シズカが差し出したガーゼを受け取り患者さんに

「セメントが固まるまでしばらく軽く噛んでお待ちください」と、ガーゼを噛んで貰う。

カルテに診療内容を書いているコウイチ先生を置いて

私は立ち上がってシズカに付いて来るように小さく手招きしてユニットチェアを離れた。

準備室の奥にシズカを連れていくと

「シズカちゃん患者さんの前で出来ないとか自信がないとか言わないで。」

無理やりやらせた私も悪いけど、自分の治療をしてくれる人が『自信がない』とか

言われると不安になるでしょ？

それに『出来ない』からやらなかったら何も出来ないでしょ？

他のスタッフはともかく、私は『やった事がないですけどやってみたいです』

って言っただけ」

私は小さな声でシズカいさういとうと、シズカは壁にめり込むように小さくなっていった

小さくなったそんな姿は小動物みたいで可愛いけど、

言うべきことは言わなければならぬのが私の仕事・・・

・・・正直つらい・・・

「まあ、取り合えず練習してくれて助かったわ。

唾液の多い人でね、コウイチ先生と二人でも手が足りなくて困ったのよ。」

じゃあ、今からさっきのセメントを練る練習して。

練習終わったやつは私がチェックするから、捨てずに置いておいてね。」

そう言い置いて先程のユニットチェアに戻って行った。

シズカも社会人になったら判る事だが

怒られる事を恐れていたなら何も出来ない。

出来なかったら練習したらいいし、判らなければ調べて勉強したらいい。

1から10までお膳立てして貰わないと出来ないなんて社会人じゃ通用しないから、

自分でしないといけない事を考えて、出来る事をしないといけないそうじゃないと、自分が本当にしたい事がしたい時に出来ない・・・  
今から、少しずつ社会に出る練習のつもりで働いてくれたらいいと

私は考えている。

しかし、歯科医院のアシスタントは簡単なようで難しい。

術者（ドクター・衛生士）に器具を一つ渡すにしても術者が受け取ってから向きを持ち変えないように考えて渡さねばならない事とマスクをしている上に、下を向いて指示を出されるので

何を言われているのかが聞き取りづらい

術者の癖を覚えて出す器具・順番・方向を把握し術者が術野（術者が見ている治療部位）から目を離さなくてもいいようにスムーズにアシストしなければならぬ

一度覚えてしまえば同じ事の繰り返しなのでたいした事はなくなるのだが、

覚えるまでが大変。

少しずつスタッフに教えて貰うのだが、何せ現役の学生アルバイト歯科医師や歯科衛生士を目指すならまだしも、仕事に対してそこまですで真剣に考えている筈もないそれに、若さゆえで

周りの事をあまり考えない言動などで相手が発言でどうとらえるかを考えていない。

まだ社会の厳しさを体感していない学生という身分

自分にもそんな時代があったので、自分の事を棚に上げて強くは言えないが

シズカにはいい社会人になって貰いたいので後で説明する事にする。

「シズカちゃんにちゃんとフォローを入れておきましたよ」

通路でアラタ先生にすれ違い際にそう言ってきた。

話を聞いてたんだ・・・と、少し恥ずかしく感じつつ

私は自分がまたアラタ先生がフォローを入れなければならない発言をシズカにしたんだと思い

あとでちゃんと謝っておこうと思った。

コウイチ先生が患者さんのポンティックからはみ出て固まった余分なセメントを除去し

注意事項と次回の治療について軽く説明した後、治療は終了、チエアーの後片付けを他のアルバイトに任せてシズカの居る準備室に戻った。

「シズカちゃん、練習進んでる？」

そう言って覗くと、シズカは固まったセメントがついた紙を数枚見せてくれた。

「あまりうまく出来ませんでした。」

シズカから紙を受け取って一つ一つ確認してゆく

「ナジオさん」

「ん？」

「すみません」

シズカはそう言ってペコリと頭を下げた。

「ん？別にいいよ。」

これだけ練習したんだから、次から大丈夫だね。

どンドンやって行ったらいいんだよ。

自信がいたら他のスタッフに自分から『練らして下さい』って言うてやらして

貰ったらいいし。」

そう言うてシズカに簡単にセメントの練り方をもう一度説明する

「これぐらい広げて十分に気泡を抜いて 集める時に抜いた気泡が入らないようにしてね。」

もちろん、技工物に入れる時も気泡が入らないように隅から

そっと流し込むように入れてね。

これは固まるのが遅いからいいけど 結構他のセメントは早く固まるから手早くね

云うのは簡単だけどやるのは難しいんだよね」

シズカはにっこり笑って黙って頷いた。

「あと、ごめんね 私ちよっときつく言いすぎた。」



さつき、アラタ先生に『フォロー入れときましたよ』とか言われた  
んだけど

先生どこに居たの？ 患者さんが居ないからって奥に隠れてたの？」

シズカは小さく笑いながら近くの扉を指さした

そこは、準備室の隣に設置された私たちの安息の場・・・トイレ・・・

・

「トイレかよ！ こんな処に隠れてたの？」

つてか、トイレから出てきてフォローって！！なんかカツコ悪！

どうせアラタ先生の事だからサラっと言つてのけたんだろっけど「

小さく肩をすくめてそう言つと、シズカはお腹を抱えて声をかみ殺  
して笑い始めた。

シズカちゃんが笑ってくれたならそれでいいわ。

アラタ先生ありがとね。

本日の業務が終了して

駅のホームで携帯をチェックしているとアラタ先生が声をかけてきたので

私の方から挨拶をする。

「先生お疲れ様です。」

今日は素敵な所から出現して素敵なフォローをシズカちゃんに入れていたでいて

ありがとうございます。」

「そんな言い方しないで下さいよ。」

皆が忙しく走り回ってる時に自分だけ仕事がなくて気まずくてちよつと、トイレで瞑想してただけですよ。」

私はアラタ先生の「瞑想」の一言に無言で冷やかな視線をアラタ先生に投げかけた

仕事中に息抜きをしたい時に用もないのにトイレに籠るスタッフは多々居る。

私もたまに籠る事もあるが

分刻みで仕事が押し迫っているので、ちよつと憧れの場所であったりする。

そんな事を一人つらつらと考えていると

「ナジオさん！今からインパルスに行きませんか？」

と、アラタ先生が提案してきた

すっかりインパルスの常連客になってしまったアラタ先生は独りでもインパルスに行くようになったらしい。

家とは真反対の場所にあるのに……。

今まで、職場の人とはあまり一緒に居たくなかった筈なのに

なんで、最近よくアラタ先生とインパルスに行くようになったんだ  
ろう？と、思いつつ

手にしていた携帯のメールの受信確認をして 予定がないかをチェ  
ックする。

「いいですよ。」

私が頷くのと同時にインパルスのある方面、つまり私がいつも乗っ  
ている側の電車が到着するアウンスがホームに流れた。

二人で到着した電車に乗り込み電車の入口付近に並んだ。

「先生、私ね、帰りの電車から見える家の明かりを見るのが好きな  
んです。」

あの明かりの一つ一つに生活があつて。

ドラマがあつて、喜怒哀楽が納められてるんだな〜って思うと、  
なんだか自分の居る世界は広いんだな〜まだまだ知らない世界が沢  
山あるんだな〜

って思うんです。」

電車内の扉付近でアラタ先生と立ちながら

ぼんやりと窓の外を流れるネオンを眺めながらそう言つと

「ナジオさんって意外とロマンティストなんですね。」

僕なんて『あそこが家だつたら通勤が楽なのに。』とか考えてます。

「

先生、意外と現実的なんですね」

そう言つと二人同時に吹き出した。

「僕、最近インパルスに行かせて貰うようになって

今まで自分が求めていた環境が手に入ったと喜んでいるんですよ  
もつと早くにナジオさんと仲良くなつておけば良かったと、それだ  
けを悔やんです。」

「きつと、あのタイミングで先生と話が出るようになったのには

きつと意味があるんですよ。早くても遅くてもきつと駄目だったんですよ。だから、悔やまないでください。」

「タイミングですか・・・やっぱり、ナジオさんはロマンティストですね」

アラタ先生はそう言って微笑んだ

それは本当に優しい微笑みで、今までに感じた事のない温かい気持ちで胸がいっぱいになった。

「私、今まで女性ばかりの環境で過ごしてきたのですが

テレビとかお話に出てくる 男の人独特の無茶やノリの良さに憧れてきたんです。

それを見るたびに『なんで、私男に生まれてこなかったんだろ?』って

本気で悩んだ時期もあったんです。

思ったように振舞って、思ったように話をしていたら

『もっと女の子らしくしなさい』とか『女の子なんだから』って言われ続けて

ちよつと神経質になっちゃったんです。

それに、「名塩」って名前変わってるでしょ?

私の祖父が紙漉の職人をしていて、

名塩紙って云う襖とかに使用される和紙から取って、

日本的な女性に育って欲しいって云う願いを込めて付けたみたいですよ。

でも、親の知らないところで「変な名前」って言われてたんですけどね。

子供にしたら「和紙の名前なんかつけられてるし!」って感じですよね。

でも、女に生まれた以上、女として生きようと思って

親の望むような女性らしい女性になってやろうと努力をしてきたんです。

でも、最近気づいたので、人には向き・不向きがあるように

自分は馬鹿騒ぎが出来るようなタイプではないんだと判ったんですよ。」

インパルスでアラタ先生と二人で飲んでいて

だいぶお酒が入った事も手伝ってか

ミオにすら語った事のない素の自分を知って欲しくなったのか私は静かに語り始めた

アラタ先生もあえて口をはさむでもなく、ただ静かに頷きながら聞いてくれていた。

「自由に思った事を出来るはずなのに、無意識に行動に移すのを辞めてしまっんです。」

『常識的に考えて今はこうするべきではない』って思考が邪魔して自分の思い通りに行動出来なくて、自分で自分にイライラするんです。

そして、自分で自分が判らなくなってしまっんです。

思考回路の迷宮に勝手に入って行って、迷子になっちゃっんですよね……。

本当は、もっと「はっちゃけちゃいたいんです。もっと馬鹿笑いをしていたいんです。」

そう言いながら、机に顔をうずめるように頷垂れた

「ナジオさん、電車の中で言ってたじゃないですか

『今はそのタイミングではない』んだと、きつと神様が今はナジオさんにはっちゃけて欲しくないんですよ。

でも、本当に強く望むのならきつと願いは叶いますよ。」  
そう言っってアラタ先生は私の頭を優しく撫でた。

先生の手、温かい大きな手だ……。

「ナジオさん酔ってますね・・・もう帰りましょう。家まで送りましょうか？」

今日はいささか飲み過ぎたせいかさすがに通いなれた道だとしても

一人で返すのが心配だとアラタ先生がそう主張する

「大丈夫です、一人で帰れますよ。」

先生、そろそろ終電の時間ですから、私の事はお気になさらずに「そう言つて立ち上がったが、自分でも感じるぐらい足もとが少し危なっかしい

「今日はさすがにその状態では。」

『じゃあ、判りました。さようなら』って帰せないですよ！

送りオオカミにはなりませんから。ちよつと待つて下さい。」

そう言つてお会計に立ったアラタ先生の背中に向かって

大丈夫ですよ 先生、終電の時間ですよと、同じ事を繰り返している。

私、完全に酔つてる・・・。

酔っている自覚がある酔つ払いつて案外います。

今、まさにそうです。

どんな状況でも帰省本能とでも言うべきか

本人は家に向かって歩いていますが、道の案内までは出来ない

私とアラタ先生では身長差がありすぎるので、肩を支えてもらつて歩いているが

どう見ても私を背負うようにして歩いている様にしか見えないはず・・・。

「ナジオさん、大丈夫ですか？」

明日、お休みですから家に帰つてぐっすり寝て下さいね」

「せんせゝ、見て！お空が綺麗だよ。お月様がとっても明るいね」

夜空を見上げながらそう言う

「本当ですね。とっても綺麗ですね。」

「せんせ〜お月様から地球を見たらどんな感じなんですかね？」

「太陽みたいに、地球が昇ってくるのとか見てみたいですね。」

写真とか映像ではなく自分の目で。

宇宙旅行って僕たちが生きている間に行けるようになったらいいですね。」

「月に？」

「行ける日がきつと来ますよ。強く願っていたらそのうちに」

2人は空を見上げながらゆっくりと歩いて行った。

ようやく私の部屋に着いた私たちは

私に部屋のカギを開けさせて部屋に放り込まれた。

アラタ先生は玄関の扉から一步も入らずに

「ナジオさん！！ちゃんと鍵をかけて下さいね！！」

と、繰り返しているが

私の脳内からはするりと戸締りという概念が抜け落ちている。

それを瞬時に読み取ったのか、

「あゝあ！もう！、んじゃ、僕帰るんで、風邪引かないように寝て下さいね！ おやすみなさい。」

と言いながら靴箱の上に置いた鍵を手に取り

先生が扉の外からカギをかけて 郵便受けから鍵を落としてくれた。

そんな先生の行動も私の脳内からするりと抜け落ちる。

そして、服のままベットにダイブして朝まで目を覚ましませんでした……。

朝起きてから、アラタ先生の家の方角であろうと思われる方角に向かって

ひたすら謝りました……。

ごめんなさい。ありがとうございます。以後気をつけます。



今日はコウイチ先生のアシスタントとして補助についていた  
今は治療に使用する器具を準備する為に 材料準備室で作業中であ  
る。

病院と云う環境上

患者さんから患者さんへの感染・患者さんからスタッフへの感染が  
ないように

消毒を神経質なぐらい徹底的に行う。

器具によって様々な方法で消毒されて保管され

清潔を不潔にしないように最新の注意を払われている。

ゴミの処分に関しても、

針やメスの刃などの危険物や血液や唾液のついた感染の恐れのある  
物は

バイオハザードマークのついた密閉缶の中に入れられ産業廃棄物と  
して処分される。

それ以外の普通ゴミなどは一般のゴミとして廃棄される

術者の癖と好みにあった術式の順序を考えながら

器具を不潔にしないように注意を払いながら準備していると

コウイチ先生が材料準備室に入ってきた。

コウイチ先生は衛生士業務がない時に主に私がアシスタントにつく  
事が多いドクターで

一緒にペアーを組んで仕事をすることが多い。

「最後ナートしようか」

「はい」

ナートとは縫合をする器具の事を指す

先程準備した器具とは別に縫合を行うのに使用する器具を別のトレ  
ーに乗せいく。

「ナジオさんは合コンとか行かないの？」

「行きません」

コウイチ先生の質問に即答。

手を休めずに

消毒した器具が不潔にならないように注意を払いながら

引出しをあけたり 消毒保管所を開けたりして 今から必要になる

器具を出していく。

「楽しいのに」

コウイチ先生はオートクレーブ（高圧蒸気滅菌機）と呼ばれる器具を消毒する機会に顎を乗せて笑っている。

コウイチ先生は

仕事中は目を守る為に透明な大きなゴーグルをかけ一見冴えない風貌なのだが

一歩仕事が終わると

おしやれに気を遣う今時の人間に変身する。

『コウイチ先生には気をつけよう』

それが合言葉のようにさつき歯科の女の子組の中で囁かれている程の女好きで

以前勤めていたアルバイトの可愛い女の子を食事に誘ってお持ち帰りしたとかしなかったとか・・・

結婚を目前にした彼女がいるとかいないとか・・・

いろいろな噂が飛び交っている要注意人物である。

私はアシスタントとして担当する事が多いので、

ドクターの中では一番話をする機会が多いのだが

真顔で下ネタを言ったり、返答に困るような際どい質問をしてきたり

合コンでの女性の口説き方などの話題が多いので

いろいろと経験の少ない私にはちよつと苦手な存在だが、

コウイチ先生と言う人は自分の個性を相手にそれを受け入れさせて

しまう不思議な雰囲気醸し出している人でもある。

そんなコウイチ先生

さつきからちらちらと時計ばかり見ているので

おそらく今日も合コンに行くの出だろうと推察。

だから、私に合コンネタを振ってきたのかな？

なので、興味本位に聞いてみた。

「今日の合コン相手は看護婦ですか？CAですか？女子大生ですか？」

「CA」

やっぱり、行くんだ・・・。

「って、先生確か彼女居ませんでしたか？」

私のしつもんにもコウイチ先生は口角をにゅっと上げてニヤッと笑うといるよおくと、気の抜けるような返事をした。

「それって、どうなんでしょうね？」

私がつんざりした顔をしてそう言う

「大丈夫だよ、彼女も他の合コン行ってるから」

などと、明るい表情でヘラヘラと笑って手を振っている

「そういう問題ですか？」

「そういう問題。」

コウイチ先生の笑顔の即答に私は小さくため息ついて

「はい、楽しんで来て下さいね。」

コウイチ先生に指示されたナートのセットを手渡した。

「ナジオさんって面白いよね。絶対いつか一緒に合コン行こうね。」

コウイチ先生のたわごとを背中であきながら準備室から出る。

コウイチ先生・・・私と行ったら、合コンじゃなくて  
単なる飲み会になっちゃうと思うんですけどね・・・

今日は遅番ではなかったのだが、新患（初めて来院した患者さん）の患者さんが多かったので、バタバタと忙しくなかなか帰る事が出来ずにいたが  
ようやく、帰るめどが立ったのであわただしく片付けて帰る準備を始める。

さつきから見かけないな〜と思っていたら、アラタ先生はハルミさんに指示をされて、

休憩室で自分の担当の患者さんのカルテの整理させられていた。

休憩室の奥に財布やカーディガンなどの私物を入れおくロッカーがあるので

必然的にアラタ先生の前を通っていかなければならないのだが、ソファアに座っているアラタ先生は膝にカルテを抱えているので立ち上がることが出来なかったようので

膝を出るだけかがめて通りやすくしてくれるのだが、なにぶん足が長いので先生の膝をなかばまたぐようにしてなんとか通り過ぎて荷物を取りに行く。

先輩のケイコさんが私と同じようにロッカーに行くためにアラタ先生をまたいで行く

「もう！先生の長い足が邪魔です！！」

ケイコさんにそう言われてアラタ先生はより一層小さくなっている。

立って通路をあけてくれたら・・・

とも思うのだが、カルテを押さえておかないとカルテが崩れそうなので、それも出来ないでいるらしい。

荷物を取ってケイコさん、私の順番でまた先生をまたいで通る。

座っているのが女性スタッフならスカートの裾をまくって通るのだがさすがにアラタ先生の前でそれは出来ないでそのまま通る事にす

る。  
すると、

私の白衣のスカートがアラタ先生の膝に引っ掛かってバランスを崩し  
「ひゃあー！」と小さく悲鳴を上げながら  
後ろに引っ張られるようにしてアラタ先生の膝の上に座り込んでしま  
った。

そして、  
雪崩れるカルテ・・・

「わあ！！ごめんなさい！」慌てて立ち上がった  
まだ診療中な事を考慮して小声で必死に謝って一緒にカルテを拾い  
集める。

ケイコさんは狭い空間で手出しは出来ないと判断してか  
「先に行ってるからね」と、休憩室から出て行った。

待つてよーケイコさん！！手伝つてよ！薄情者！！

声にならない訴えを心の中で叫びつつ 冷静になるように自分に言  
い聞かせる。

「先生すみません。カルテ崩れてしまいました。」

「いいですよ。もう終わりですから」

先生は優しく笑ってカルテを拾い集める

邪魔した罪滅ぼしを兼ねてカルテを順番どおりにならべて棚に片付  
けてゆくのを手伝う。

アラタ先生と2人そろって休憩室を出て

本日の最終責任者のハルミさんと遅番のサツキ先生に「お先に失礼  
します」と声をかけて  
更衣室へと向かった。

先に更衣室では、先が上がった先輩たちが

先ほど私がスカートをひっかけてアラタ先生の膝に「お座り」して

しまったという話題をケイコさんが話題提供して出来事で盛り上がっていた。

「ナジオの白衣のスカート丈ちょっと長いんじゃない？」

あんだ、たまにエプロンを扉のノブに引っかけてたりするでしょ？ スカートの丈を少し短くして、エプロンをもう少し詰めてぴったりにしたら？」

あまり、体のラインの出るが嫌なのでダブダブのエプロンをしていたら

背中に出来た空間でよくドアノブに引っかけてしまうのである。

「そうします。」と

素直に先輩達の助言を聞いて、家で縫う為に白衣とエプロンを鞆に入れる。

先輩達には逆らいません。．．．いえ、逆らえませんが．．．

着替えを済ませて診療室を出ると

電車で帰るのは私だけなので、診療所の前で別れた。

遅い時間帯だった事もあり、通り過ぎる人陰もまばらな通りを

ヒールのコツコツという音を響かせてゆっくりと駅に向かって歩いて行った。

今までスニーカーばかりを履いていたのだが、

先日ミオの勧めで買ったパンプスを今日初めて履いてきたのである。子供みたいだが、

このコツコツ鳴る音がなんだか「大人の女」って感じで楽しくて上機嫌で駅までの道をゆっくり歩いた。

ヒールのコツコツという音は私にとって新鮮でわざと響くように歩いて楽しんでいた。

すると、私の足音に合わせてついて歩いてくる気配を感じた。私はもともとビビリなので、周りの気配などには常に気を配っている。

この気配は気のせいでも何でもなく、私についてきていると確信を持って言える。

もしかし、痴漢?!

ドキドキしながら少し早歩きになると、後ろの気配も少し早くなる。やっぱりついてくる!!!!

確定だ!!--どうしよう!と、少しパニックになっていると突然「ナジオさん!」と後ろから肩を掴まれた。喉の奥で小さく悲鳴を上げて体を硬くする

・・・え?私の下の名前?

「ナジオさん!」ともう一度名前を呼ばれた。

あれ?知り合い?

振り向くとアラタ先生とコウイチ先生がニヤニヤ笑いながら立っていた。

「もう!!--びっくりするじゃないですか!!--」

「僕はやめようって言ったんですけど、鬼追先生が・・・」

「だって、楽しそうだったから」

コウイチ先生の悪戯心を止められなかったと申し訳なさそうに謝るアラタ先生と

してやったり!!とした表情のコウイチ先生

余りにも心臓に悪いおふざけに怒り心頭の私だったが

コウイチ先生のする事なら仕方がない・・・と直ぐに諦めた表情になった

「コウイチ先生、今日は合コンだったんじゃないんですか？」

「あれ、メンバーが急にドタキャンしちゃって流れちゃった」

コウイチ先生は少し残念そうな表情をしているが、それほど楽しみにしていなかったのか

今ではケロツとした表情をしている。

そんな私に取っただらどうでもよい話をしながら

三人とも電車通勤なので3人で仲良く(?) 駅のホームに立つと

「ナジオさん、これから一緒に飲みに行かない？」

と、コウイチ先生がそう提案してきたが、

コウイチ先生はお酒が入ると何をされるか判ったものではないので即答で断る。

「お断りします」

「赤松も行くからさ」

「え?!・・・そ、そうなんだ!」

コウイチ先生の発言に一瞬ビックリした顔をしたくせに急に同意するアラタ先生・・・

絶対、そんな予定なかったよね?!

「アラタ先生が居ても嫌です。では、お疲れ様でした。」

そう言つて電車に乗ろうとすると

「ちよつと待つて」と腕を取られる。

「たまにはいいじゃない。」

赤松と3人で飲みに行こうよ」



しばらく、『行く』『行かない』で押し問答になった。

走行しているうちに、入ってきた電車は無情にも扉を閉めて発車してしまった。

「今日は、帰って白衣とエプロンの修理をしないといけないので、早く帰りたいんです。」

私がそう言うと

「ナースプレイでもするの?!」

と、すぐにそっちのネタに結び付けようとするコウイチ先生

「しません!」

「なんだ〜、つままないの〜。でも、しないんだったらいいじゃん行こうよ〜。」

赤松も一緒に飲みに行きたいよな?」

そう言つて、コウイチ先生は諦める気配を見せないので

私も根負けしてしまつて仕方がなく了解する。

それならば、と

私は鞆から携帯を出してミオに素早くメールを打つ。

「判りました、でしたらコウイチ先生、私の友達を呼んでもいいですか?」

もちろん女性ですから」

そう言つと、コウイチ先生は嬉しそうに了承する。

同じ職場で働く人間とは言え、

コウイチ先生とアラタ先生とさしで飲みに行くほど私の心臓は強くはない。

そんな時には、うちの魔王を投入するまでだ!

「友達つて美人?」

「美人ですよ」

メールを送つてすぐに手の中の携帯が鳴つた。

以前から、コウイチ先生の話しをミオにしてきた。

そのたびに「実物に会つてみたい」と言っていたので直ぐに乗ってくるであろうとは想像したが

数分後にミオから返信が私の携帯に届いたのは「了解」の二文字

食いついた!!

心の中でガッツポーズを取ったぐらいの勢いでうれしかった。

ミオの方も

暇だったのか即答で返事が返ってきた事にも二度びっくりである。

「場所どうしますか？」

携帯の液晶画面を見ながらそう言うと、

コウイチ先生は自分の行きつけのお店があるのかすぐに店の名前と場所を口にした

その店の名前と場所をメールで送る。

すぐに『了解』と返信が来た

場所が決まったので3人で電車に乗って先に店に向かう事にする。

今まで何度かコウイチ先生に飲みに行こうと誘われては居たのだが、

『二人で飲みに行くのは嫌です』と、断り続けていたので

今回はアラタ先生も一緒だと先手を打ってきたようである。

・・・絶対、思いつきで口にしただけだと思う・・・。

今日もアラタ先生とインパルスで落ち合う予定だったので、別に問題はないのだが、

コウイチ先生と一緒に事が私のテンションを下げさせる。

アラタ先生が入る前の、忘年会の時に酔っ払ったコウイチ先生に絡まれて困った事があった。

あの時は本当に、殴らなかつた事を逆に誉めて貰いたいぐらいのセクハラっぷりで

それ以来、コウイチ先生には関わらないようにしているが

私の『反応が面白い』としょっちゅう、ちょっかいを出してくるの

で困っている。

コウイチ先生は結構強引な性格なので、何かあったら、アラタ先生に押し付けてミオを連れて帰ろうと心密かに計画しながら、電車を降りた。

コウイチ先生の指定した店は

薄暗い照明で大人な雰囲気、の漂う落ち着いた店だった。

今日は、シャツに黒のスキニージーンズにパンプスをはいていたので、場違いな雰囲気ではなくて人安心。

店に到着してから、また店の場所と名前と自分達が座った席の正しいの位置を

ミオにメールで伝えておく。

取り敢えず、ミオが来るまで飲んで待つておこう

と、いう事になって、

アラタ先生と私はビールをコウイチ先生はウイスキーを注文した。運ばれてきた飲み物がそれぞれの手に渡ると

コウイチ先生が「お疲れ様、乾杯」とグラスを持ち上げる

私はグラスを合わせる事なく自分の手元で少し持ち上げて「乾杯」と言つて口に運んだ

アラタ先生とコウイチ先生はグラスを軽く合わせてから飲んでいる。

「ナジオさんってそんなに俺の事嫌い？」

不機嫌そうにしている私の表情を見てコウイチ先生聞いてきた

「嫌いではありませんが、日々の発言が苦手です」

ぶっきらぼうにそう言うコウイチ先生は笑いながら

「ナジオさんの反応が楽しいからついからかっちゃうんだよ」

「お

などと言っている。

言われている方はたまったものじゃない。

もう少し大人になって軽く受け流せるようにしければとは思っているのだが

まだまだ子供の部分が出てしまうようである。

「赤松とナジオさんは仲良いの？」

「普通です。」

私が即答すると

黙って成り行きを見届けていたアラタ先生がいきなり

「通り過ぎざまに、僕の膝に座って行くぐらいの仲です」

と、真顔でそう言ったので、思わず飲んでいたお酒を吹き出しそうになった。

「あれは！スカート裾が先生の膝に引っ掛かって、バランスを崩してしまつてですね！！」

強く否定をしようとしたら

「なにそれ?!どこで？」

と、コウイチ先生が食いついてくる

「休憩室のソファで、です。」

積んであつたカルテを崩す勢いで

アラタ先生がそう続ける

事実を誇張のいっさいもなく語っているのだが、何か説明するのに必要な言葉欠けているその話し方は

完全にコウイチ先生のツボを得たらしい。

「どおりで、僕になびかないと思つたら

ナジオさんは赤松の方が良かったんだ。だ・か・ら・か・あ。」

コウイチ先生は自分の中で勝手に何かを理解したらしく一人で頷いている。

「だから、あれは事故ですし、先輩も一緒に居ましたから」

私は誤解を払拭しようと、必死で言い繕うが。

「なんだ。僕一人が知らなくて、皆の公認なんだ。」

と、また勝手に私たちを関係づけているらしい。

アラタ先生の方を向いて睨むと、アラタ先生は嬉しそうに小さく笑った。



「ナジオさんって目が良いよね。」

私の顔をジーンと見ていたコウイチ先生がいきなりそう言った。

「え？ 私 コンタクトですよ？ コンタクトも眼鏡も無かったら全然見えませ。」

私はお酒を口に運ぼうとしていた手をとめて 首をかしげながらそう言つと

「……」

「……さすが、ナジオさん」

と、二人とも微妙な反応。

あれ？ 私なんか間違えた？

「背も高くてスタイルもいいし」

コウイチ先生が気を取り直したかのようにさういう

「私背が高いですか？ 祖母より小さいですし、一族の中ではちびつこですよ？」

それに、スタイルなんて全然良くないですよ！ こんな薄くてひんそな体型」

「……」

「……そう来たか」

ん？ またさっきと同じ反応……なんで？

そしたら、急に

「これって、わざとだと思つか？」

「素だと思えますよ」

ボソボソと二人でなにやら話しているが微妙に聞こえています……

・・・なに？ 私、もしかして馬鹿にされてる？

突っ込むべきか放置すべきかと悩みながら  
そんなやり取りをもやもやした気持ちで観察していると、  
仕事帰りのくせにはっちりメイクしたミオが到着した。

絶対、どこかでメイク直ししてる！！  
どっだけ気合いいれてんのこの人？！

そんな心の突っ込みをよそに

「こんばんは、ナジオの友達の東條澗と申します。」  
私たちの前に立ったミオは完璧な営業スマイルを先生方に披露した

・・・服装まで気合はいつてます。はい。  
あなた、いつもそんな気合いの入った格好で会社に言ってる  
んですか？！

それに、私が思うに、コウイチ先生に狙われると思いますよ？  
いいんですか？ミオさん？

「ナジオにはいつもお噂は窺っておりますよ。  
こちらが、コウイチ先生でこちらがアラタ先生かしら？」  
計算された微笑みを浮かべたミオは  
コウイチ先生のお前に座りながら言葉を続けると。  
想像以上の人物が登場した事で  
上機嫌になったコウイチ先生は  
嬉しそうな表情を浮かべて自己紹介をした。  
アラタ先生もコウイチ先生の後に名前を言っただけで紹介をすませ  
た。

ミオは席に着く前に入り口で飲み物を注文して来たらしく

直ぐに飲み物が運ばれて来た。

「どんだけ段取りいいのよ?!」

取り敢えず、と云う事で4人で乾杯をして

お酒を一口飲んだらすぐに

開始された会話にそつなく返事をし、

そこから話しの輪を広げていくあたり合コン慣れしているという三才とコウイチ先生の発言は、

伊達ではなかったらしい。

しばらく4人で雑談して

タイミングを見計らってトイレに立って戻ってくると

私が座っていた席 すなわちミオの隣の席にコウイチ先生が移動していた。

「ちゃっかり、グラスと器まで移動させてある・・・。」

「これは、飲み会ではなく やっぱりノリは合コンなのか?」

頭のなかであれこれ考えながらコウイチ先生が座っていた席に座る。

黙々と料理を食べていたアラタ先生は

コウイチ先生の予想外の食いつきに

苦笑いを浮かべて「おかえりなさい」と迎え入れてくれた。

「コウイチ先生、完全に合コンのノリですね・・・。」

アラタ先生に小さくそう言うと

「あ、赤松とナジオさんのラブラブカップルは

俺達の事は置いといて熱く語り合ってた。」

と、コウイチ先生のとんでもない発言が飛んできた。

「コウイチ先生何回も言うようですが誤解です。」

決して私とアラタ先生はそんな間柄ではありません!」

「あら?ナジオ、赤松先生とそんなに仲良しなの?初耳。」



赤松先生、気難しい子ですけどナジオの事宜しくお願いします。」

「判りました」

「判らんでいいです！」

三人がノリ良く盛り上がっている中、一人でムキになって訂正している

ミオにシッシと、犬にでもするかのように追い払うジェスチャーをされた。

仕方がないので、最近見た映画や読んだ本の話などをアラタ先生としながら時間を過ごす

ミオとコウイチ先生も話が盛り上がっているらしく、時々ミオの笑い声が聞こえてくる。

「最近DVD化された話題の映画に出てくるへりあるじゃないですか、あれってやっぱり松島からきてるんですかね？」

ボソツと話を振ると

「ロケ現場の場所から考えるとそうだろうね。」

多くを語らなくても、意図をさっしてくれたらしくアラタ先生が返事を返してくれる

「私、あのホバーリングの音を聞いた時に

実際に近くで聞いている音のようで少しテンションあがったんですよ。」

映画館に見に来て良かった〜って思える臨場感があって」

「そうなの？俺DVDで見ただけ結構リアルな音がしてよかったんだけど、やっぱり映画館の方が良かったんだ〜」

「私、あの音の為に映画館に行っただけですよ」

「音フェチ？」

「うん、結構好き」

「そっか〜。俺も次回作があれば映画館で見るようにするよできれば、実際に飛んでいる音が聞きたいけどね。」

などと二人の共通の趣味である乗り物についてささやか盛り上がっている

「二人とも盛り上がってるねえ」

コウイチ先生が私たちを見ながらそう言う  
と今度は何？と、一瞬身構える。

「ちようどいいし、ここで二手に別れない？」

と、提案してきた。

ミオと二人つきりで話したいから、ここで解散しようと言っているのか？

と、一瞬ミオの身を案じてミオの方を見ると

『大丈夫』音を出さずに口の動きだけで私に伝えてきた。

どうやら、コウイチ先生と二人になっても大丈夫だと判断したらしい。

ミオが大丈夫だと云うのなら勝算があるのだろうと思うのだが

一瞬友達を置き去りにして帰る事に躊躇した

それでも、私の中で早くコウイチ先生から離れたかった思いが勝った。

ごめん、ミオ・・・私はあなたの判断に任せます。

「判りました。」

では、私はここで解散と云う事で帰ります。」

そう言つて、自分の分の支払いを出そうとすると

「いいよ、ここは僕と赤松で出すから」

と、コウイチ先生の気前のいい言葉が飛んできた

「いえ、出させて下さい」

そう言つて財布を出すと

「今日は無理やり誘ったんだから、僕と赤松がここを出すって事で驚かせたお詫びも兼ねて。」

確かに、驚かされた事への謝罪の意味が籠っているのならば

素直に好意に甘えるべきなのかどうかと迷う。

コウイチ先生一人に出させるのならば

断固として支払いを主張するのだがアラタ先生も出してくれるのなら、

後でアラタ先生に返して自分の気持ちの上でスッキリしたらいいだろうと思いなおして、

素直に好意に甘える事にした。

「判りました、先生達に御馳走になります。

では、私はここで失礼します。

ミオ、先に帰ってるから 何も無いと思うけど、何かあったら連絡してね」

最後の言葉は半分コウイチ先生へ釘をさしたつもりなのだがあまり伝わっていない様子はなかった。

コウイチ先生とミオは笑って私に手を振っている。

「じゃあ、僕もナジオさんを駅まで送るついでに帰ります。」と、アラタ先生も立ち上がった。

財布からさつとお札を何枚か出してコウイチ先生に渡している。

これも打ち合わせのうちなのだろうか？

そんな事を思いつつ、お先に失礼しますと、声をかけて二人揃って店を出た。

「ミオ大丈夫でしょうか？」

「東條さんなら大丈夫ですよ。」

「だったら良いのですが」

そっぴいなながら、ふたりで駅に向かって歩いて行く。

目の前に広がるビルとビルの間隙から空には星が一つ二つ見える

私の家からでも星は一等星ぐらいしか見えないが

ここは町のネオンが明る過ぎて星がよけいに見えない。

「今日はお月さましか見えないですね。

夜空が綺麗にみえるところに行ってみたいと子供の頃から思ったんですけど、

なかなか行けなくて。」

帰省する田舎もない都会育ちの私にはどこに行けば綺麗な星が見えるのか

星を見るのに必要な物などの一切の知識がない。

本当に見たければ、子供の時と違いバイクもお金もあるのだからとつとと調べて行動に移しているはずなのだが、

どんなに綺麗でも、一人で夜空を見上げる寂しさを感じるのが嫌なのだと

無意識に足を遠のかせているのだろうと思う。

ネオンでライトアップされた明るい夜空を見上げながら歩いていると

「プラネタリウムはどうですか？」

いきなりの提案に言われた言葉の意味が分からず

「プラネタリウム？」

と、オーム返しに聞き直す

アラタ先生は立ち止まって私の方を向いて微笑む

「プラネタリウムです。」

夜に星を見る事ばかりを考えていたので、プラネタリウムの存在を忘れていた。

星の初心者の私にでも、解説付きの天体観測が出来る場所。

なんて魅力的な誘いなんだろうと立ち止まってアラタ先生を見る。

「プラネタリウムの存在を忘れていました。」

先生も天体観測とかお好きですか？」

「興味はありますけど、一緒に行ってくれる人が居たら

星が好きになるかもしれません。」

どういう意味なんだろう？

もしかして、私、今、誘われてる？！

いや、自意識過剰になっているのかもしれない・・・

「そうですね。」

では、お友達を誘って行って見られてはいかがですか？

私も友達と行きますから」

本当はアラタ先生と一緒に行けたらと思っっているのに口では釣れない事を言ってしまう。

どうしても、自分に素直になれずにヒネタ事ばかり言ってしまう。

「つれないな。一緒に行きましょうよ、次のお休みの日に」

「私と一緒にですか？」

「はい、俺と一緒に嫌ですか？」

やっぱり誘われてたんだ……。

そう思うと急に照れて顔が赤くなってしまっ

アラタ先生に顔が赤くなつたのを見られたくなかつたので、人に道を譲る振りをして少し早歩きで先生の前を歩く

「嫌じゃないです……」

背中越しにそう言っ

「じゃあ！次に同じお休みの時に！！」

アラタ先生はおそらく満面の笑みを浮かべているのであろう声で返事が返ってきた

「ねえ、先生 飲み直しませんか？」

「いいですね。これから、インパルスに行きましょうか？」

「はい」

そして、二人揃って駅に向かって歩いて行った。

プラネタリウムに行く前に、図書館で星座の本を借りてきて勉強でもしようかな。

ある日の休憩時間　くアラタ目線く（前書き）

・・・R？

## ある日の休憩時間　くアラタ目線く

仕事がある日の昼飯は毎回私服に着替えて外に食べに行く。院長は自宅が近くにあるのでそちらに毎回食べに帰っている。

そのせいか、

他のスタッフもそれぞれ家が近くにあるので食べに帰る事が多い。皆が言うには、

温かいご飯が食べたいらしく、外に食べに行くのなら

家で食べたほうが落ち着くらしい・・・

俺は一度家に帰ってしまうとダラダラして家から出るのが億劫になってしまうから

そのまま診療所で食べた方が楽だと思うのは気のせいなのだろうか・・・

まあ、人それぞれなので口出しはしないが。

俺は昼食を先輩の鬼追さんと一緒に食べる事が多い

でも今日は、食べたいものが鬼追さんと会わなかったので、途中で別れて別々の店に行く事にした。

食事を終えて帰ってくると

先に帰ってきていたらしい鬼追さんが

休憩室の端でナジオさんと

雑誌を見ながら何やら真剣な顔をして話し合っている。

ナジオさんは自炊をしているらしく

家からお手製の弁当を持参していつも休憩室で食べている。

いつもなら誰か一人はスーパースーパーやコンビニなどで買って来た物を一緒に食べているのだが

今日は皆外に食べに行ったらしく、部屋には鬼追さんとナジオさんしかない。

ふと、

二人が真剣に何の話をしているのかと興味をわいて  
会話が聞こえる程度の陰からこっそり近づいてみる。

「やっぱり、王道に行くべきだと思っただけだ」

「それは、先生の趣味の問題でしょ？」

「いやあ、男のロマンだよ！」

「だって、そのロマンって、見せる事限定でしょ？」

自己満足のレベルを日常生活に必要なじゃないですか？」

「そんな事ないよ！ いつ必要になるか判らないじゃない！それに  
備えないと！！」

「判らない『いつ』があるんですか？！備えるって！！日常の話で  
すよ！日常の！！」

「緊急を要する時だってあるんだって！」

何の話をしているのか良く判らないが、

「あの」鬼追さんの事だから

なんとなく嫌な予感がする……。

「やっぱり、白のレースだよ！」

「ええ〜 白ですか？」

生地がテカテカしてるし安物だったら、レースの部分チクチクしそ  
うです」

「じゃあ、ちよつと高級なのを選んだらいいじゃない

そしたら、レースの部分もチクチクしないで落ち着いた感じの生地  
あるでしょ？」

「……なんで、そんなに詳しいんですか？」

「……まあ、でも日常でしょ？」

普段使いに高級なのは無いんじゃないですか？」

「でも、お洒落なやつをつけてると。」

なんとなく雰囲気が悪くなるって云うじゃない」



「それはそのデザインを意識してるからでしょ？」

「だから、日常的にいいのをつけてると それに合わせた雰囲気を作れるって事だよ！」

「キュートなやつを日常で使ってたらキュートな雰囲気になるって事？」

「そういつと」

なんだろう・・・

決定的なワードが出てないのに

何の話をしているのか、

うつすら判ってしまった気がする・・・。

「で！ナジオさんはどれ？」

「ええ、私はやっぱりボクサーですね。」

「ええ！ここまで説明したのにまだボクサー?!考え改めようよ！」

「なんで、私が先生に合わせないといけないんですか?!」

「僕は、やっぱりナジオさんにはスタンダードタイプでレースがたつぷりな白をお勧めするよ」

「私、スタンダードタイプは嫌いです。」

いつも履いてるジーンズは全部ローライズなので基本シンプルデザインのローライズです。

それにレースがついてたら洗濯の時に気を使うし！

ボクサータイプだったらお腹周り幅広ゴムだから、かがんだ時に腰からチラ見えしても気にならないし

そう考えると、ボクサーのローライズタイプがベストですね」

「え、でもラインが出た時に効果的なのはやっぱりこれだよ！」

「だから、そのラインを出したくないんですって！」

ストッキング履いてその上、スリッパまで着てるのにライン出るってどうよ?!」

「何言ってるの！ 服の上からうつすら見えるあのラインがそそる

んじゃない!!

白衣だったらなお良し!!」

「・・・あんだ、仕事中に何考えてるの?!」

「ん? いろいろ?」

あ・・・やつぱり・・・

あの雑誌、通販カタログだ・・・

しかも女性の下着のページ・・・

鬼追さんのペースに巻き込まれて

ナジオさんの下着事情をしゃべらされてるし・・・。

「でもさ。ボクサーってさ、男の物って感じしない?」

「そんな事ないですよ。最近種類も多く出てますし」

「ボクサーの時のブラどうなるの? セットであるんでしょ?」

「もちろんありますよ。デザインはスポーティーな感じになるますね。」

「なんか、色気無い気がする・・・」

「そんな事無いんじゃないですか? レースが無くても色っぽいやつてありますよ?」

そう云いながらページをペラペラめくるナジオさんに

微妙に距離を縮めて 一緒に雑誌を見ようとする鬼追さん

気付いて下さい!!

ピンチですよ! ナジオさん!!

男性が、

通販カタログとはいえ

女性物の下着のページと一緒に見るは

なんとも思わないんですか?!

「ええ、これ、なんだかな。」

「いいじゃないですか、ボクサー 私8割はボクサーですよ？」

「ローライズボクサー？」

「はい」

「ローライズってどれくらいの浅さなの？」

これ以上は駄目だろう！！

思いつきり、黒い笑顔した鬼追さんからナジオさんを救出すべく

「鬼追さん、教えて欲しい事があるんですけどー！！」

教えて欲しい事など何もないのだけでも、なんとなく言ってみた！

いや、ある意味

なぜそんな状況になったのかを教えて欲しい！！

「ああ、赤松。いいところに来た。」

「はい？」

声をかけたら嫌な顔をされると思っていたのに逆に歓迎された。

「ああ、アラタ先生おかえりなさい。

今ね、コウイチ先生と女性の下着の色とデザインの話をしてるんですけどね？

コウイチ先生が、男のロマンは白のレースだって主張するんです！」

「はあ」

だから、ナジオさん

鬼追さんに毒されてますよ……。

俺にまで女性下着の話を

ふってどうするんですか……。

「赤松はなに派？ やっぱり、白のレースだよな！」

「確かに、スポーティーな感じのボクサーはロマンに合わないかもしれないませんが」

最近では、男女お揃いのボクサーパンツとかあるじゃないですか！」

「……はあ」

まず、「なに派」ってなんですか？

「例え彼氏彼女の関係でも下着がお揃いってなんか微妙じゃない？」

「私もペアールックはちょっとどうかと思いますけど……」

でも、人それぞれですよ！ アラタ先生はどう思います？」

「……そうですね……」

俺も彼女とお揃いの下着はごめんです。

それよりも、

どちらかというと、

答えようがない質問はして欲しくくないです……。

「でも、脱がせる時にボクサーって色気無さ過ぎだろ？」

「なんで、脱がせる事前提なんですか！！ 日常でしょ？ 勝負じ

やなくて！」

「……ええ〜っと」

鬼追さん直球すぎるでしょ！！

俺もそう思いましたけど……。

「常に、何かがあるか判らないじゃないか！

今日だって、もしかしたらこの後

奇跡の急展開で お持ち帰りされるかも知れないじゃないか！」

「ありえない事を前提に話をしないで下さい。ねえ、アラタ先生」

「……そうですね……」

ないでしょうね、  
そんな奇跡のような美味しい展開・・・。

「そんな事判らないよな？赤松？」

「無いでしょ！アラタ先生」

「・・・え？・・・ええ・・・」

止めに入ったつもりが、

窮地に立たされた感が満載なのは

気のせいでしょうか・・・

「聞いているのか？赤松！」

「どう思いますか？アラタ先生！」

誰か助けてー！！

つつつか、

職場でなんて話してるのこの人たち！！

ナジオとアラタは

手洗い場で顔を合わせた時

譲り合いながら手を洗っていた。

「やっぱり、あのフォルムであのカラーが最高にあうと思うんですよね」

「そうですね？」

確かに、面白みのない色かもしれませんが、

だからこそ、あの色がよりよく感じるんじゃないですか？」

手袋を外してブラシを使いながら念入りに手を洗う二人

会話が唐突に始まったのに

お互いに何についての話をしているのかちゃんと判っている様子。

「でも、部隊のカラーを象徴するって点ではどうでしょう？」

「・・・確かに、すべてが一緒では区別の使用が無いかもしれないんが・・・うう〜次回に持ち越し」

そついいながら、手を拭いて

また違う方向に向かって歩き出す。

しばらくして、

歯列模型を見ながら 治療方針をかんがえていたアラタの所に  
材料の補充に訪れたナジオ

「あの音、超イイですよね？」

「さすが音フェチ。歴代の最高は？」

「歴代？ 私の中で最高はKAWASAKIですね！」

「え?! バイクですか? 僕はやっぱり、T-4ですよ!」

「私、じかで聞いた事ないですもん・・・」

「爆音最高です」

「私はカーゴ派ですから」  
お互いがお互いの方向を見ず、作業の手を休めることなく交わされた会話は  
唐突に始まった会話はまた唐突に終わって  
二人は離れて行く。

業務終了後、

診療所から駅に向かって歩いていくナジオとアラタ

「あの角度だと、入りにくいから

沿わせて入れて行くといいんですよ。」

「でも、隣接面とか・・・」

「だから角度なんですよ！」

「あゝあ、そうか。」

「じゃあ、視野確保の手の角度を変えたらいけるって事？」

「そうですね、だからアシストについてる人に角度を変えて貰えば

OKなんですよ！」

「なるほどね。これが一人でできたら完璧ですね！」

スッキリした顔のアラタと嬉しそうに笑うナジオ

・・・基本この二人の会話は診療所では趣味の話を通り過ぎざまに  
ポツポツ

外に出たら、治療内容などのアドバイスをナジオからアラタへして  
いる・・・。

普通逆じゃない？！

仕事の合間の会話 仕事帰りの会話 〱ナジオ&アラタ〱（後書き）

この二人、職場では仕事の話をお互いにあまりしません。

職場では通り過ぎざまに、お互いの共通の話題の「乗り物」の話が多いみたいです（笑）

仕事が終われば

ナジオがアラタにこれまでの経験上のポイントなどを伝えているみたいです。

（ナジオは他の先生達の治療方法をつぶさに見てきてますから）

ほんと、普通逆ですよね？



## ミーティング・1

週一回、全員がそろそろ曜日の昼一番はミーティングと決まっている。一週間の患者さんの人数の報告から始まってサツキ先生の一言、

『この間のように、日本語があまり話せない患者さんがこれからも来院するかもしれないので

個々で、少しでも語学の勉強をして頂けるとありがたい』と、云う事で

さっそくサツキ先生が本屋さんで購入してきた英語・韓国語・中国語の語学用教材をスタッフルームに置いておくので、目を通しておくようにとの事。

最近では、医療通訳なるものがボランティア等で登場しているようだが

小さな町の歯科医院に訪れる事は少ないだろうとサツキ先生は無言でアラタ先生に英語編を

私に韓国語編と中国語編を手渡した

なぜに2冊？！

3カ国語のうち2カ国語も自分が担当せねばならないのか？

と云った表情をにじませて中国語の語学用教材を片手に顔をあげると他のスタッフは私に逆指名されないように眼を合わせないように天井や床などに目をやっている

無言の強制指名かい！

韓国語はともかく、今から中国語の勉強をしなければいけないのかとややうんざりしたが、

スタッフの総意なのであれば反論してもしようがないと諦めて受け

取った。

まあ、今後直ぐに活用する事もないだろうから、気長に行こう……。

つてか、独学？！

学費 診療所持ちの駅前留学とか無し？

……無しだよね……。

『国際的な歯科医院にしましょう』と、にこやかなサツキ先生の締め言葉の後

スタッフ同士の申し送りや、意見・感想などをそれぞれに発言していく。

月ごとに院内で『家元』と呼ばれるあだ名の

待合室などに生花を活ける担当があるのだが、

これをローテーションせずに固定するなどの案があがり

ケイコさんが指名されてミーティングは終了した。

私は自分には生け花のセンスがないと自覚していたので

ローテーションから固定になって良かったと心から安堵した。

一度、私の家元当番の時に

「枯れた花を咲かせている」と受付担当の先輩、からきつい叱責を受けた事が

生け花の苦手意識の始まりだと確信している。

この間、シズカちゃんに言った「出来ないじゃなくてやってみたい」の精神はこの時ばかりはお休みしていたらしい。

「国際班 任命おめでとう」

家元に就任したケイコさんが溜息交じりで私にそう声をかけた

「ご就任おめでとうございます。家元」

お互いに損な役回りを押しつけられたと云う顔をしながら就業の時

間を待った。

その日の午後、ユキが頻繁に失敗をする事に怒ったハルミさんにユキともども呼び出された。

「ナジオ！あんたは、この子にどんな指導をしてるの？」

下の子の教育はあんたの仕事でしょ？

ちゃんと、責任を持って行動を見届けて確認しないと駄目じゃない！

この子の失敗はあんたの失敗でもあるの！二人揃って反省しないさい！」

専門学校の時から存在を全否定されるぐらいの説教をされ続けている事と

さつき歯科に入った時からハルミさんとリサさんには散々雷を落とされているので

怒られる事には慣れっこになっているのだが、

ユキは、未だに慣れられないらしく、キュツと握った手が震えていた。

その後も、ハルミさんにしばらくネチネチと嫌味や皮肉を言い続けた。

そうやってしばらくして、気が済んだのか

「判ったわね?!」

と、捨て台詞のように言っただけで自分の仕事に戻って行った。

「言ってる事は正しいんだけど、もう少し言い方を考えてくれたら・

・

って、いつも思うんだけど、そう思わない？」

ユキの方に向けてそう言うと

眉間に深い皺を寄せて暗い表情をしている。

「すいません、私のせいでナジオさんまで怒られてしまって」

申し訳なさそうに小さく私に謝るユキに

私は笑って「慣れてるから」と、ヒラヒラと軽く手をふる。

「ハルミさんの言ってる事は正しいのよ。」

だから、気を付けて。

ハルミさんは患者さんの目線で言っているの。

患者さんの身の安全を守る事と、自分の身を守る事を優先してね。

「

はい」

小さい体をより一層小さくさせて返事をしているユキを笑顔で励まして

診療室へと戻って行った。

仕事帰りの駅のホームで携帯のメールを確認し鞆に直してから

その鞆に入れられた語学用教材を溜息交じりに取りだしてパラパラとめくった。

緊急の会話が記載されてるからって 旅行編ってどうよ!!

せめて、日常会話編でしょ?!!

そんな事をブツブツつぶやいているといつやってきたのかアラタ先生が私の横に立っている。

私の手元の資料を覗き込みながら「大変ですね二カ国語」と苦笑い。

「私、韓国語は少し話せますけど、読むのは苦手なんですよね・・・

。 いろんな意味で1からちゃんと勉強し直さないのかな・・・」

私はそう言いながら資料を無意味にパラパラめくる。

自分で思っている以上に苛立っているらしい

「慌てずゆつくり学んでいけばいいじゃないですか。それに、長い目でみれば自分の為になる事ですし」

そう言ったアラタ先生の顔をマジマジと見て

「やっぱり、先生のそういう前向きな考え方って私好きですよ」  
そう言ってほほ笑んだ。

「じゃあ、俺たち付き合っちゃいませんか？」

線路の方向を真っ直ぐに見たままアラタ先生が言う。

そして、ニツコリとした笑顔を浮かべた顔をゆつくりこちらを向いた。

「なんで？」

「気が合っから」

「『趣味』じゃなくて？」

「それもあります。」

コウイチ先生の教育のおかげ(？)で

この手の話に反射的に否定的な返事をしてしまう癖が出来てしまったので

よく考えずに返答をしたが

ちよつと待て！

付き合っつてあれだよな！ 手が足りないから手伝っての付き合っつて

じゃなくて、『交際』する方のお付き合いだよな?!!!

「それ、本気で言ってます?」

「かなり本気ですよ」

これって告白だよな?

それも本気って・・・

いきなりの事だったので気の抜けた顔でアラタ先生の方を見ると、

「俺の趣味を理解してくれるのが一番の大きな理由ですが、

一緒に働いていて一番落ち着くのがナジオさんなんです。

だから、本気で言ってます。俺と付き合ってくれませんか?」

アラタ先生は照れたように笑いながらもまっすぐと私の目を見てそう言った。

頭の中がごちゃごちゃしていて

どう答えていいものかわからず ええ〜と あのお〜と

ごにょごにょと口ごもっていると

「今すぐに返事して頂かなくてもいいので  
と優しくほほ笑んでくれた。

「あのお・・・私、アラタ先生の事たぶん好きです。

でも、今はまだ『たぶん』がつきます。

そんな状態ですが・・・あのお・・・」

そこまで言つと、もう耳まで真っ赤になってしまつて言葉が出てこず俯いてしまった。

「あ・・・なんで、こんなところでこんなタイミングなんですか

「？」

私は、自分が落ち着く為に 若干話をそらして質問すると。

「職場以外でいつでも言う事ができたのですが、なんとなくタイミング的に今なくなってると思って」

え?! 絶対今のタイミングがベストだと思えないんですけど?!!!!

確かに、アラタ先生が好き

でもこれは恋とかそういう物じゃないような・・・そんな気がチラツとする・・・。

返事をハッキリとする事が出来ない・・・。

「先生・・・お返事保留にさせて貰ってもいいですか?」  
おずおずとそういう私にアラタ先生は優しくほほ笑んで頷く

友達だと云えば友達のような関係なのだけれど  
そこから進歩して恋人になりませんか? って事だよね・・・。  
しばらく考えさせて貰おう。

ってか、ミオに相談しよう!

それが一番だ!!

私はそう思って鞆から携帯を取り出してミオにメールを打った。

「ミオへ

相談したい事があるので家に来て下さい。

ナジオ」





## ミーティング・2

手に握りしめていたままの携帯がメールを着信した事を告げる。

「部屋で待ってる」

ミオからの短い文章のメールである。

私は携帯から顔を上げると思い切ってアラタ先生に提案してみる。

「先生、今から私の部屋に来ませんか？」と。

「今から、ナジオさんの部屋にですか?!」

いきなりの私の提案にビックリした様子で、どう返事したらよいのやら……

といった雰囲気醸し出されている。

「私の部屋でミオが待っていますから、

三人でお食事でも一緒にしませんか？」

私が重ねてそう言うと

「東條さんが一緒なんですか……判りました。御一緒させて下さい。」

と、言う事でホームに入ってきた電車にアラタ先生と二人で乗り込んだ。

電車内からミオに

今からアラタ先生と一緒に私の部屋に行く旨と

3人分の食事を用意するのでスーパーで食材を購入して帰る旨をメールする。

するとすぐに「了解」との返信が帰って来た。

最寄駅の近くにあるスーパーでアラタ先生と二人で買い出しをしている間も

私の頭のなかには、アラタ先生への返答をどうするべきか・・・そればかりを考えていた・・・。

「先生、重くないですか？ 私、半分持ちますよ？」

スーパーを出る時に「持つよ」と言ってお買い出しの荷物を全部持ってくれたアラタ先生。

人に荷物を持たせる事に慣れていない私は

先ほどから何度もアラタ先生にそう言ってしまう。

その度に先生は

「大丈夫ですよ。気にしないで下さい」

と言って、重そうに見えるレジ袋を軽々と持って歩いている。

自分の鞆以外何も持っていない状態の私は

久しぶりの女の子扱いにドキドキしながら自分の部屋へと向かって

アラタ先生と並んで歩いて行った。

私たちの歩き方は対照的で

先ほどの「付き合おう」発言から

どうしてもアラタ先生を意識してしまって うつむきがちに歩いている私

女性の部屋にあがるのにテンションが上がっているのか

微妙に上機嫌なアラタ先生は足取りも軽そうな歩み

同じ状況なのに対照的な反応を示した二人であった。

明かりのともった私の部屋にたどり着いて

鍵を開けて中に入ると

先に部屋で待っていたミオは。

「いらつしゃい」

と、まるで自分の部屋かのような態度で

アラタ先生から買ひ物袋を受け取って、

代わりに良く冷えたビールとグラスをアラタ先生に渡して

手テレビのある部屋にアラタ先生を連れていき適当に座って待つように促した。

「アテを作るんで、しばらくテレビを見て待つていて下さい」

アラタ先生は座らずに部屋の大半を占める本棚に歩み寄って棚を眺めた。

大半はSF小説が占めているが歴史小説やミステリーも幅をきかせているようなラインナップである。

そのなかで、気になっていた本があったのか

「ナジオさん、本読ませて貰っていいですか？」と、声をかけてきた

「どうぞ」となぜかミオが返事を返している。

持ち主は私なんですけど・・・まあ、別に構わないからいいけど。

何を手に取っているのかはこちらからは判らなかつたが

アラタ先生は一度読んだ事があるのか、パラパラと流し読みをしているようである。

しばらくして私が料理を手に部屋に入ると

難しい顔をして本を読んでいる。

「先生何を読んでいるんですか？」  
器を並べながらそう聞くと

「これ」

と、アラタ先生は呼んでいた本の表紙をみせてくれた

「一度読んだ事があつたんだけど、結末がどんなだったか思い出せなくて流し読みしてた」

アラタ先生が手にしていたのは、ヘリコプターが出てくる謀略物であつた。

「じゃあ、言つてもいいですか？」

話の内容を先に言われる事を嫌うと思われたのか、そう前置きをされたので

「どうぞ」

と、短く答えが帰ってくる

「結果から言うと、無事に済むんですけど・・・」

私、犯人に同情しちゃって。

あまりにも可哀想で実行させてあげたら良かったのに！！って、  
思っちゃいましたよ。

机の上の計算で安全性を訴えても、

実際にやってみた訳じゃないから信用して貰えないのなら、

実際にやって証明しようとした

犯人の確固たる自信が伝わってきて。

犯罪を犯してでも実証しようとした犯人になんだか思い入れしてしまつて・・・。」

苦笑いしながら私がそう言うと

「なにになに？何の話？」

と、残りの料理を手にミオが部屋に入ってきた。

料理を机に置くとミオはアラタ先生の手に行っている本の表紙を見る

「ああ、落としちゃったらすッキリするのに阻止しちゃった話ね」

「あんたの言い方なんか嫌ね」

「何が？あんた、もしかして阻止出来て良かった〜って思っちゃったタイプ？」

「いや、私も落としちゃったら良かったのに・・・て思ったタイプ！」

「なら、一緒じゃない。つべこべ言わないの！ね？先生」

アラタ先生は曖昧に返事をしながらワタワタと本を本棚に戻した。

あ、たぶんこれは阻止した側の想いが強かったタイプだな・・・

と思いつつあえて触れないでおく事にする。

「本、ありがとうございました。」

結末も感想付きではつきりさせて貰いました」

あ、やっぱり阻止した方に賛同したんだ〜。

確信を持ったが、やっぱり触れないで終わる事にする。

「ビールのお変わりいりますか？」

「はい」

アラタ先生の返事を聞いてから冷蔵庫からビール出してアラタ先生に渡した。

短時間で作った煮物や炒め物が机の上を所狭しと並べられお酒と共に料理を勧める。

壁一面の本棚を見ながらアラタ先生が

「沢山の本をよんでらっしゃるんですね。」

「ナジオは活字中毒じゃなくて、物語中毒なんですよ。」

物語が切れると禁断症状が出てくるんです。」

真面目な顔をしてアテをつまみながらアラタ先生に語るとアラタ先生も真剣な表情で

「だから、ロマンチストなんですね・・・で、禁断症状ってどんな症状が出るんですか？」

「冗談を本気で聞かないでください！禁断症状なんて出ませんから！」

「自分で現実的な空想に走るっていう禁断症状がでるんです。」

「空想ですか・・・」

「妄想に近い空想です。」

「空想と妄想だとだいぶ意味合いが変わってくると思うんですけど・・・」

「現実的にありえない空想と、根拠のない誤った判断に基づいた主観的な信念の妄想

現実に入りえそうなんだけどありえなくて、ちょっと勘違いが入ってるから

現実的な妄想に近い空想です。」

「本人を目の前に置いて、人の感性にケチをつけないの!!」

「凄い表現ですね『現実的な妄想に近い空想』って」

「きっと、ナジオの頭の中は

『現代版の戦国時代で戦場を走り回っている武将』になっていると思いますよ。」

「東條さんの表現って本当に凄いですね。で、現代版の戦場って霞が関とかですか?」

「あの・・・」

「政治家ってのは難しいですね。

そうじゃなくて、ナジオってこう見えて性格はとっても男らしいんです。

しかも、漢字の漢で『漢』<sup>おとこ</sup>感じで。」

「見えないですね。

僕にはナジオさんって『大和撫子』って感じで、とっても女性

らしく見えます。

身近で見ている東條さんがそうおっしゃるならそうなんですよ。うね。

男らしい一面も触れてみたいものですね。」

「触れてみたいなんて、先生って大胆ですね」

彼女さんに聞かれたら誤解を招きそうな発言ですよね。」

「あれ？聞いてません？」

ナジオさんの目の前で付き合ってた彼女に振られたんですよ？」

「なに?!なに!!聞いてませんよ!!そんな面白そうな話し!

ナジオの目の前でって、どういうことですか？」

原因は?もしかしてナジオも関係してるんですか?!」

どうも、この二人は息ぴったりに話の中心の私を置き去りにして会話に盛り上がる事を楽しんでいるようである。

先生を部屋に呼んだ本題にそろそろ入りたいと思っていたのだが、当分この二人は私を置き去りにして話に花を咲かせそうな雰囲気か漂っている

しかも、

話に花を咲かせつつ　しっかり食事もとっているのびっくりである。

私は二人の気が済むまで黙って食事をする事に集中する事に決めた。

ひとしきり語り尽くすと、そのままミオのペースで話が変わって



「で、さつき料理を作りながらナジオに聞いたんですけど  
院長先生から語学の勉強を自主的にして欲しいと語学書を渡さ  
れたそうですね。」

ナジオが韓国語と中国語 先生が英語だそうですね。  
「ってか、人に『して欲しいな』って思うなら自分がしろよな  
！」

完全に蚊帳の外に居た私は  
急に話がこちらの話したい方向に入ったな〜と思いながら  
黙々と料理を食べ続けた。

「これからは国際的に適應できるようになった方が良いつて言うの  
は判ってるんですけど」

いきなり自分に振られるとは思ってなかったので、戸惑っては  
いるのですが

長い目で見て、語学の勉強をして自分にそんな事はないと思っ  
てます。」

アラタ先生はミオの発言に真面目に答える

「でも、先生英語は中高大って勉強されてたから  
そんなに難しい事はないんじゃないですか？」

「僕は英語苦手だったんですよ。  
大学に合格してから疎かにしていたらすっかり忘れてしまいま  
した。」

ああ！これ美味しい！」

「ナジオお勧めの炒め物ですよ。」

先生は料理も趣味もナジオと合いますね。」

「いきなり何言ってるの?! あんた!」  
急に話が自分の方に向いてしまったのでつい、いつもの調子で思わず突っ込んでしまった、

アラタ先生の耳には届いていなかったらしく

「さっき、付き合って下さいって言ったんですけど、

保留にされたんですよ。このお料理も美味しいです。」

と、私の突っ込みはサラッと流されたあげく

私がミオにしたいと思っていたはなしまでついでようにサラッと話してるし!

「なんて、もつたいたい事を!

この子先生のお誘いを保留にしちゃったんですか?!

私が許可しますから付き合っちゃいなさいな

それと、その料理は私が作ったので美味しいのは当たり前です。」

思わずお酒を嘔き出しそうになった私をほったらかして

ミオだけはサラッ人の恋愛事情に許可とやらを出しつつ自画自賛しながらパクパク料理を口に運んでいる。

先生もサラッと「そうなんですか〜あ〜」とか言いながらパクパク食べてるし!

なんだよ!この会話!!

「先生はいつもご飯はどうされてるんですか?」

「朝は、喫茶店でモーニングでお昼も病院の近くのお店で適当に夕ご飯は

コンビ二弁当や友達と外に食べに行ったりです。

最近、晩御飯はインパルスで食べる事が多くなりました。」  
と、ミオのペースであっさり会話の流れが変わってるし……。

しかも、先生もしっかり話の流れをよんで話についてきてい  
る。

会話についていけないのは私だけ？

完全にほったらかし状態……

「あそこは、お酒よりも食べ物の種類が豊富ですからね

前の彼女さんはご飯とか作ってくれなかったんですか？」

「前の彼女は、今まで包丁を握った事がなかったそうで、いつも外  
食ばかりでした」

「お弁当を作って来て公園でお昼とかなかったんですか？」

「老舗のお惣菜屋さんの高級お弁当を買って外で食べた事が1度あ  
るぐらいです」

「それってどうなんでしょうね……」

包丁を握った事がないって、学校の家庭科実習とかどうしていたの  
だろう……

と、素朴な疑問が浮かんだが

回答のない疑問をいつまでも考えていてもしょうがないのでさっさと  
忘れる

「ナジオだったら、公園とかの広場でバトミントンとかした後には手造り弁当を食べたり」

美術館や博物館・図書館とかで さわやかデートとかになると思っていますよ」

「いいですね、さわやかデート」

スカイパークとかで飛行機の離着陸を見ながらお弁当とか食べられたら最高です!!」

「で？ ナジオの返事は？」

今までほったらかしにしていたくせに

急に二人私に注目したのでドキドキして思わず俯いてしまった。

先生の事は嫌いじゃない、どちらかと言うと好き

アラタ先生になら片意地張らずに素直になれるような気がするし一緒にいると暖かい気持ちになれる。

これはやはり恋？

ならば、返事はもちろんYES

俯きながらもじもじと小さな声で

「行きます。お弁当作って先生とさわやかデート」

と答えた私に

満面の笑みを浮かべて喜んでいるアラタ先生と

「私がいなきゃ何も出来ない」って顔したミオの顔を見て

思わず笑い出した私につられて二人とも笑いだした。

「じゃあ、見事カップルが誕生した事ですし

お邪魔虫は退散する事にしますわ〜あ〜」

と、本棚からロードマップを取り出し机にポンと置いてさっさとミ

才は玄関近くに置いた  
自分の鞆を持って本当に帰って行ってしまった。

「・・・東條さんは嵐のような人ですね」  
アラタ先生が苦笑いしながらロードマップを手にとって

「今度、デートスポットなんか掲載されているガイドマップを買い  
に行きましょうか」

「そうですね、でも最初のデートはあそこに行きませんか？」

「ああ、あそこですね」

そんな会話をしながら  
私たちは何事もなかったかのようにひたすらご飯を食べ続け  
た。

## ミーティング・2 (後書き)

ストックが無くなってしまったので

しばらく更新をお休みします。

出来上がり次第 UPするようにします。

衛生士業務の一つとして歯石しせきと呼ばれる歯の周りに石のように凝り固まった物の除去を行うスケーリングと呼ばれる業務がある。

歯石には2種類あり

一つは縁上歯石えんじょうしせきと呼ばれ口をあけてそのまま見える位置にある物

もう一つは縁下歯石えんかしせきと呼ばれる歯肉しにく（一般には歯茎はぐき呼ばれている部分）と歯の隙間に入り込んだ歯石の事である。

縁上歯石に関しては目視で除去の有無が確認でき

しかも、器具を使って手で取り去るハンドスケーラーと呼ばれる手動の除去方法と

エアースケーラーと呼ばれる超音波と水を利用した機械で除去する方法の2種類があるのだが、時短の為に主にエアースケーラーを利用して除去する場合が多い。

縁下歯石の除去では目視は難しく（なんせ歯茎の下に潜り込んで歯の根っこの方に付着している時がある為）

レントゲン写真と事前にプローブと呼ばれる器具を使って歯石の付着している部位を確認しながらスケーラーと呼ばれる器具を使って除去していくのである。

（歯石はレントゲン写真ではX線を通さないので黒く映るので見て判る場合が多い）

スケーラーという器具は本当に小さな刃物で

歯と歯肉のほんの少し隙間に刃の部分を滑り込ませて歯石を除去していくのだが、

下手をすると歯肉を傷つけて出血させてしまうので

最新の注意をしながら的確に手早く除去作業をしていかなばならない。

（実際問題、出血させずに歯石を除去する事は大変に難しく 対外出血させてしまう）

歯の形もだいたい同じなのだが、すべてが同じ訳ではなく 個人差がある事が多々ある。

それを頭の中でイメージしながら刃の向きや角度を考えて行くのはなかなか難しく

上手く除去出来ない と 引っかかりが無くなってしまい 綺麗に除去しきれなくなってしまふ事があるのである。

しかも、がりがりと力を入れてひっかき過ぎると 歯に傷をつけてしまふ

微妙な力加減と指先の感覚が非常に重要となってくるのである。

この縁下歯石を除去する業務をナジオは苦手としていた・・・。

しかし、衛生士と云えば歯磨き指導と歯石除去と言われるほどの大切な業務である。

苦手とかそういう問題ではないのである。

上手に除去できるように 付着している部位を的確に把握して 頭の中に付着部位を叩き込んで除去している。

もし取り残してしまつと それが原因で炎症を起こしたりするのできちんと除去しなければならぬ

それに、スケーラーにもいろいろ種類や角度があり

その中からの確な刃の向きの物を選んで使用して歯石を除去していくのである。

そして、その苦手を克服するために

イメージトレーニングや歯石に見立てた物を使って除去をする練習を顎模型などを使って行つたりもしていた。

それなのに・・・

たまたま、ナジオが手を離せない時にナジオが担当する歯石除去の患者さんが来院されて



ナジオの代わりにハルミさんが歯石除去をしたのである・・・  
そして、とりこぼしがあるのが見つかってしまった・・・  
手が空いたナジオはハルミさんに強制連行されて診療所の一番奥に  
ある準備室に連れ込まれて  
久しぶりの雷を落とされた。

「あんだ！いったい何年衛生士業務してるの？！

あんなレベルのスクーリングも出来ないの？」

と、懇々と説教され ぐうの音も出ないほど凹まされてしまったの  
である。

ようやく開放されたナジオは落ち込んだ気分を必死に隠して  
患者さんの対応に努めたが

仕事が終わってしまおうと どうしても沈んでしまった気分を上げる  
事が出来なくなってしまうた・・・。

自分の力不足のせいで患者さんに迷惑を与えてしまっていると思っ  
たら

部屋に帰って来ても居てもたってもいられず

学生時代に購入させられたスクーラーと顎模型がくもけいを出してきて

何度も何度もイメージトレーニングを繰り返した。

すべての患者さんの歯の形や歯肉の形が模型の様な綺麗な形でやり  
易い訳ではないのだが

いかに上手く患者さんの歯の形や角度をイメージして施術出来るか  
が問題である。

スクーラーと顎模型とにらめっこしながらしばらく時間を過ごして  
いると

机に放り出していた携帯が鳴った。

アラタ先生からだった。

「もしもし」

アラタ先生の名前をみて またハルミさんに叱責された事が頭によ

みがえり

思わず暗い声で電話に出てしまう。

「あ、ナジオさん？ 今から外出れますか？」

アラタ先生はどうやら外出先から電話をしているらしく車の音や風の音が聞こえてくる。

「今からですか？ 別に構いませんけど・・・」

そう返事をする

「じゃあ、俺 今 ナジオさんのアパートの前に居ますから外に出られる格好をして出てきて下さい。」

「・・・判りました」

正直このまま出かけるのではなく部屋で一人じっとしていたかったのだが

せつかく部屋の前までアラタ先生が来てくれていたなら、と急いで着替えて建物の下へと降りて行った。

少し肌寒い風が肌を撫でて通り過ぎる中

アラタ先生がポツン、と建物のそばに立っていた。

「お待たせしました。 先生どうしたんですか？」

私が声をかけると

アラタ先生は私の顔を覗き込むように見て

「ナジオさん大丈夫ですか？」

と聞いてきた

何を・・・とは云わない。 同じ職場なんだから、私が凹んでる理由もしつかり把握済みでの

お呼び出しなのだから正直に答える事にする。

「・・・正直、大丈夫ではないです。 ちょっと凹んでいます。」

正直にそう言っ、無理やり笑うと

アラタ先生は心配から優しくほほ笑んで

「では、気分転換にドライブ行きましょう！」

そう言っ、私の手を取っ、近く止めてあつた車へと連れて行っ

た。

「え？ ドライブですか？ 今から？」

私は戸惑いながらもアラタ先生について歩いて行く。

「はい、今からです。どうぞ乗って下さい」

アラタ先生は車の扉を開けて私を助手席に座らせて扉を閉めると運転席へと乗り込んだ。

「あの・・・いいんですか？」

私は今から出かけると、アラタ先生の帰宅時間が遅くなり

明日の仕事へのさし使いが出ないかと気になって思わずそう言つと

「いいんですよ。大好きな彼女のためですからね。」

シートベルト締めてください。絞めたら動きますから」

私は「大好きな彼女」と言われて思わず照れて顔を赤らめてしまった。

今が夜で良かった。

こんな顔 恥ずかしくてアラタ先生に見られたくないと思った。

私は言われたとおりにシートベルトを締めると

アラタ先生は車のエンジンをかけて静かに車を発進させた。

私はステアリングを握って運転しているアラタ先生の横で  
なんだか落ち着かない気分です座っていた。

いつも職場やインパルスで会うアラタ先生とはなんだか違う雰囲気  
がするからかもしれない。

慣れない雰囲気のままから、車内に静かに流れている音楽に耳  
を傾けながら外の景色に目をやる。

私はあまり夜にバイクで出かけたりはしない。

翌日の仕事の事を考えて早めに帰宅する事も理由の一つだが

一番の大きな理由は視界が悪くなり、危機回避に対する反応が遅く  
なりそう怖い・・・

それに、自分の身体能力がそんなに高くない事を自覚しているので、  
必要以上に無茶な事はしないようにしている。

運転免許は持っているが、車を運転するよりもバイクを運転する方  
が好きなので、

車ではなく単車を買って愛用している。

- ・・・維持費を無駄だと感じてしまうのも原因かもしれないけど・・・

バイクを運転する時には当たり前だが脇見が出来ない

それに、ヘルメットを被った状態で常に聞こえるのは

エンジン音・マフラー音・自分の呼吸音である。

助手席の窓の外を流れる景色と心地よい音楽が新鮮で

さっきまで落ち込んでいた気分が少しだけ上向きに変わった。

ちよっと現金かもしれない・・・。

「先生、よくドライブとか行かれるんですか？」

私はおもむろにそう聞くと 視線を前に向いたまま「たまに気分転換で行きますよ。」と、軽く返事が返ってきた。

ストレス発散か？

「そうですね。私は夜にあまり運転しないので、結構新鮮です。」  
「運転していたら、景色なんて見られないですからねえ。」 今日  
は堪能して下さい。」  
アラタ先生はそう言って笑い、私もつられて笑う。

それなら、遠慮なく堪能させて貰いまあゝす

しばらく会話も少なく外の景色見ながらゆっくりとシートのもたれ  
かかっている

信号待ちで止まった時におずおずと云った感じで私の方を見ながら  
「あのおゝ」  
と、何か言いづらそうに口ごもるアラタ先生。

私は赤く光る信号をボンヤリと見ながら

「なんですか？」と、答えると

「あのお、仕事以外の時に『先生』って呼ぶのを辞めてもらえませ  
んか？

仕事中みたいでちよつと・・・」

「あ、そうなんですか？ では・・・あ・・・赤松さん・・・」

「なんで？！いまさら苗字?!」

「え？ なんとなく？」

「今まで下の名前に『先生』で呼んでいて、敬称を取って呼んでく  
ださいってお願いしたら、なんで急に苗字になるんですか?!」

「だから、なんとなく・・・あ、青に変わりましたよ。」

信号が変わった事を知らせると先生は慌てて車を発進させる。

「ナジオさゝん」

運転しながら泣きそうな表情で訴えるアラタ先生に

「はいはい、判りましたよ。アラタさん」

私はクスクス笑いながらそう言っていると、先生は嬉しそうにほほ笑んだ。

二人で冗談を言い合いながら過ごしていると

車内のカーラジオから

不器用な言葉で愛を叫ぶ事で有名なグループな曲が流れ始めた。

「あ！！私、この曲好きです。」

「俺も、このグループの曲好きです。学生時代に良く聞きました。落ち込んでいる時に聞くと『頑張れ！』って応援されている気がするんですね。」

ナジオさんは？」

「私もなんですよ。」

御世辞にも綺麗とは云えない言葉ばかりの歌詞なのに、想いが伝わって言うか。」

「そうですね。あの曲を聴くと

想いを伝えるには難しい言葉なんていらなんて思えるんです。」

「本当に。」

そんな話をしながらしばらく車を走らせたアラタ先生はようやく目的の場所についたのか、車を駐車場に入れた。

「あの・・・ここってもしかして・・・」

「公園ですよ。」

そう。

アラタさんが車を停めた場所は

埋立地に作られたスポーツ施設などを集めたところにある公園で住宅街にあるのと違って

広い土地を活かしたアスレチックジムや芝生などがあって

休日の昼間であれば、家族連れがお弁当などを持って遊びに来そうな所なのだが、

今は夜なので人が殆どない・・・。

「公園ってね、子供の為だけにあるんじゃないんですよ？」

「はい？」

アラタさんが言いたい言葉の意味がいまいち理解出来ないでいる私に夜は大人も遊んでいいんですよなんて言いながら、アラタさんはゆっくりと私の前を歩いて行く。

結果、

子供のように遊びました（笑）

もう、誰もいない公園でかなりテンションが上がりました・・・等間隔に高低差をつけて並べられた切り株で押しあたり（危ないって！）

雲梯うんていの上を手放して歩いたり（だから、危ないって！！）

ロープを蜘蛛の巣のように張った場所で追いかけてこしたり（無茶するな！！）

絶対子供がいる前では出来ないような危険な遊びをして遊びました・

・

ある意味、大人の遊びだわ・・・

遊具と遊具の間に設置されたベンチで一息ついているといつ買ったのかアラタさんに缶コーヒーを渡された。

私は遠慮なく受け取って、ありがとうとお礼を言ってから一気に半分ぐらい飲んで喉の渇きを潤した。

「ほんと、公園って大人が遊んでも良い場所だったんですね」

私がそう言うとアラタさんは嬉しそうに笑う

「気分転換にいいでしょ？」

「はい・・・もしかしてアラタさんも気分転換に夜の公園で遊んだりするんですか？」

「ないですよ！ってか、ヤローが夜に公園ではしゃぎ回ってたら、いろんな意味で危ないでしょ?!」



確かに、そんな現場を目撃したら

私なら間違えなく回れ右してその場から即離れる……。

「……そうですね。」

確かに、男の人が夜の公園ではしゃいでたら、ちょっと怖いです」

そう言つて、苦笑いすると アラタさんは ね？ と云つて笑つた。

「ナジオさんならこういう場所の方が喜んでくれると思つて。」

アラタさんは頭をポリポリ掻きながら照れたようにそう言つた。

たしかに、夜景を見に行つたりするよりもこう言つた場所の方が気分転換になる。

アラタさんは、私の事をよく判つてるな。

逆の立場だったら、私はアラタさんをどこに連れて行くだろ

う……。

そう思つて、しばらく遠い目をして考えていると

「ナジオさん？」

アラタさんが私の方をうかがうように見ている。

「……あ、すみません。大丈夫ですよ。ちよつと考え事してました。」

私は慌ててそう言つと

「それならいいんですけど……。」

まだ心配そうな顔をしている

「いやあ、先生は私が喜びそうな所を良く御存じだと思つて。」  
私がそう言つと

「当たり前じゃないですか、いつもナジオさんのこと考えてますから。」

アラタさんは笑顔でしれーつとそんな事を言う。

言われた私は意味深なそんな言葉に返事も出来ずに俯いた

恥ずかし〜い！！　いきなりそんな事言つなよ〜〜〜お〜

声にならない心の叫びをあげながらも

動揺を顔に出さないように必死に落ち着こうと試みるが

逆に先ほどのアラタさんの言葉が耳にこびりついた様に

何度も何度も頭の中を駆け巡った

自分の耳のあたりがカァー！！と熱くなっているのを実感した。

ヤバ〜い！！　今が夜で良かった〜！！

こんな顔誰にも見られたくない！！

私は動揺を隠そうと必死になったが、

横でアラタさんが　クツツと笑いを堪えているらしく肩を震わせている。

「ナジオさん可愛い」ボソツと言われたそんな一言がまた私の羞恥心に火をつける。

だからあ〜！！　そんな事言わないでえ！！！！

つてか、顔が赤いのがモロバレじゃねえか！！

舞い上がりすぎて、言葉づかいは完全に地が出てる状態ですて・・・

しかも心臓は『これ以上はムリ〜い！！』　つてぐらいバクバクしてる！！

そりゃもう、短距離走を全力疾走してる勢いで！

そんな私を見てアラタさんは嬉しそうにニコニコ笑っている。

私は走って逃げだしたい想いをぐつとこらえてベンチの上でより一層小さくなった。

「ナジオさん、ちょっと歩きませんか？夜風が気持ちいいですよ。」

アラタさんがそう言って、立つように促して歩き出す。  
私は言われるまま立ち上がり、前を歩くアラタさんの踵を見ながら歩いた。

「ナジオさん、見てください。綺麗ですよ。」

私はそう言われて 顔を上げると

そこは、先ほどまでいた場所よりも少し開けた場所に出たらしく街灯の間隔が少し広く設置されているようで、少し薄暗い場所だった。アラタさんの方を見ると空を見上げていたのでつられて見上げる。そこには、私の住んでいる所よりも少し数が多い星空があった。

「この辺りは暗くても、遠くの方が明るいから余り見えないんですね・・・」

「そうですね・・・」

そう言いながらも、いつもより綺麗に見える星空に私は先ほどまでの恥ずかしさがどこかに行ってしまったように星空を見上げてた。

「プラネタリウム行きましようね。」

「はい」

そうして、しばらくふたりで夜空を見上げて過ごした

経過観察・3（後書き）

この二人の事なので、  
何事もなく

真っ直ぐ家に帰ったんでしょね・・・たぶん。

## ある日の休憩時間　↳コウイチ目線

いつもお昼休憩になると　私服に着替えて外に食べに行く。  
以前は一人でふらつと足の向いた方向のお店で適当に食べて返って  
来ていたのだが、

最近は赤松と二人で食べる事が多くなった。

やっぱり、一人で食べるより誰かと食べる方が楽しいと実感し始め  
た今日この頃。

そんな今日は、なんとなく食べたいと思う物が赤松と合わなかった  
ので

途中で別れて別に昼食を食べる事になったのだが、  
たまには一人になるのも悪くないかもしれない。

おっと？いきなりの前言撤回？

でも、俺は一人で自由に過ごすのがけっこう好きらしい。  
今頃気づいた。

そんなどうでもいい事をつらつら考えながら

診療所に戻ってくると　人の話し声が聞こえた。

休憩室に目をやると赤松とナジオさんが二人で話しているらしい

俺は取り敢えず、白衣に着替える為に更衣室に入って着替えを済ま  
せる。

本当はあまりつけたくはないのだが、目を保護するために作ったゴ  
ーグル型の眼鏡をかけ直して“コウイチ先生”の出来上がりである。  
このまま診療所に入るまでの時間をさてどうやって過ごそうかと考  
えて

更衣室にあるソファに座ったが

赤松とナジオさんの二人がどんな会話をしているのか気になって休  
憩室に向かう事にした。

「・・・結構敏感に反応してしまっ

「そんなんですか・・・ナジオさんってなにげに凄いですよね？」  
「なにげってなんですか?! なにげって!」

敏感? 反応?

なんだか、俺が好きそうなワードが聞こえてきたので  
思わず足を止めて二人の様子を窺うことにした。

ふたりは、4人掛けのテーブルに向かい合うように座って話をして  
いる。

話の内容は真面目な性格の二人の事だから、

職場で俺好みの話をしているはずはないと推察される。

ナジオさんにはいつも「この脳内どピンク!」と言われる事が多い  
俺。

確かにどピンクな時もあるが、常にはではない。

ナジオさんの反応が面白いから毎日からかって遊んでいるだけなの  
だが、どうやらナジオさんはお気に召さないらしい。

いつも「セクハラだ!」と言って怒っているが俺にはそんなに嫌が  
っている風には見えないのは気のせいなのだろうか。

まあ、そんなセクハラ発言もナジオさんだから問題ないだろう。  
俺の頭の中でそう結論づけていると二人が再び話し出した。

「そういう意味では得意かもしれません。プローブの要領で見えな  
くても

指先の感覚だけで特定できるから、スケーリングの要領でそつと除  
去って感じ?」

「あ、それ判る気がしますが やった事がないので俺にはちょっと  
判りづらいです。」

「そうですね。私はミオにやらされてますから、やる機会があり  
ますけど

先生なんてやる人居ないでしょ?」

「いないですね〜。あ、今度ナジオさんでためさせて下さいよ！」  
「いいですけど・・・」

赤松がそう言うとナジオさんはごにごにと俯いてしまった。

なんだ？ 仕事の話をしていると思ったがなんか艶っぽい話だったのか？

仕事の話をしているなら更衣室に戻ろうかと思っていたが艶っぽい話ならば是非俺も参加したい！

ナジオさんの反応最高に面白いし！

そう思っ止まっていた足を進めて休憩室内に入った。

「あ、コウイチ先生お帰りなさい」

そう言っナジオさんと赤松が俺を迎え入れてくれた。

「ふたりで何に楽しそうな話してるの？」

俺はそう言いながら赤松の隣の席に座ると

「空気中を伝わる音の振動と 耳かきの話です」

赤松が簡単に説明してくれたが、簡単すぎて意味不明・・・思わず

「はあ？」と云った表情になる。

「アラタ先生、その説明 全然説明になってませんよ。」

そう言っ苦笑いするナジオさん

やっぱり、こいつらの話す事は真面目だな・・・ん？耳かき？

「振動と耳かきがどうつながるの？」

俺は素直にそう聞く

「空気中に伝わる音の振動の方ですけど

携帯を鞆に入れている状態で道を歩いている時に、たとえば電車が傍を通過すると

空気中に伝わる振動で鞆が微妙に振動して、鞆の中で携帯が鳴ってバイブしているような感覚だっ話してたんです。だから、携帯が鳴っていないのに

電話がかかってきたと思つて携帯を取り出して『あれ？携帯鳴ってないや・・・』つて思ふ事がある。つて話をしてたんです。」「ナジオさん敏感に反応し過ぎですよね？」

確かに、敏感すぎる・・・つて、そんな振動によく気がつくな！

それよりも、

その誤振動（？）が空気中に伝わる音の振動だつてよく気がついたな！

「・・・そうだな・・・で、耳かきは？」

予想通りの真面目な話にちよつとがっかりしつつも次へ促す

「耳かきは、プローブを使う要領で耳垢の場所を特定して

スケーリングのように除去すると痛がられないつて話をしてたんです。」

予想を裏切らない真面目な話をしてたんだ・・・

やっぱり、こいつらはこいつらだ・・・。

昼間つから何を期待していたのが自分自身でもさっぱり判らないが、取り敢えず、ナジオさんをからかつて遊ぶ事にする。

「じゃあさ！！ミオさんのついででいいから今度僕の耳かきもして欲しいな！」

そう言うと、ナジオさんは怪訝な表情をして

「どうやったたら、ミオの『ついで』な状況が訪れるんですか？」

と、言ってくる。

これは期待を裏切らない反応をしてくれる前兆！

「状況なんて作ればいいんだよ。で、いつ作る？」

「そんな状況一生訪れないと思いますけど？」

「なんで？さつき、赤松もナジオさんの実験させてくれつて言つて



たじゃない。」

「~~~~!!! そ・・・それは!!!

お断りする前にコウイチ先生がこっちにいらっしやっただから返事をしてなかっただけです! ってなわけで、アラタ先生お断りします。」

「え? 『いいですよ』っていつてませんでしたっけ?」

「!!! いつ! 言ってますん!!!」

ナジオさんはワタワタと落ち着かない様子で言葉を重ねている。

うん、良い反応! ナジオさんのこの反応が楽しい。

落ち着いた雰囲気でも冷静に仕事をこなしているナジオさんがとるこっという反応が楽しくていつもちよっかいを出していると言っても過言ではない。

「残念。お断りされてしまいました。」

と、赤松は全然残念そうにない様子で言う。

・・・もしかして、

こいつもナジオさんのこの反応を楽しむために言ってるのか?

それなら赤松と同士になるのだが・・・

正直、この同士は要らない気がする・・・。

独りで堪能したい。

「耳かきって事は膝枕だよな? いいな、ナジオさんの膝枕で耳かきして貰ってるミオさん」

俺がそう言つと、目に見えて引いた様子をしながらナジオさんは

「何が良いのか理解できないんですけど・・・」  
と、言っている。

「目の保養?」

おどけてそう言つと、ナジオさんは本気で引いている。

あれ？やりすぎた？ 話題変えとこっ。

「それにしてもさあ、ナジオさんってさ、

俺と話をする時、喜怒哀楽の『努』の割合がマジで多いよね。」

「コウイチ先生が私を怒らせる事ばかり言うからです！」

「え、え、そんなつもり無いんだけどな。」

「いい加減、自覚して下さい。そのうちセクハラで訴えますよ？！」

「それは勘弁だな。」

「それなら自肅要請願います！」

「出来るかな。」

「是非して下さい。」

うん、良い反応。

打てば響くこのナジオさんの反応がホント堪らない

そうやって、俺はいつもナジオさん相手に遊んで仕事の疲れを癒しているのである。

今度はどんなネタで楽しもうかな！！

## 小話 距離

ローテーションが全く同じなので、週休二日の休日は同じ曜日の平日になる。

なので、二人は日曜日よりも比較的好いている平日に一緒に出掛けることが多かった。

そんな二人が訪れた場所が図書館・・・

「ナジオさん、どんな資料を探してるんですか？」

「郷土資料です」

「好きですね、歴史」

歴史的建造物を見るのが好きで、その建造物などを調べるうちに郷土研究の資料などに目を通すようになったのが切っ掛けだったりする・・・。

今回なぜ、図書館に訪れたのかというと

本当はふたりでプラネタリウムに行く予定だったのだが

事前に調べたところ、今日に限って休館日・・・

なので、ほかに行きたいところはあるか？

と、アラタさんに聞かれたので、以前から気になってた図書館が遠方にあると、ポロッと言った所

ドライブがてらにお弁当を持って朝から車で向かうことになったのである。

図書館の後は近くにある緑地公園でお弁当を食べてまったりとすこく予定である。

ミオの行っていた爽やかデートそのままだ・・・

そして今、二人で入口付近のロビーにいる。

私は自分の調べたい資料は決まっているので、そんなに時間はかか

らないと伝えると

アラタ先生はそれでは自分ものんびりと読みたい本を探して待つて  
いますと言ってくれたので、一時間後にロビーで待ちあわせして別  
れた。

私が探していた資料は「市史」と云った

その市限定の資料で資料が遡れる初めの方（石器時代とか）から始  
まって現代へと繋がっているの

平均10巻前後ある分厚い資料なのである。

重さにしたら、1巻あたり1キロ前後ぐらいはありそうな気がする。

・・・（マジで）

資料によってはとても貴重で持ち出し禁止になっている物が多く  
鍵のかかっている棚に収められている物もあつたりする。

私はそこまで貴重な資料を望んでいるわけではないので

一般に貸し出し可能な資料の前に立ってお目当ての資料を探した。

近代建築から始まった興味が

歴史的建造物へ進み歴史へと興味が移り変わっていった今

私のブームは「荘園」である。

荘園とは

奈良時代から戦国時代にかけて存在した中央貴族や寺社による私的  
大土地所有の形態または所有地の事である。

学生時代は歴史なんて全然興味もなくて、

ただただ

先生が黒板に書いた文字をマシンのごとく書き写すだけの毎日だ  
った気がする。

（そして、友達の間を飛び交っていく私のノート）

このブームもいつまで続くか判らないけれども、納得いくまで調べ  
て満足したい！！

それだけの事なのだが、この情熱が学生時代にあつたならば  
私は今頃 歯科衛生士をしていなかった事だけは事実である。

目の前にある資料に手を伸ばし、目次で私の興味がある年代を探して目的のページをさがしたり言葉だけで検索をかけたりにして調べていく。

その中からまた新たに興味のある事柄を探しては調べ、また探しては調べ・・・って、そんな作業を繰り返していく。

そうして、

興味のある事柄を示す資料は後でカウンターで印刷許可を貰ってコピーをさせて貰うか

量が少なければ、ひたすらマシンのごとく書き写す。

そんな作業をしていると、あつという間に1時間が過ぎてしまったのでロビーに戻った。

人影もまばらなロビーにあるソファに腰替えていたアラタさんは私に小さく手を振っている。

「お待たせしました。ずっとここに居らっしゃったんですか？」

待たせてしまった事の罪悪感を感じながらさういふと

私の頭にポンと手を置いてそんな事ないですよ。と言って立ち上がった。

「満足した？」

「はい、満足しました。連れてきてくださってありがとうございます。」

さういって笑うと、アラタさんは嬉しそうに目を細めた

そして、

二人でゆっくりとした足取りで玄関から表に出て駐車場に向かって歩いていく。

「目的の資料はあった？」

と、アラタさんがさう言った。

「はい、おかげさまで。さすが大規模の図書館の事があります！」

先生は、その間何を読んでいたんですか？」

私は微妙な距離を置いてアラタさんの少し後ろについて歩いていく  
「俺は、見逃した雑誌のバックナンバーを見つけたからそれを読ん

で過ごしてたよ。」

アラタ先生が気持ち後ろを歩く私に振り向き気味にそう言う。

「戦闘機ですか？」

「医療雑誌だよ。航空機ものなら逃さずに必ずGETしてるから  
そうですね」と言いながら

やっぱり、この人は・・・休日の時まで仕事の事を考えれる  
なんて

どんだけ真面目なんだか・・・。

と、心の中で思った。

すると、いきなりアラタ先生が私の腕をつかむ

「ん？」

私が不思議そうに取られた腕を見てアラタさんの顔を見ると

「微妙な距離が話にくいから、こうやって歩こう。その方が話しや  
すい。」

そういつて、アラタさんは自分の腕に私の腕を絡めさせて歩き出し  
た。

~~~~~!!

恋人見たい!! (恋人だよ!)

恥ずかしさから赤らめた顔を俯けながらも腕を離さず

少し浮足立った足をなんとか地につけてアラタさんのゆっくりの歩
調に合わせて歩いていく。

駐車場がもう少し遠かったらよかったな・・・。

目の前に見えてきたアラタさんの車を見ながらそう思ったことは
決して誰にも知られたくないと思った・・・。

定期健診・1

私は何気なく本日の自分が担当する患者さんの来院予定表を見て硬直した……。

奴らが来る……。

しかも、

狙い澄ましたかのように一番最後の時間に……。

今日は、遅番の日なのでお昼からの出勤して

午後から使用する消毒済みの器具などの片付けを独りでしている時だったのだ。

思いつきり嫌な表情をしたのを誰にも見られなくて済んでよかった。

憂鬱な気持ちを押し隠して業務をこなし、スタッフがちらほらと帰り始めた頃。

とうとう奴らが定期健診で来院する時間となった……。

「お願いします。」

そう言つて、二枚の診察券と保険証を受け付けに出して

待合室のソファに腰掛けたのは長身で細身の少年二人。

その姿を見たアルバイトの女の子達のテンションが一気に上がった。

二人は整った顔立ちをしており、学校ではさぞモテる事であろう。

私はため息をつきながら、二つ置かれたカルテを手にとって眺める。

田村諒成・仁成

その二人は兄弟で、私の甥っ子だった……。

私には14歳年の離れた姉が一人いる。

私が小学生の時に結婚して、すぐにリヨウが産まれ

その2年後にはジンが産まれた。

ジンが生まれてしばらくたってから、

実家の近くに家を建てて今でもそこで家族4人で暮らしている。

私は幼いころから、仕事をしていた姉に変わって二人の子守りを強制的にさせられていた。

そのせいで、私は姉と遊んだ記憶よりもリヨウとジンの二人と遊んだ記憶の方が多い。

気持ち的には甥っ子というより、兄弟と云った方がしっくりくる関係なのである。

そうして、今日の予約!!

本来ならば、コウイチ先生が担当なので アラタ先生が担当するこの時間に来院する事は無いはずなのだが、リヨウとジンが私の甥っ子だと知っているスタッフがこの時間に予約をいれたのだと・・・思う・・・。

もしくは、・・・

うちのねえちゃんがねじ込んだか・・・。

深くは考えたくないのだがおそらく後者である気がする・・・。そんな事を思いながら私は小さく気合いを入れて待合室へと続く扉を開けた

「リヨウ・ジン。どっちからする?」

私がつつきら棒にそう聞くと無言で手を上げるリヨウ。

そして、読んでいた本を投げるようにジンに渡して診療室に入ってきた。

また背が伸びたな・・・

私、すっかり抜かれちゃったよ・・・。

私は女性の中でも、わりと背が高い方なのだが、それをゆうに超している。

顔が良くて背が高いなんて、

モテる要素がいっぱいじゃん!!

・・・性格悪いけど。

そんな事を思いつつ、ユニットチェアへと案内して座らせてエプロンをかける。

「かわりは？」

「ない」

これ以上ないぐらい短いやり取りをしてから

私はドクターチェアに座って

倒すよ。と声をかけてユニットチェアを倒した。

「口開けて」

私はミラーを手にとってリヨウの口腔内をチェックしていく。

顔だけじゃなく、歯並びまで綺麗なりヨウ。

『男だつて、歯並びが綺麗な方がいいに決まってるじゃないか!!』と、幼い時に無理やりネエ（私が呼んでいる姉の愛称）に歯列矯正させられたおかげで

本当に綺麗な歯並びをしている。

それに、今まで虫歯になった事が一度もない。

高校生になった今でも、顔を会わせれば必ず私はリヨウの歯磨きをする。

小学生の時に、私に歯磨きをされるのが恥ずかしかったのか抵抗してなかなか歯磨きをさせてくれなかったのだが、最終的に母親怖さでしぶしぶ口を開いてくれていた。

今では何の抵抗も無く当たり前のように磨かせてくれる。

何だかんだ言っても、可愛い甥っ子の一人である。

一人で歯式（その人の治療痕や歯並びの特徴やその時の症状などをカルテに書きとる事）をとり。

ハンドスケーラーを取り出して、少しだけ付着した歯石をチョイチョイと除去してから椅子を起こして嗽をさせる。

「歯ブラシ持ってきた？」

私がそう聞くと、ごそごそとポケットからケースに入った歯ブラシ

を渡してくる。

私は歯ブラシを受け取ると、まずブラシの毛の部分を見た。歯ブラシの毛先が開いていないか、先端がへたっていないかをチェックする。

何度か使用しているがまだまだ使用可能な事を確認すると、またチェアを倒して少し磨き残しが合った場所に軽くブラシを当てて

歯垢しゅうを除去していく。

そして、またチェアを起こす。

「とくに、問題はないけど、最後にアラタ先生に見て貰うから、ここで嗽して待つててくれる？」

私はジンの方に行くから。」

私はそう言つてカルテに今おこなつた内容を記入する。

「アラタ先生つて誰？ いつものゴーグルじゃないの？」

あんた・・・仮にも先生に向かつて

『ゴーグル』つて・・・

どんだけ失礼な奴なんだ！！

私が陰でコウイチ先生の事を

『ゴーグル』つて呼んでいるつて

勘違いされたらどうしてくれるの！！

私は誰にも見られないように、顔をひきつらせた表情でリヨウを睨みつけ

「今の時間にコウイチ先生はいないの。この時間は赤松新先生しかいないから、最後にアラタ先生に見て貰うの。（お前、私の職場で不用意な発言をするな！！）」

私がそう言つと、リヨウはふう〜ん、と言いながら

長い脚を組んで背もたれにもたれるようにしてゆったりと座りなおした。

すかさず、アルバイトの女の子が待ち時間の暇つぶし用に情報雑誌をリヨウに差し出した。

リヨウはニッコリとほほ笑んで女の子に　ありがとう　と言って、受け取った。

ヤバイ!!

あのタイミングで

雑誌を渡したと云う事は・・・

『ゴークル』発言聞かれてた!!

女の子はリヨウにつこりとほほ笑まれてたせいか、顔を真っ赤に赤らめて準備室へと足早に逃げて行った。

・・・うん。

耳に入ってなさそう・・・。

そんな女の子の後ろ姿を見てから、私の方に顔を向けたリヨウに

リヨウ・・・私の職場で色気を振りまくな!

そして、間違ってもナンパはするな!!

と、眼だけでリヨウに訴える。

付き合いは誰よりも長いので、

私の言いたい事を察したりリヨウは小さく肩をすくめて雑誌に目を通し始めた。

さっさと、仕事しろって事か・・・。

私はアラタ先生にリヨウの状態を伝えてからジンを診療所内に呼ん

だ。

リヨウが『俺様』な性格ならジンは『気遣いの人』なのである。

幼少の頃のジンは、リヨウが何かを仕出かす度に、リヨウかわりにひたすら謝っていた。

気が小さいのかと思いきや、予想外の所で大胆になるのである意味家族の中で一番要注意人物なのかもしれない。

あのネエの子供だから

当然と云えば当然かもしれないけど……。

私はリヨウと同じようにジンをユニットチェアに誘導して座らせ
「ジン、かわりはない？」

と、リヨウの時とは打って変わって優しく問いかけると満面の笑みで
「うん、大丈夫だよナジイ」と、返事を返してきた。

なんて可愛いの！ ジン！！

とくに、リヨウの後だから

余計に可愛く見えるわ！！

親バカならぬ叔母バカぶりを発揮しそうになって、グツとこらえる。
私は声をかけてユニットチェアを倒してジンの口腔内（じゅうくわうない）をミラーで
確認していく。

ジンは歯列矯正の必要がないほど歯並びがわりと綺麗だった。

本当に、小さい頃から手のかからない子で、私はリヨウとジンのど
ちらかの面倒を見て欲しいと言われたら、迷うことなくジンを選ん
だ。

程良く甘えてくれるが、我儘な事は一切言わない良く出来た子なの
である。

ごく稀に、腹黒さが垣間見れて冷や汗かかされる時もあるが。

ある程度の所で甘えさせてストレスを溜めないようにはさせている

と出てこない黒さなので、大丈夫だと勝手に安心している。

私が見ていない時の

腹黒ジンの苦情は受け付けません。

私には遠慮なく甘えてくれるので可愛くって仕方がない甥っ子である。

リヨウと同様 歯式を取って ハンドスケーラーで少しだけ付着した歯石を除去して

持参して来た歯ブラシを出させて歯ブラシを当てる。

ジンは私の教えを忠実に守ってくれているので、リヨウのように磨く前に歯磨きのチェックなどしなくても、ちゃんとした物を使っている事は知っているので確認せずにそのまま使う。

そういえば、

ジンは私が仕上げ磨きをする事を

嫌がった事は一度もなかったな。

リヨウが嫌がって暴れて無理やり仕上げ磨きをした後にニッコリ笑って私に自分の歯ブラシを渡して仕上げ磨きをさせてくれるのである。

二人の仕上げ磨きをする事が、私の楽しみなのだと思っていたのかも知れない。本当に優しい子だ。

ジンの定期検診も無事に終わってアラタ先生に報告に行くとリヨウは治療を終えて待合室に戻っていた。

ジンをアラタ先生に任せて 私は片付けの準備に取り掛かる。受付でカルテのデータをパソコンに入力していると

カウンター越しにリヨウが覗き込んでくる。

「へえ〜。ナジオ、ちゃんと仕事してるポイじゃん。」

「ポイじゃないの。ちゃんとお仕事してるの!」

私は軽くリヨウを睨みながらそう言つと、テキパキと入力を済ませる。

「あんた達晩ご飯は？」

「母ちゃんが、ナジオと食べて来いって。」

「・・・言われると思つた・・・で、ネエは？」

「父ちゃんとデートしてくるって。」

自分たちの息子、妹に押しつけてくんなや！！

結婚して17年になるが、未だにネエと義兄ニライはラブラブで

事あるごとに、息子達を実家や私に預けてデートに出かけている。

姉夫婦の仲が良い事は喜ばしい事なのだが、

余りにも頻繁なので、いい加減ウンザリしていた・・・

それを察したのが、リヨウが高校生になってから二人の面倒をみる事は少なくなった。

ジンが料理作るのを少しずつ覚えてきたから食事面で問題が無くなつたからである。

一度ジンが作った料理を食べた事があるが絶品だつた。

パスタなんかもう最高！！

もしかしたら、

ネエよりも私よりも料理が上手になるかもしれない。

「判つた、片付けが終わつて私が着替えて来るまでどっかで待つて。」

私がそう言つと、治療を終えたジンが待合室に戻つてきた。

「ナジイ、僕ナジイの手料理が食べたいなあ。」

「あ、俺も！久しぶりにナジオの手料理が食べたい！」

リヨウはともかくジンに甘えられると嫌とは言えない。

「え？・・・いいけど、時間がないからあんまり手の込んだのは作れないよ？」

と、すぐに了承してしまう。

実は、今日 仕事が終わったらアラタ先生とインパルスに行く予定だったが急遽予定変更。

冷蔵庫の中にはあまり食材が残っていないが
駅の近くに遅くまでやっているスーパーがあるのでそこで材料を買って帰ればいいだけの話。

あとで、アラタさんに説明して別の日に変更してもらおう。

私の中の優先順位は

ネエ（リヨウとジンを含む） > 仕事 > アラタさん
なのである。

アラタさんには申し訳ないが、育ってきた環境と云うべきか、条件反射と云うべきか・・・。

だって、うちのネエはちょっと性格がぶっ飛んでて

ちよっと機嫌を損なおうものなら、大変な事になるんだから

！！

未然に人災が防げるなら、絶対予防するでしょ？！

人災・・・うちのネエはまさしく災害を巻き起こす人なのである。

「あ、それと、母ちゃんが。」

お金はナジオに任せておけって言った。」

やっぱりか！！ あのネエの事だから絶対云うと思った！！

私はこんな事だろうと思ってロッカーに置いてあった財布からしづしづりヨウとジンの治療費を出してお会計を済ませた。

この確信犯！！

甥っ子の医療費を妹に払わせるなんて、

どんな姉なんだよ！！

ってか、来るなら来るで、

事前に私に連絡しやがれ！！

私は心の中で絶対に口には出せない罵詈雑言を叫び続けた・・・。

私は『院外で待つてて』って言ったつもりだったのに、なぜか待合室で私が仕事を終えるのを待つている二人・・・

アルバイトの女の子達がソワソワして全然片付けがはかどらない事態に陥りました・・・。

なんとか、女の子達のお尻を叩いて片付けをさせて

全員更衣室に押し込んで着替えていた時も女の子達が大興奮で

「ナジオさん！！ さっきの患者さんとどういった関係なんですか？！」

「え・・・甥っ子」

「凄くカッコいいんですけど！！」

「彼女いるのかな？！」

「私はジンセイ君の方がいい！！」

「ええ〜！ やっぱリョウセイ君でしょ？！」

なんて、私に質問しているようで自分たちで盛り上がっている。

私は無言のため息をつきながら着替えを済ませて

女の子達が着替え終わるまでの間にアラタさんに急に二人とご飯を食べる羽目になったので、今日はインパルスに行けないとメールを送る。

あの二人とご飯を食べるより

アラタさんとインパルスに行きたかった！！

そんな思いを込めてメールを送信する。
すると直ぐに

『判りました。また今度ね。』

と返事が来る。
話の判る人でホント助かる。

私は戸締りをして更衣室を出て待合室で待っていた二人を迎えに行く。

そこはすでにバイトの女の子達が群がっており、なんとなく二人が学校でどういう風に過ごしているのかが垣間見えた気がした・・・。

この子たち、意外と積極的だったんだね・・・。

こんなの、お話の世界だけの現象だと思ってたわ・・・。

もう両手に花とはこの状態！って注訳がどこかに入ってるんじゃないかと、私はキヨロキヨロとあたりを見回してしまった。

「あのおく、お楽しみ在所大変申し訳ないのですが、戸締りをしたいので

外でやってもらえませんか？」

私がそう言つと、女の子達に笑顔を振りまいてリョウがさっさと診療所を出て行った。

その後ろを「では外に出ましようか」と女の子に声をかけながらジンが女の子を連れだつて出ている。

あいつら、この状況に慣れてやがる・・・。

取り敢えず、

全員が出て行ったので戸締りをして指さし確認でガス・水道の元栓電気・コンプレッサーの電源が切れているか確認してから戸締りを出して診療所を出た。

相変わらず続いているハーレム状態。

なんとなく場を崩すのは申し訳ないと思つて、無言で手を上げてリ

ヨウ向かって（ごゆっくり）と合図を送ってから、クルツと背中を向けて駅に向かって歩き出した。

さて、晩ご飯は何にしようかな・・・と、3人分のメニューを考えながら歩いていると後ろから急に左腕を取られた。

そして、私の腕に自分の腕をからめてくる。

その手は振り向かなくても誰だが判る。絶対にジン。

そう思つて左側を見ると、ニッコリ笑顔のジンが私の腕を抱え込むように掴んできた。

そして、その後ろを優雅に歩くりヨウの姿がちらり・・・。

昔は私の左手がジン、右手がリヨウと仲よく手を繋いで並んで歩いたが、手を繋いで歩くのはリヨウが小学校の高学年になったら止めた。

ジンも同時期ぐらいに手を繋ぐ事は止めたが、たまに腕を組んで歩くと言ふ。

何だかんだ言つても甘えん坊なのだろうと私なりに納得している。

「ナジイ、買い物して帰るんでしょ？ 一緒に行こう。」

そう言つて、べったり私にくっついてくる。

ある意味、

中学生にもなつて叔母と腕を組んで歩くのって

どうなんだろうね・・・ジン。

そう思いながらも、ジンに甘い私はされるがまま拒まずに歩く。

すると、人の後ろを歩くのが嫌いなリヨウは足早に私たちを追い抜いて、当たり前のように私たちの前を悠然と歩く。

「って、言うか！手料理が食べたいって言ったのに、なんで鍋?!」
リヨウがブツブツ文句を言いながら私達の前を歩いている。

「しょうがないじゃない！ 予定もなくいきなり食べざかりが2人

なんて直ぐに準備出来る訳ないでしょ!!」
そう。

メニューは何にしようかと、悩みに悩んだ結果、野菜もたくさん食べれる分量もそれなりにあるからちゃんこ鍋にする事にしたのである。

「僕は、ナジイが作ってくれるものなら何だつて喜んで食べるよ!」
そう言ってくれたジンはレジ袋にパンパンに詰まった食材を両手に提げて歩いている。

「ジン。本当に重くない?私、半分持つよ?」
スーパーを出る時に何も言わずにジンが荷物を全部持ってくれたのである。

さすがに、3人分の鍋の材料を一人で持つのは大変だったので、ジンが持ってくれて大助かりである。

しかし、荷物を全部持つて貰うと、逆に申し訳なくて困ってしまう。
「大丈夫だよ、ナジイには今からご飯を作って貰うんだから、これくらい当たり前だよ」

やっぱり、ジンは優しい子!!

なんて良い子なの!!

・・・それに比べて・・・。

「リヨウ、ジンの姿を見てなんとも思わないの?!」

私は前を歩くリヨウの背中に向かってそう言つと

「俺は、お前達の前を歩いているから、ジンの姿なんて目に入るわけないだろ。」

「なに言ってるの!!あんたも食べるご飯の材料なんだから、ちょっとぐらい手伝わらどうなの?」

「好きで荷物持ちを買って出たんだから、助けてやるのは逆に失礼だろ?」

いっすすがすがしいまでの手伝わない宣言に私は脱力しつつ、ジン

と並んで歩く。

相変わらず俺様なりヨウである。

そんなやり取りをしつつ私たちは部屋にたどりついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685x/>

あれはね。

2011年10月28日14時05分発行